ＳｋｙＨｉｇｈ，ＦｌｙＨｉｇｈ！

香澄かざな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＳｋｙＨｉｇｈ，ＦｌｙＨｉｇｈ！

【Ｎコード】

Ｎ９４５３Ａ

【作者名】

香澄かざな

【あらすじ】

「ならば、扉を開きましょう。あなたに翼の民の祝福のあらんことを――」夢の中の声に導かれ、少女はこの世界に来た。城へ向かう旅路の途中、少年は少女と出会う。二人の旅が今始まる。異世界召喚ファンタジーです。

プロローグ

プロローグ

男は道を急いでいた。

（まずいな。このままじゃ遅刻しちまう。前の村でゆっくりしすぎたかな）

男は――とは言っても、まだ少年だが、馬を急がせる。一刻も早く王都へ、城へたどりつくために。

「頼むぞ。相手は王様なんだからな」

手綱を持つ手に力が入る。

（それにしてもなんて遠いんだ。まぁ仕方ないか。王には昔からお世話になってたしな）

ヒヒーン！

突然馬がとまる。

「わっ！　ぶねっ！」

慌てて台車につかまる。土台がしっかりしていたため、かろうじて外に放り出されることだけはまぬがれた。

「なんだよ、急に止まったりして……」

そこで手綱を持つ手が止まり視線がある一点に釘付けになる。

少年の視線の先にあったもの。それは、道端に横たわる一人の少女だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「お客さん、連れの方は大丈夫かい？」

「はい。もうだいぶ落ち着いたみたいです」

「それは良かった。ではこれで。何かあったらすぐ呼ぶんだよ」

人のよさそうな宿の主人が部屋を出て行く。

ここはカザルシアのとある離れ村。　ジアノ。
あの後少年は、少女をここまで連れてきた。となると、当然城にたどり着くのは当分先になる。
「仕方ないよな。行き倒れをほっとくわけにもいかないし。王もきっとわかってくれるさ」
そう自分に言い聞かせる。
自分が助けた少女。
多少、気をとがめつつもベッドの上に視線を移す。
（変わった格好だよな。このあたりじゃ珍しい。よほど遠いところから来たんだろうな）
少女は今、気持ちよさそうに眠っている。
（何であんなところに倒れていたんだ？　まずはそれを聞かなきゃな。今さら村に帰るわけにもいかないから、連れて行くしかないだろうな）
少年が一人、物思いにふけっていると、少女が目を覚ました。
焦げ茶色の長い髪。明るい茶色の瞳が眠たそうにしている。
「気がついたか？」
「ここは……」
そう言いながらも、意識はまだ夢の中らしい。目がうつろなままだ。
「ああ、ここは……。あっ、おい、まだ立つな！　危ない――」
ドサッ、ゴンッ！
急にベッドからおりたため、立ちくらみをおこしたのだろう。支えようとしたが間に合わず、結果として少年の上に少女が倒れこむという形になってしまった。
（だから言っただろ）
胸中で嘆息すると同時に一つの疑問にたどりつく。
（……『ドサッ』はわかるけど何で『ゴンッ』なんだ？）
「おい、起きろよ。……おい？」
少女は再び瞳を閉じ、それきり動かなかった。

「おい、おいっ！」
激しく肩を揺さぶるも、目を開けようとしない。
（まさかこのまま動かないなんてことないよな……ん？）
少女の後頭部を見る。
そこには大きなコブができていた。目の前には洋服棚。
「なるほど」
ため息を一つつき、少女を再びベッドへ移す。
（誰かに似てるな。可愛いし。……じゃないだろ！　何を考えてるんだ俺は！）
「まずは頭冷やさないとな」
自分にそう言い聞かせ、水を借りるために部屋を後にする。

そして少女は、別の場所で――別の世界で目を覚ました。

Part，1

ジリリリリ……！
「……」
明るい茶色の瞳が眠たそうにしている。
ジリリリリ……！
「……」
まだ眠そうだ。
ジ！
寝ぼけまなこのまま、目覚まし時計を止める。
「……」
それでもまだ眠そうだ。
「……い！」
誰かの声がする。
「まりい！」
女の人の声。
「……はぁい」
こげ茶色の髪に茶色の目。
少女は、まりいは目を覚ました。

椎名まりい。十四歳。焦げ茶色の髪と明るい茶色の瞳をもつ中学三年生だ。
「早く行きなさい。学校に遅刻するわよ」
台所から再び女の人の声がする。
「まだ時間あるから大丈夫だよ」
と言いつつも、本当に遅刻しかねないので靴を履き、通学用カバンを肩にかける。
「行ってきます」

まだ家の中にいる家族にそう言うと、ドアを開ける。ドアの前には、まりいと同じ年頃の髪の短い女の子がいた。
「まりい、おはよっ」
「由香ちゃんおはよう」
佐藤由香。まりいの友達である。
「いつも言ってるでしょ。もっとシャキッとしなさいよ」
「うん……」
「ほらほら、言ってるそばから。そんなんじゃ今日の体育の授業バテるわよ？」
「それは大丈夫だよ」
「はいはい。とにかく学校行くわよ。ほらっ。急ぐ！」
そう言って、掛け声と共にダッシュする。
「まってー！」
それにならい、まりいも慌てて後をついて行った。

「まりい、そこっ！」
「はいっ！」
バシッ！
ボールがコートに炸裂する。
今は四時間目、体育のバレーボールの授業中。
「椎名さんって体育になると性格かわるよねー」
「ほんと。いつもはおとなしいのに」
まりいは、見かけとは裏腹に運動神経がいい。普段はおとなしいだけに、周りからすれば余計にギャップを感じてしまうのだろう。
「そんなことないよ」
「そんなことあるって絶対」
クラスメートの一言に周りがうなずく。
「ほんとにそんなこと……」
ズキッ。

「……っ！」
『？』
まりいの一瞬見せた苦痛の表情に周りが怪訝な顔をする。
「授業終わるぞー。みんな整列！」
が、ちょうどのタイミングで体育教師が号令をかける。
「集合だって。早く行こうよ。」
さっきの表情を打ち消すように、クラスメートに呼びかけると、すでに集合しているクラスの輪の中にかけていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「まりい、今日のバレー大活躍だったよね」
「うん！　体育ならまかせて」
学校の帰り道。いつものように由香と帰路につく。
「これが男子の前でもできるといいのに」
由香のついたため息に、まりいが硬直する。
まりいは対人恐怖症、特に男子に対して――がある。そうなったのにはちゃんと理由があるのだが、それは後ほど話すことにしよう。

「まりいは、もっと多くの人と接しなきゃだめね。そしたらちゃんと話せるようになるでしょ」
「あははは」
由香の言葉も当たっているだけに苦笑せざるをえない。
「それはそうと、体は大丈夫なの？　確かに大活躍だったけど、平気なの？」
友人が心配そうな顔をする。
「やだ、由香ちゃんそれこそ心配しすぎ……」
ズキッ！
「……っ！」
数時間前と同じ感覚に体をくの字におる。

「まりい？」
「……大丈夫。すぐ良くなるから……」
薄れ行く意識の中、まりいは地面に崩れ落ちた。

Part，2

「……」
あれ、ここどこ？
何で私、ベッドの上にいるの？
「気がついたか？」
第三者の声にはっとする。
部屋を見回すとそこには少年がいた。
「ここは……」
寝ぼけまなこのまま、何気なく目の前の少年にたずねる。
「ああ、ここは……」
変わった格好の人。髪なんか伸ばして女の人みたい。男の子なのに――
「……？」
ここで、まりいの思考が正常になる。
……男の子！？
「！？」
慌ててベッドから起き上がる。
うそっ！？　なんで私、男の子の部屋にいるの！？
「あっ、おい、まだ立つな！」
突然の状況にパニックにおちいり、少年の静止の声も耳に届かない。
なんでこっちに来るの！？　来ないで！！
「危な……」
ドサッ、ゴンッ！
こうしてまりいは気を失った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「まりい、起きて」
……誰？
「まりい！」
この声は――
「由香……ちゃん？」
目を開けると、そこには親友の顔があった。
「よかった。急に道端で倒れるんだもの。心配したわよ」
「……ごめん」
「まあ、こればっかりは注意の仕様がないからしょうがないけどね」

由香がため息をつく。
まりいは病気を患っていた。
気管支によるもの。普段は生活に何の支障もきたさないが、いったん発作が起こるとひどいことになる。しかも、まりいの場合、一度発作が起きると回復するまでかなりの時間を要する。
したがって、学校も休みがち、授業に参加できない、人と接する、会話する機会が少ない。
それらが生じて結果、対人恐怖症となってしまったのだ。特に男の子に対してと言うのは、子供の頃、男子にからかわれていたからだろう。
「あの男の子は？」
「男の子？」
由香が怪訝（けげん）な顔をする。
「きっと夢を見てたのね。さっきもずいぶんうなされてたもの」
「夢……」
そうか、夢だったんだ。そうだよね。
でも、夢にしては妙に現実味があったような気がするけど。
「由香ちゃんにお礼を言いなさいよ。あんたをここまで連れてきてくれたんだから」
そう言って、ジュースを持った女性がまりいに近づく。

「つかさ、さん」
「ここに来て三年たつんだから、いい加減『つかささん』はやめてくれない？」
苦笑しながら女性がまりいにジュースを渡す。
つかさと呼ばれる女性。二十代に見えるがこれでも三十路を越えている――は、まりいの唯一の家族になる。
まりいとつかさは義理の親子。まりいは孤児だった。
十一年前、とある場所に女の子が置き去りにされていた。女の子は泣いていて、住所や家族のことを聞いてもわからないと首を振るだけだった。その女の子がまりいだ。
唯一の手がかりとなったのは、彼女の服のポケットに入っていた『マリィ』をよろしくお願いします。と書かれた手紙。それがまりいの名前の所以となるのだが、本人はそのことを知らない。
『まりい』と言う名前の孤児。今時分では珍しい名前の人間は少なくないが、それでも当時は十分珍しい部類に入った。施設に入ってからも、まりいはからかわれる――いじめを受けることがあった。もちろん、かばってくれる友達もいたが。
『変な名前ー』
『ガイジン！　ガイジン！』
病気がちなのもあって、まりいはますます消極的になっていった。

十一歳の時に現在の母親――つかさに出会い、今の中学へ引っ越してきた。
それまで人と話をすることがほとんどなかったまりい。病気がちなのは相変わらずだったが、学校に行けるようになったのは由香とつかさの賜物だろう。
それでも、まりいはつかさに馴染めていなかった。それから、自分の名前にも。
そもそも、つかさとまりいの馴れ初めが変わっている。
「話し相手がほしいからきた。一人だと退屈でねー」

まるで猫を拾いにきたようないいぐさ。施設の面々も、誰もいい顔をしなかった。
「あんた、まるで猫みたい。近づこうとするとすぐに逃げてくんだもの」
当時のまりいは誰とも口をきこうとしなかった。
「一緒に来る？」
それが二人の共同生活の始まりだった。会話が為されることは少なかったが、それでも三年の月日が流れている。
「さあさあ、今日はもう寝る。由香ちゃんも今日は遅くまでごめんなさいね」
時計は夜の八時をすぎていた。
「えっ、もうそんな時間？」
由香自体も時間が流れていたことには気づかなかったらしい。
「いっけない、急いで帰らなきゃ。まりい、またね」
「途中まで送るよ」
「平気平気。隣なんだから」
「いいの！　私が送りたいの」
「おばさん……」
由香がつかさに目を向ける。
「まったく、妙なところでガンコなんだから。玄関までよ？」
つかさのため息が背後で聞こえた。
「ごめんね。遅くまで引き止めちゃって」
「ううん。私が勝手に残ったんだから。じゃあね」
そう言って、由香が玄関を後にする。
「まりい」
「何？」
「親のこと、あんまり根に持たない方がいいよ。私が言うのもなんだけどさ、ずっと引きずってるでしょ？」
とたん、まりいの顔に赤みがさす。
「引きずってなんかないよ」

むきになって反論する時点で、充分引きずっているということになるのだが。まりいはそれに気づいていない。
「そう？　けど過去のことでクヨクヨしたってしょうがないんだから」
友人の声に表情が硬くなる。それは、まりい自身もわかっていた。わかってはいたが。
「……ごめん。なんか疲れちゃった。また明日ね」
「まりいっ」
由香のセリフもままならぬまま、玄関のドアを閉めると、部屋に戻る。
どうやら本当に疲れていたらしい。パジャマに着替えてベッドに横になる。
「引きずってなんか、ない……」
一人つぶやくと、そのまま深い眠りに落ちていった。

Part，3

どうしてだろう。

小さい頃からずっと思ってた。
なんで私は一人なんだろう。
みんな、お父さんやお母さんがいるのに。
なんで私は体が弱いんだろう。
みんな、外で元気に遊んでいるのに。

この世界が嫌いなんですか？
わからない。

今の生活が嫌なんですか？
そうじゃない。だけど。

変わりたいんですか？
――はい。

ならば、扉を開きましょう。

ただし、これはあくまでもきっかけにすぎません。それから先は自分で見つけてください。
あなたに翼の民の祝福があらんことを

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「おい、起きろ」
耳に入るのは少年の声。

「起きろってば。生きてるんだろ？　目、開けろよ！」
眠っている者を起こすには、やや緊迫感のあるそれに、まりいは重たいまぶたを開ける。
……あれ？
こんな光景、前にも見たことがあった。あの時は男の子の顔が目の前に――
目を開けると、
「やっと気がついたか」
「！？」
『あの時』と同じく、目の前には少年の顔があった。
「アンタ、二回も気絶したんだぜ？　はじめは起きる時に頭ぶつけて。まあアレは俺の不注意でもあったけど。でも俺を見てそんなに怯えることないだろ。一応命の恩人ってことになるんだから――って、おい？」
少年がまだ言い終わらぬまま、まりいは慌てて毛布を頭にかぶる。

何？　どうして？
どうして夢の中の男の子がここにいるの！？
まりい達のものと似ているようで微妙に違う服。
栗色の髪は一つに束ねてあり、黒い瞳が心配そうに少女を見つめている。
間違いない。昨日の男の子だ。でもどうして？
まりいは完全にパニック状態に陥っていた。それを知ってか知らずか、少年は彼女を見てため息をつく。
「……俺ってそんなに信用ない？　こっちとしては『助けてくれてありがとう』の一言くらいあっても罰は当たらないと思う」
助けてもらって？
助けてもらって――私、この人に助けてもらったの？
ここで少女の思考回路がようやく正常に戻る。
「……助けてもらってありがとうございます。あの、あなたは……

？」
言われるままお礼を言うと、
「俺？　俺はショウ。ショウ・アステム。運び屋だ」
少年は――ショウはそう名乗った。
「アンタの名前は？」
「アンタって、私のこと？」
「他に誰がいるんだよ」
確かに。ここには少年と少女、つまりはショウとまりい以外、誰もいない。
「私……」
そういえば、ここはどこなんだろう。さっきまで自分の部屋で寝ていたはずなのに。
「私は……」
少女は自分の服装をかえりみる。
それは寝る前に着替えた時と同じ格好、パジャマだった。
「……」
目の前には昨日と同じ男の子。でも、あれは夢だったはず。
夢――
「おい？」
ショウもまりいの異変を感じたのか、こちらに近づいてくる。
「そうか、これは夢ね」
「……は？」
まりいの口からもれた言葉に、ショウはあっけにとられてしまった。
そうだよ、これは夢。
夢じゃなければこんなことはありえない。
「それに、どこかで声を聞いたような気がするし……」
「何わけのわからないこと言ってるんだ？」
「わっ！！」
慌てて毛布を再び頭までかぶる。気がつけばショウが目の前まで

来ていた。
「ご、ごめんなさい。私の名前ですよね。私は……」
「なあ、アンタ」
まりいが言うより早く、ショウが言葉を紡ぐ。
「アンタ、もしかして――」
そう言って顔を近づける。それに比例して、まりいは毛布をかぶったままずるずると後ずさっていく。
「もしかして、記憶喪失なのか？」
「……えっ？」
今度はまりいがあっけにとられる番だった。
「俺がさっきアンタを受けとめれなかったから」
真面目な顔で何言ってるんだろう、この人。
それまで、まりいが少年に――ショウに抱いていた警戒心が一気に吹き飛んでいく。
「なあ、頭大丈夫か？　他にどこかぶつけてないか？」
表情を崩さないままショウが顔を近づける。彼としては、まりいに怪我がないか確かめようとしたのだが、まりいにとってはそれどころじゃない。
「だ、大丈夫です。どこも痛くないです」
なんとか答えるも彼は表情を変えようとしない。どうやら極度の心配性らしい。
「じゃあアンタの家は？　どこに住んでるんだ？　親はどうしたんだよ？」
それ以上顔を近づけることはなかったが、今度はたて続けざまに質問する。
「えーと……」
まりいは別の意味で戸惑っていた。
よくわからないけれど、これは夢なんだ。だからこんな所にいるんだ。夢の中の少年に、『私は日本という国に住んでます』と言って通じるんだろうか？

「やっぱり答えられないんだな？」
沈黙を肯定だと認識したらしい。ショウが不安の色を濃くする。
「いえ、だから、それは、あのっ」
まりいもまりいで、自分でも何を言っているのかわからない。
違うんです！　記憶喪失じゃなくて、うまく答えられないだけなんです！
「わけありみたいだな。わかった。もう聞かない」
ショウは近づけていた顔を元あった位置に戻し再びため息をついた。
全然わかってない！
そう叫びたかったが、できないのがまりいである。
「俺はこれから城に行くけど、アンタはどうする？」
「城？」
「リネドラルド。知らないのか？」
そう問われて答えられるはずもなく。無言でうなずく。
『……』
沈黙が流れる中、二人は同時に全く違うことを考えていた。

やっぱり、これは夢なんだ。
『リネドラルド』なんて場所、見たことも聞いたこともないもの。きっと外国の夢を見てるんだ。

やっぱり、記憶喪失なんだな。
リネドラルドを知らない奴はこのあたりじゃまずいない。重症だな、これは。

「……一緒に来る？」
沈黙を破ったのはショウの方だった。
「一緒？」
「一人じゃ何もわからないだろ？　環境が変われば何かが変わるか

もしれないし」
何かが変わる……？
その一言で、まりいの中の何かがはじけた。
「行きます！」
今までの反応が嘘のよう。まりいはそう言ってショウに詰め寄った。
「そんなに簡単に決めていいのか？」
案の定、まりいの態度の変わりようにショウのほうはたじろいでいる。
「いいんです！」
記憶喪失じゃないけれど、もしかしたらこの夢の世界のことを知る上で便利なのかも。それにあの声。

ならば、扉を開きましょう。

もしかしたらこのことだったのかもしれない。きっかけをもらったんだ。後は自分で頑張っていくしかないんだ。
「まあ、いいか。じゃあ名前教えてくれ。それくらいいいだろ？」
まりいはようやく、まだ自分の名前を言っていなかったことに気づいた。
「私は椎名です。椎名まり――」
「わかった、シーナだな」
まりいが名乗りを終えるより早く、ショウがそう言ってうなずいた。
「え？」
「『シーナ』なんだろ？　違うのか？」
そう言って顔をしかめる。
「……はい」
本当は『椎名まりい』だと言おうとしたんだけど。あえて追求しないようにした。

……夢だもの。名前くらい、いつもと違っていてもいいよね。
「『シーナ』です。これからよろしくお願いします。ショウ君」
「ショウでいい」
「でも……」
「旅をするのに堅苦しい言葉なんか使ってても仕方ないだろ。その丁寧口調もやめろよ」
「……」
この人、いい人なんだ。
せっかく、目の前の人がこう言ってくれてるんだ。男の子だけど、頑張ってみよう。
「よ、よろしく。しょ……」
がんばらなきゃ。
「……ショウ」
「？　ああ、よろしくな」
一瞬怪訝な表情をするも（まりいが緊張のため顔を赤くしていたからだ）、それをくずしお互い握手を交わす。

かくして、まりいの旅が始まった。

Part，4

「おい、起きろよ」
少年の声に、まりいは慌ててベッドから跳ね起きた。
「今日は一発で起きたな。今のうちに支度しとけよ、シーナ」
彼女の目の前には栗色の髪に黒い瞳を持つ少年、ショウがいる。
「シーナ？」
そんな名前の人、ここにいたのかな？
目をこすりながら、まりいはショウに問いかける。
「アンタの名前だろ。まだ寝ぼけてるのか？」
「名前……あっ！」
ため息交じりの返答に、昨日までの記憶が鮮明によみがえる。
そうだった。これは夢の続きなんだ。
日本とは違う、変な場所に来て、目の前の男の子――確かショウ君だっけ、彼に助けてもらったんだ。それで私は記憶喪失の『シーナ』って名前の女の子になっていて。
「どうかしたのか？」
「なんでもないです。おはようございます。ショウ君」
深々と頭を下げるも少年からの返事はない。
まりいが首をかしげると、少年は無言で顔を近づけてた。
「あっ、あの……？」
「昨日も言ったよな。その堅苦しい言葉遣いはやめろって」
「……」
確かに言われていた。しかし、昨日あったばかりの人間（しかも男の子）を呼び捨てにするという行為は、彼女にとってかなりの難問だった。
「黙ってないでもう一回言ってみろ」
けれども少年は執拗にそれを迫ってくる。
「……おはよう、……ショウ」

まりいは精一杯の勇気を振り絞り、ようやくそれを口にした。
「よし」
まりいの精一杯が通じたのか通じなかったのか、ショウは一人満足げにうなずくが、まりいはそれを見ていなかった。
「なんで固まってるんだ？」
「……なんでもない、です」
いくら夢とはいっても、いくら本人からそうしろと言われていても、やっぱり抵抗がある。
早く慣れなきゃ。ショウに悟られないよう、まりいは小さなため息をついた。
「でも支度って言われても、私着替えなんてもってません」
そう言って自分の格好をみる。まりいは家にいたと同じ服、つまりはパジャマのままだった。
「持ってたじゃないか。昨日の黒い服でいいだろ」
「黒い服？」
そんな服持ってないのに。
「まあアレは目立ちそうだからな。仕方ない、オレのを貸すよ」
そう言って荷物から服を取り出す。
「いいです！　服なんて！」
顔を真っ赤にして（男の子に服を借りるなんてとんでもない！）首をぶんぶんふる。
「仕方ないだろ？　持ち合わせがないんだ。それとも、その格好で出歩くつもりか？」
正論をつかれ、まりいは押し黙る。
「向こうで支払いしてくる。着替えが終わったら呼んでくれ」
そう告げると、まりいを残し、ショウは一人部屋を出た。
変わった格好だったよな。黒の上着に同じ色のスカート。襟にスカーフなんてついていたし。こいつ、本当にどこから来たんだ？記憶喪失だから確かめようがないか。
そんなことを考えながら。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「結構さまになってるな」
「……嬉しくないです」
ブスっとした表情でつぶやく。
「仕方ないだろ。女物の服なんて持ってないんだから」
青のパンツに白のフードつきの上着。今まで旅をしていたショウがたくさん服を持っているはずもなく。彼から渡された服(ショウのものだ)を着たものの当然のことながら大きい。袖の部分は折り曲げて調節はしているが。
髪は紐をもらってポニーテールにした（ショウ自身も首の下あたりで一つに結んでいる）。
「じゃあ出発するぞ」
「はい」
「……」
「じゃなくて、うん！」
こうして二人は宿を後にした。

「そのリネドラルドってところまで、どうやって行くんですか？」
「これに乗っていくしかないだろ」
「？　これって……もしかして、『これ』？」
まりいはショウの後ろにあった『これ』――馬車をまじまじと見た。
「もしかして見たことないのか？」
「そんなことないです。でも乗ったことなんて一度もなくて」
馬車の荷台に乗り込みながら、そうつぶやく。
まりいがそう言うのも無理はない。
馬車や馬はテレビでならほとんどの人が目にするだろう。だが実

際のそれを見る人は限られている。ましてや同世代の少年が馬を操る姿など、本当に限られている。
「ちゃんと乗ったか？　ゆれるから、荷台の端でも掴んでろよ」
そう言って、彼は馬を走らせた。
嘘みたい。本当に私、知らない場所を旅してるんだ。
馬車の中で、まりいはそれをひしひしと実感していた。
「そんなに珍しいのか？　だったらこっちに来て見ればいいだろ」
ショウが自分の隣を、御者台を指して言う。
「いいです。邪魔になるといけないし」
本当は男の子の隣に座るという行為自体に抵抗があったりするのだが。
「……」
ショウは黙ってそれを見ると、
「わっ！」
まりいを無理矢理自分の隣に座らせる。
「そんな顔でいいって言われてもこっちが気になってしょうがないんだ。黙って見てろ。少しは自分のこと思い出せるかもしれないだろ」
「……はい」
ショウが悪い人でないことはわかる。わかるのだが――
（ちょっと強引じゃない？）
そう言いたくても言えないのがまりいだ。他にすることもなく、ショウの隣で景色を堪能する。
見渡す限りの草原。アスファルトなどあるはずもなく、空は青々としている。
しばらくすると、街らしきものが見えてきた。
「アレが王都、リネドラルドだ」
リネドラルド。この国の首都、王都に当たる都。都だけあってあたり一面が活気にあふれている。
「王都って何ですか？」

「カザルシアの主要都市のこと」
「カザルシアって？」
「……」
ショウは一度だけまりいを見ると軽く首を振った。
二人はそれから宿に着くまでずっと無言だった。

もしかして、余計なこと聞いたのかな？
ダメだな。本当に覚えてないんだな。まずは一般常識から教えないとな。

やはり全く正反対のことを考えながら。

ほどなくして、城の一番近くにあると言われている店に宿をとることにした。
「ようやく着いたな」
荷物を部屋に置くと一人感慨深げにつぶやく。
「本当ですね」
「え？」
「疲れたんじゃなかったんですか？」
まりいが不思議そうな顔をする。
「ああ、うん。そうだな」
まりいに言われ苦笑する。独り言だったつもりが、しっかり聞こえていたらしい。
本当に疲れてたんだな、俺も。　けどここで休んでいるわけにもいかないよな。王の依頼だったし。
「これから城に行って来る。アンタはその間休むか散歩でもしてろよ」
簡単に身支度を済ませると、もう一人の部屋の住人に言う。
「そんなに時間がかかるんですか？」

「話しだいだな。なんともいえない」
城って、一体何の用があるんですか？
そう訊ねてみようとしたが、彼女にはできなかった。
なぜなら、そう言った彼の表情が心なしか幾分引き締まっているように見えたからだ。
「じゃあな」
そう言うと彼は部屋を出て行った。

Part，5

「このような時期に呼びつけて悪かったな」
この世界ではそう珍しくない、栗色の髪に青い瞳を持つ中年の男性が語りかける。
「そなたを呼び出したのは他でもない。我が后（きさき）の妹の行方を捜してほしいのだ」
「妹姫、ですか？」
ここはリネドラルドの城内。ショウは自分と同じ、栗色の髪を持つ男性――王と言葉を交わしていた。
それなら散々捜していた。それはもう物心つく時から。でも見つからなかった。
「無理だと言うことは重々承知しています。せめて元気な姿を一目だけでも見たいのです」
王の隣で上品な金の巻き髪を束ねた女性、王妃が言う。
「そのような任をなぜ私に？」
「荷が重いか？」
「いえ。なぜ私のような若輩者に任せるのかと思いまして。腕のたつ者なら他にもいるでしょう？」
実際そうだった。ショウは１４歳。城を出入りするには年齢が幼い。運び屋という仕事をしているのでそれなりに腕はたつが、それでも王の勅命を受けるにはまだ幼すぎる。
「『フロンティア』という言葉を知っているか？」
それまで隣で話を見守っていた王が口を開く。
「誰でも知ってますよ。おとぎ話でしょう？」
「それが本当にあるとしたら？」
「！？」
そんなものが実在するのか？　ショウはそれに答えるでもなく、ただただ王を凝視していた。

フロンティア。未知なるもの。
それは宝石とも、人の名前とも言われているが実際は定かでない。色々な話に出てくるものの数が多すぎて特定できないのだ。
唯一の共通点は、願いをかけた者の望みをかなえるということ。
しかし所詮はおとぎばなし。語り継がれることはあっても実際に探そうとする人はいなかった。一部を除いては。その一部も金持ちや探検家ぐらいなものだが。目の前の人物は当然前者に入る。
俺に金持ちの道楽を手伝えって言うのか？
「私にフロンティアを探せと？」
そんな内心を表に出さないよう、ショウは問いかける。
「難しいということはわかっている。だが后（きさき）の夢にかけてみたいのだ」
「夢……？」
「先日、妹の夢をみたのです」
王の話を引き継ぐように王妃が語りかける。
「あの子は幸せそうでした。黒髪の男性と小さな女の子にかこまれて。あんな笑顔は見たことがありません」
「……」
「夢の終わりに、あの子は言いました。『フロンティアを。それが私とあの子をつなぐ鍵だから』――と」
普通なら、ただの夢だと笑うところなのだろう。
だがショウは笑わなかった。笑えなかったのだ。なぜならカザルシア王家の女性には夢見の力があると言われていたから。
夢見の力。言葉通り、いずれ現実におこる、もしくは過去に実際に起きた出来事を夢を通じて知る能力。不確かなものではあるが事実である（もしくはこれから起こりえる）確率は非常に高い。このことは城内に携わる人物しか知ることができない。なぜショウが知っているかというと単に父親に聞いていたからなのだが。
「『フロンティア』を探し、ひいては妹姫の行方をつかめと？」
だが実際、姫と言っても王妃の妹なのだから実際はかなりの年齢

になるのだろうが。
「そうだ」
相変わらず無理難題を言ってくれる。
それとも、そう言っているのは自分を信用してくれていると思ってもいいんだろうか？
「『あの子』が誰のことを指すのかはわかりません。夢に出てきた男性と女の子。おそらくそれは……」
三人の間に沈黙がはしる。
一人は誰を指すのか。それはこの国の人間なら誰でもわかっていた。わかっていても、誰も口に出そうとはしなかったが。
「あなたに捜してもらうのが一番確かだと考えたのです」
王妃の一言が重い沈黙をやぶる。
「それも、夢見の力ですか？」
「いいえ、これはわたくしの意思です。アスラザの息子であるあなたなら……」
アスラザ――父親の名前にわずかに反応するも、しばし目を伏せる。
「わかりました。その任、うけたまわります」
結局こうすることしかできなかった。
王にはさんざんお世話になっている。その王からの依頼を断れるはずがない。
「半年、半年たったら戻ってくるのだ。どのような結果でもかまわない」
「はっ」
二人の目の前で礼の形を取る。
「……悪いな。子供のお前にこんな役目を押し付けるなんて。まったくひどい大人だな」
急に口調を変え、王――栗色の髪の男性が苦笑する。
「やめてください。周囲の人間が見たらなんと言うか……」
「だから人払いをさせたんだ。友人の息子と話をして何が悪いんだ

？」
青い瞳がいたずらっぽく笑う。
「それでも、私……俺はただの臣下の一人にしかすぎません。でも……御心使いありがとうございます。おじさん」
ショウはこの王が好きだった。小さい頃はお忍びで何度も家に遊びに来てくれた。
『父の昔からの親友』小さい頃はその言葉を信じて疑わなかった。もちろん、それは嘘ではない。ただその正体が尋常ではなかったのだが。
「ショウ、実はあなたにもう一つお願いがあるの」
「は……？」
これまでとは違う、含みをこめた笑み。予想外の事態にショウは目をしばたかせる。
「シェリア、こちらへ」
「はい、叔母（おば）様」
明るい声とともに二人の少女が姿を現す。
金色の髪に明るい茶色の瞳。漂う気品は確かに王家独特のものだった。ただし、身に着けている服は王族にしては味気なさすぎるし、瞳の色は元気すぎるようではあったが。
その傍らにいるのは同じく明るい茶色の瞳に焦げ茶色の髪をもつ少女。
「……！？」
彼は絶句した。
なぜなら、少女の一人が自分が数時間前まで一緒にいた女の子だったから。
『なんで……？』
期せずして二人の声が重なる。
どうして宿にいるはずのシーナがこんなところにいるんだ？　迷子になったとしても、これはあんまりだろう？
「そなたの知り合いか？」

王の言葉で現実に戻る。
「はい。ここに来る途中で知り合ったんです。もしかしたら彼女の記憶を探す手がかりがつかめないかと思いまして……」
戸惑いながらも正直に答える。
「そなたは記憶をなくしているのか？」
青い瞳を今度は視線をまりいの方に向ける。
「えっと……」
急に話題をふられ、まりいは困ってしまった。
自分は記憶喪失ということになっている。それはわかった。でもそれを目の前の人に言っていいの？　そもそも、自分がこんな所にいること事態間違いなんだ。なんで私、お城の、王様の前にいるの？
「叔父様、それはあまりにも失礼ですわよ？　この子が困ってますわ」
もう一人の少女が先ほどの王と同様、いたずらっぽく笑う。
「そうだな。ぶしつけだった。非礼をわびよう」
王もそれに苦笑で答えると素直に頭を下げる。
「え、あの……。そんな、あやまらないでください」
まりいはまたもや困ってしまった。王と呼ばれる人物がこうも簡単に頭を下げるとは思ってもみなかったのだ。彼女にだって王様がどんな人物かということの予想はつく。とは言っても『威厳があって偉そう』くらいのものだが。
「また城を抜け出していたのか？」
苦笑をくずさないまま、青い目がまりいの隣にいる少女に問いかける。
「ええ。だって退屈なんですもの。それにここにいられるのも残りわずかなんですし」
まりいの隣にいる少女。たしか『シェリア』と呼ばれていた――は臆することなく笑顔で答える。
「まったく困ったものだ」
「誰かにそっくりですわね」

笑いながら、王だけでなく王妃までもが苦笑の色を濃くする。
「さて。彼女がなぜここにいるのか。それを説明してもらおうか、シェリア」
シェリアは、待ってましたと言わんばかりに顔を輝かせるとこう言った。
「わたくし決めましたの。護衛はこの方にしていただきますわ！」

Part，6

時間は少しさかのぼる。
「……どうしよう」
まりいは道に迷っていた。
言われたとおりに宿の回りを散歩してはみたものの、右も左もわからない。気がつけば宿すら見えなくなっていた。
やっぱり部屋で待ってれば良かった。ちゃんと宿に帰れるのかな。
途方にくれ、ため息をついた時だった。
「お嬢ちゃん、これ食べないかい？」
「え？」
そこには中年の男性がいた。手にはアイスクリームを持ってる。
「安くしとくよ？　どうだい」
男性の後ろには屋台のようなものがある。どうやら彼のお店らしい。彼は笑顔でアイスを差し出してくる。
まりいとて女の子。お菓子に興味がないわけではない。だが、先立つものが手元にない。
「ごめんなさい。私、お金が……」
「おじさーん、それ二つちょうだい」
元気な声に再び振り向く。そこには、まりいと同じ背格好の女の子がいた。
「はい。確かに」
「二つがさねがいいな。おまけしてくれる？」
「お嬢ちゃんにはかなわないなぁ。わかった。少しだけだよ」
まりいが戸惑う中、目の前でやりとりが繰り広げられていく。
思考が追いついたのは、目の前にアイスを突きつけられた時だった。
「はい」
「え？」

「あなたの分。食べたかったんでしょ？」
「でも私お金なんてもってないし」
「いいの、アタシのおごり」
「でも……」
「いいからいいから。それともアタシのおごりじゃ食べられない？」
「そんなことないよ」
「だったら食べる。でないと、こっちが食べちゃうわよ？」
そう言って、今度はまりいのアイスに口を近づける――
「たっ食べる！」
その前にまりいが先取りする。
「あっはは。そんなに急がなくても大丈夫よ」
そう言って、彼女の方も自分の分を口にする。
金色の長い髪。背格好はまりいとほとんど変わらない。明るい茶色の目。まりいも同じ色の瞳をしている――が、くりくりと元気よく動いている。
「ん。おいしい。やっぱりここのアイスが一番よね」
そう言って、アイスをあっという間にたいらげてしまった。
「詳しいの？」
「うん。けっこう色々食べ歩いてきたから。でもあんまり食べ過ぎると太っちゃうかしら」
舌をペロリとのぞかせる。
夢の世界でもこういうところは変わらないんだ。
変なところで感心してしまう。
「名前言ってなかったわね。アタシはシェリア。あなたは？」
「椎名まりい、です」
何故か本名を答えてしまう。
「シーナ？　マリィ？」
「……シーナでいいです」
このさいどちらでもかまわない。少年に呼ばれた名前を唇にのせると、女の子は右手を差し出す。

「よろしくねシーナ」
「こちらこそ」
こうしてまりいにシェリアという友達ができた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

まではいいのだが。
『もっと楽しいところへ遊びにいこう』と言われ、気がついたらここにいたというわけだ。どこをどう間違ったらお城の中でショウと鉢合わせになるのだろう。
「おお、すまなかったな。この子はシェリア、私の后の姪にあたる者だ」
まりいの戸惑いに気づいたのだろうか。王がまりいの友達を、シェリアを紹介する。
「先ほど私に言われていた、もう一つの任とはシェリア様のことで？」
「察しがいいな。彼女をミルドラッドまで護衛してもらいたい」
戸惑っているまりいの腕をつかみながら公女様が二人を交互に見つめる。
「……だそうだが、どうする？」
目の前の光景にため息をつきショウは言った。
「わかりました。二つの任、確かにうけたまわりました」
「シーナと申したな。シェリアのことを頼むぞ」
「え……はい」
ショウは再びため息をついた。大変な任を二つもまかされてしまった。シーナがシェリアを護衛するということは、結果的には彼が二人を護衛するということになる。記憶喪失のシーナに武術の心得があるとは考えにくい。
今日は災難な一日だな。
ショウは今までで一番大きなため息をついた。

「ショウ、さっき何の話をしてたんですか？」
所変わって、ここははじめにいた宿。
「その前に……だから、なんでそう後ずさるんだよ。それに顔赤いぞ」
「……ごめんなさい」
けわしい顔をして顔を近づけたショウに、つい条件反射で謝ってしまうまりい。まりいとしては、単に人の、男の子の顔があるということに動揺してしまっただけなのだが。
「それと」
顔を離し、代わりに指を突きつける。
「昨日もそうだったけど、アンタ、妙に丁寧口調だよな。さっきみたいな場所でならともかく、俺にまで敬語使うなよ。言っただろ？
堅苦しいのは苦手だって」
「ごめんなさい」
「じゃないだろ」
「……ごめん」
「よし」
ここで初めて表情を笑顔に変える。
「何？」
「ううん」
この人、いい人だけど、私のこと小学生と勘違いしてないよね。
なぜかそう思ってしまうまりいだった。
「人捜しを頼まれたんだ」
「人捜しって、誰を捜すんですか？」
途端、少年の顔が気難しいものになる。まりいが慌てて言い直すと、ショウは口を開いた。
「……誰を捜すの？」
「王族の関係者」

「関係者？」
「王妃の妹姫の行方を捜したいんだと」
「行方って、もしかして誘拐！？」
「いや、そんなんじゃない」
「じゃあなんで……。それにどうやって捜すの？」
「全くあてがないと言うわけでもないんだ。でも難しいだろうな。それでも、その方の行方を捜したいんだと。
……親父がらみだしな」
「親父がらみって、誰の？」
「話はここまで。ここから先は聞いてもややこしくなるだけだ」
そう言われると、これ以上は口を挟めない。まりいは押し黙るしかなかった。
このまま沈黙が続くかと思われたが。
「シーナ、ああ言ったからには大丈夫なんだろうな」
思いがけないショウの問いかけに、まりいは首をかしげる。
「ちゃんと戦えるかってこと」
まりいは、さらに首をかしげる。
「護衛をするってことは、もしあの方の身に危険が迫った時戦わなければいけないってことなんだぞ」
まりいは中学生だった。
「……もしかして、知らなかったとか？」
目の前の少女はゆっくりと首を縦に振る。
「ショウは戦えるの？」
「当たり前だろ。じゃなきゃ、とっくに断ってた」
武道に励む女性も少なくはないだろう。だが、大半の者はよほどのことがない限り戦えるはずもなく。無論、まりいも後者の一人だった。
「試合、じゃないんだよね」
「シアイ……組み手のことか？　だったら違う。襲ってくる奴らにルールなんてものはないだろ」

再び黙り込むまりいに、ショウは深々と嘆息する。
予想はしていた。やっぱり俺が二人の護衛をしなきゃならないってことか。ショウが何度目かのため息をつこうとすると、予想外の返事が返ってきた。
「言い換えれば、ショウは強いってことですよね？」
「それなりには」
「ここは、すぐに出発するの？」
「何日かいるつもりだけど」
今ひとつ相手の意図していることが読み取れない。すると、今度は少女の方から顔を突きつけられた。
「お願い、私に稽古（けいこ）をつけてください」
目の前の少女に向かい、ショウは目を見開いた。
急に何を言い出すんだ。そもそも、たかが数日でものに出来るものなら苦労はしない。
「そんな簡単に――」
そう言い出そうとして口をつぐむ。　なぜなら少女の瞳があまりにも真剣だったから。
「無理だってことはわかってます。でも、このままじゃ嫌なんです」

自分自身なぜこんなことになってしまったのかわからない。でも夢の中とはいえ、この世界に来る事を選んだのは自分だ。だったら自分でなんとかしなきゃ。
「けどな……」
「アタシからもお願いするわ」
ショウの言葉をさえぎったのは、つい先ほどまでまりいと一緒にいた少女のものだった。
「シェリア様？　なんで……」
「おじ様に貴方達の居場所を聞いたの。お願い、アタシ達に稽古をつけて」
「『アタシ達』？」

嫌な予感がする。
「アタシとこの子、シーナのことよ」
予想通りのセリフを后の姪と呼ばれていた少女は笑って言った。
「ですがあなたは――」
「自分の身くらい自分で守るわ。お願い。アタシはあなた達と旅をしたいの。……普通の女の子として」
『普通の女の子として』。お姫様と呼ばれる人が普段どんな気持ちでいるか、まりいにはわからない。でも目の前の少女には好感が持てた。おいしそうにアイスを食べる顔。もし同じ学校にいたら間違いなく友達になれただろう。
「お願い、ショウ・アステム。できるだけのことでいいから」
「お願いします！」
二人の少女がショウに向かって頭を下げる。
今日は厄日なんだろうか。軽くこめかみに手をあてたあと彼は口を開いた。
「わかりました。本当に最低限のことでよければ」
『！！』
ショウの言葉に二人の顔が輝く。
「ただし、本当に最低限ですよ。あと、俺に対する敬語云々はなし。貴女(あなた)には失礼かもしれないけど、俺も普段通りでやらせてもらう」
「ありがとう！」
「ありがとうございます！」
「特にシーナ、今度そんなふうに言ったら教えないぞ」
「……努力します」
だから、そうかしこまられるのが嫌なんだ。
胸中で毒つきながら、視線を隣にやると。
「だめよ、シーナ。リラックスしなきゃ」
なんで公女様のほうが一般(だろう)市民のシーナよりも普通っぽいんだ？
そう思っても口にはしないショウだった。

Part，7

翌日。さっそく二人は訓練を受けることになった。
「戦うと一言で言っても、術や武器、さまざまな手段がある。今回は俺が指示したやり方でやってもらう。
まずシェリア。君には術を使ってもらう。術を使ったことは？」
「ミルドラッドにいた頃先生に教わったわ」
「じゃあ大丈夫だな。術書を買ってきたから自分の好きなものをやってみるといい」
そう言って数冊の本を手渡す。
「術って魔法みたいなもの？」
「そうに決まってるだろ」
「それって、誰でも使えるの？」
「それこそ当たり前だろ。まあ個人差はあるけどな」
今さら何当たり前のことを聞くんだ？　そう言おうとして口をつぐむ。そうだった。こいつは――
「もしかして、術のこと知らないの？」
ショウの回想よりも早く。シェリアがそう言って目をみはる。
「……うん」
嘘をついても仕方ない。まりいは正直に答えた。
「あの、私――」
「悪い。こいつ記憶がないんだ」
まりいが言うより早く。ショウが答えた。
「記憶がないの？　どうして？」
「それは――」
答えることができず、まりいは口をつぐむ。本当のことを言って、相手を戸惑わせるのは少年で実証ずみだった。だからと言って、このままではあまりにも気まずい。
「悪い。本当に覚えてないんだ。あまり聞かないでやってくれ」

窮地を救ったのはショウの一声だった。
「ホントに何も覚えてないの？」
「ああ。なにしろ、リネドラルドやこの国のことすら知らなかったくらいだから」
とたん、シェリアが信じられないといった表情をする。どうやら、リネドラルドという言葉は、この世界にとって常識だったらしい。
「この国って、もしかしてカザルシアのことも？」
「ええと……」
「ああ」
やはり、まりいが言うより早く。ショウが答えた。
「そうだったの……。ごめんなさい」
「気にしないでいい――」
「本当にごめんなさい」
今度はまりいが言うより早く。シェリアが言って両手を握りしめた。
「何かあったら言ってね。アタシが力になるから」
「う、うん」
シェリアの真摯な瞳に見つめられ、まりいはただこくこくとうなずくしかなかった。
当然であるが、まりいは本当に記憶喪失と言うわけではない。
気がついたら見知らぬ場所にいて、気がついたらショウが目の前にいて。彼がまりいを見て記憶喪失だと勝手に勘違いしただけなのだが。
このままだと当分記憶喪失というレッテルはぬぐえそうにない。
内心で、まりいは深々と息をついた。
「ここでそんなこと話したところでラチがあかないだろ。話を続けるぞ。シェリアには術を使ってもらう。それでいいよな？」
「本当は武器も使ってみたかったんだけど」
本を腕に抱きながら上目遣いにショウを見る。
「最低限でいいと言ったのは君だろ？　無理言わないでくれ」

「はーい」
しぶしぶながらも、シェリアは了解した。
「あの、私は？」
「あせるなよ。アンタの分もちゃんと用意してある」
「……」
「どうした？」
「なんでもない」
なんでシェリアには『君』で私は『アンタ』なの？　何故か釈然としないものを感じるまりいだった。
「ほら」
ショウがまりいに大きな包みを渡す。
「？」
「開けてみなさいよ」
シェリアに進められるまま包みを広げる。
包みの中に入っていたものは、弓だった。
「これを使ったことは？」
まりいは首を横にふる。
「だったらこれで決まりだな」
「どうして弓なの？」
剣や術の方が強そうな感じがするのに。
「剣や斧は数日でマスターできるもんじゃない。でもこいつならよほど方向を間違えない限り相手に多少のダメージを与えることが出来る」
「……」
「他に質問は？」
「……」
「シーナ？」
「なんでもない」
すごい。一目見ただけでどの武器を使えばいいってことがわかるなんて。

本当は、そんなことを考えていたためにただ返事が遅れただけなのだが。
「時間が惜しい。さっさとはじめるぞ」
そう言うと、ショウはすたすたとその場を後にした。
「さ、練習始めようよ」
嬉々として術書を握りしめシェリアはショウの元に駆け寄っていく。
「シーナ、早く！」
シェリアが手を振る。
そうだよね。やってみないとはじまらない。
「うん」
弓を握りしめると、まりいは二人の元へ走り出した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

さて、そんなこんなで数日後。
「叔父様、叔母様。大変お世話になりました」
今日は三人の旅立ちの日。
「道中気をつけるのだぞ」
ここはリネドラルドのとある場所。
シェリアはお忍びで来ていたため、出立は秘密裏に行われた。とは言え、シェリアが普段城をよく抜け出しているため全く意味がないに等しいのだが。
「わかってますわ。おじ様も心配性ですわね」
王の前でシェリアがクスリと笑う。
「う……そうか？　私も年をとったのかもしれぬな」
「あなた、今からそんなふうではこれから先が大変ですわよ？」
姪の旅立ちということで、そこには王と王妃の姿もあった。
「シェリア、気をつけて帰るのですよ。シーナ、この子を頼みます」

「え、あの、えっと……」
急に頭を下げられ、まりいは慌ててしまった。
（こういう時はお任せくださいと言うんだ）
横でショウが小声で言う。
「じゃあ……えっと、お任せください」
それじゃ俺のセリフを棒読みしただけじゃないか。
そう言いたいところをぐっとおさえた。何しろ相手は王と王妃だ。

「ええ、頼みましたよ」
それを察したのか、王妃が笑いながら言う。
王も、それを微笑ましげに眺めていたが、やがて表情を改め真面目なものに変える。
「……すまない。お前にこんな無理難題を押し付けてしまって。本来ならば、我々がやらなければならぬことなのに」
ショウの前で、カザルシアの王は頭をふかぶかと下げた。
「これが、最後の頼みだ。期限が切れたら必ず戻ってきてくれ」
頭を下げたまま、声を振り絞るようにして言う。
「やめてください。臣下の前で王が取るような言動じゃないですよ」

それに戸惑ったのはまりいだけではなかった。
ショウだって人だ。それ以前に14歳の少年なのだから戸惑うことだってある。それは当たり前のことなのだが――
この人、こんな顔もするんだ。
なぜか妙なところで感心してしまうまりいだった。
「この人なりの誠意なのよ。受け取ってくださらない？」
隣には苦笑する王妃がいる。
しばしの沈黙の後、ショウは唇を湿らせるとこう言った。
「わかりました。出来る限りのことをやってきます」

こうして、三人は旅立った。

Part，8

まりいは、外の景色に心を奪われていた。
「どうしたの？　そんなに外が珍しい？」
シェリアが不思議そうな顔をする。
「……うん」
「変なの。アタシもあまり外には出ないけど、これくらいの風景いっつも目にするわ」
「うん。でもすごい」
そう言って、まりいはシェリアの語るところの『これくらいの風景』を見ていた。
見渡す限りの草木。テレビで見たことはあっても、こんなにたくさんの緑を見たのは初めてだった。
「そいつは記憶喪失なんだ。だから何もかもが新鮮なんだろ」
馬の手綱を引きながらショウが言う。
「そうなの？」
「ええと……」
ショウに初めて会った時といい、この質問にはなんと答えていいのか困ってしまう。
「ごめんなさい。アタシったら余計なこと聞いたみたい」
そして、ショウの時と同じく誤解されてしまう。
「ううん、気にしないで。大丈夫だから」
何が大丈夫なのかわからないまま、まりいも答えてしまう。それが益々誤解を生じているということに彼女は全く気づいていない。
「そう……。何かあったら言ってね。アタシのできることなら力になるから！」
こぶしを軽く握り、まりいに詰め寄る。
この子って、お嬢様だったよね？
まりいはなぜか自問自答してしまった。

容姿こそそれらしく見えるものの、こうして話をしていると自分とほとんど変わりない。
「ねぇシーナ。ちょっと着替えるの手伝ってくれない？」
そんな思考も、シェリアの一言によって中断される。
「着替えって？」
「記憶喪失でも着替えくらいわかるでしょ？　大丈夫、アタシの言うとおりにしてくれればいいから」
そう言って、公女様がいたずらっ子のような笑みを浮かべる。
この子って、お嬢様だったよね？
再び自問自答してしまうまりいだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「二人とも、飯にするぞ」
馬車の荷台からまりいが出てくる。
「シェリアはどうしたんだ？」
「えっと……」
「お待たせ」
二人の少女の声が重なった後、話題の主が馬車の中から現れた。
「なっ……！」
ショウが絶句したのも無理はない。目の前にいる公女様は、シェリアであってシェリアではなかったからだ。
膝丈のワンピースに動きやすいブーツ。今までアップにされていた金色の髪はあえてのばしたままにしてある。
「シーナに手伝ってもらったの。可愛くていいでしょ？」
そう言ってはにかむ姿は年相応だし、かわいらしい。かわいらしいが。
「ドレスじゃ動きにくいもの。見た目よりも動きやすさ重視よね。シーナ、これ似合う？」
新しい服を軽くつまみ、まりいに呼びかける。

「うん。似合ってるよ。かわいいし。ショウもそう思うよね？」
「……それで旅をするつもりか？」
「当然！　あと、野宿になっても大丈夫よ。そうなると思って必要なものは買ってきたから」
そう言って大きな袋を目の前に突き出す。
中には、保存食と折りたたみ式の寝袋が三人分入っていた。
「一体どこで手に入れたの？」
「決まってるじゃない。リネドラルドよ。他に足りないものあった？」
「いや、おおかたそろっている」
半ば呆然としながらも冷静に返事をする。シェリアの服装云々は差し置いて、準備されたものは確かに旅をするにあたって必要なものばかりだった。
「よかった。走り回ったかいがあったわ」
『走り回った？』
公女様の一言に二人の声が重なる。
「そう。一人だと退屈だもの。おば様の所にいる間はずっと街に入りびたりだったの」
そう言ってシェリアは舌をだした。
その仕草は確かにかわいらしい。かわいらしいが。
『この子は本当に公女様か！？』
二人が同じことを考えたのは言うまでもない。
「ほら二人とも。ボーっとしてないで食事にしましょう」
「うん。じゃあ私、食器を持ってくる……？」
そこで、荷台へもどろうとしたまりいの動きが止まる。
「ショウ？」
「シッ！」
まりいの呼びかけを制し、視線を遠くにやる。
「もしかして、獣（ビースト）がいるの？」
事情を察したシェリアが表情を険しくする。

「ビースト？」
「二人とも準備しろ。来るぞ」
視線をずらさないまま、二人に呼びかける。
もちろん、事情を知らないまりいにわかるはずもなく。二人のやりとりにおろおろするばかりだった。
「シーナ、早く準備しなきゃ。獣に襲われてもいいの？」
「う、うん！」
シェリアに促され、自分のおかれている状況も把握できないまま、荷台に戻り弓を取り出す。しばらくすると、草原から大きな鹿のような生き物が現れる。
それは、まりいの国の言葉で言えば、『大きな鹿』だった。
茶色の毛皮に二本の角。唯一違うのは、目の色と体格だ。
血のように真っ赤な目。こちらをじっと見つめている。それは、普通の鹿の約二倍。もはや鹿ではない。
「あれって……何？」
弓を握り締め、おそるおそるたずねる。
「見ればわかるだろ。獣だ。しかも肉食のな」
「肉食！？」
聞きなれない言葉に体をこわばらせる。どうやら『獣』とはモンスターのことらしい。
ショウは斧を取り出しながら話を進める。
「だから、こっちからしかけるしかない。いいか、頭を狙うんだ」
「……え？」
ショウの意図することがわからず、まりいは呆然と聞き返した。
「聞こえなかったのか？　頭を狙うんだ。アンタがやるんだよ！」
「でも……！」
言われるまま弓を構える。――が、手が震えて狙いが定まらない。
練習は確かにやった。的にも少しは当たるようになった……と、思う。だが実戦となると話は別だ。

「何やってるんだ！　来るぞ！」
ショウが斧を構える。
「……っ！」
半ばやけくそで弓を射る。
だが、まりいの放った矢は標的を見事にはずれてしまった。所詮、素人の付け焼刃なのだ。むしろ当たる方がおかしい。
「どいて！」
続けざまにシェリアが術を放つ。
「暁の炎よ、全てを薙ぎ払え！」
炎が巨大な鹿を焼き尽くす！
「後は俺がやる。二人ともさがってろ！」
鹿を覆っていた炎が消えると、それめがけて斧を振り下ろす。
「――――！」
こうして、獣は息絶えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

パチパチパチ……。
牧の燃える音が草原に響く。
その後、三人は獣と出合った場所から少し離れた場所で野宿をすることとなった。
「シーナ、こっち来て食べなさいよ。おいしいわよ？」
「……いらない」
荷台の中から弱々しい返事が返ってくる。
まりいは、さっきの一件で自己嫌悪に陥っていた。
獣を殺すのが怖くて、棒立ちになっていた自分。ついていくって、決めたのに。これじゃあ、いい足手まといだ。
「サイテーだ、私」
膝をかかえ丸くなる。
夢の中なら、何とかなるんじゃないかって思ってた。男の子と話

をすることも、色々なところを見てまわることも。
確かに、発作は今のところ大丈夫だ。でも、これじゃあそれ以前の問題じゃないか。
「ほら」
「え？」
目の前に何かを突きつけられる。そこには干し肉をもったショウがいた。
「腹へってるんだろ？　本当は。やせ我慢するなよ」
呆れ顔のまま、干し肉の置かれた皿を差し出す。
「我慢なんかしてな――」
グルルル……。
『……』
突然の大音量に、二人しばし硬直する。
「……っ、ははは っ！」
沈黙を先に破ったのはショウの方だった。
「やっぱ腹へってるじゃん」
「シーナ、無理しちゃダメよ？」
どうやら荷台の外まで聞こえていたらしい。まりいはただただ顔を赤くするばかりだった。
「一口でいいから食べてみろよ。まずかったらその時残せばいいだろ？」
言われるまま、干し肉を一口かじる。
「……おいしい」
「だろ？」
ショウが得意げな顔をする。
「初めての実戦で戸惑うのは当たり前だ。それを繰り返すうちに慣れてくる。俺だってはじめはそうだったんだ」
「要は気にするなってこと。そうでしょ？」
シェリアが言葉を引き継ぐ。
「そういうこと。わかったら、さっさと降りてこいよ」

「？」
「星が綺麗なの。せっかくだから外で食べない？」
「……うん！」
二人の心遣いがとても嬉しかった。
外には満天の星が輝いていた。

Part，9

「シーナ行ったぞ！」
「うん……えいっ！」
放たれた矢は放物線をえがき、獣の頭上スレスレをかすめていく。

「惜しいっ！」
「そんなこと言ってる場合か？　シェリア、頼む」
シェリアのちゃちゃにも目をくれず、ショウが次を促す。
「わかった。　風の精霊よ、汝の力を我に与えたまえ……風槍（ウインド・ランス）！」
無数の槍が獣に突き刺さる。
「動きが止まったわ。ショウお願い！」
「二人ともどいてろ！」
女性陣二人を後ろに下がらせ、ショウが斧を振り下ろす。
獣は一瞬の硬直の後、悲鳴もあげずに倒れていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

あれから一週間。まりいにもようやくこの夢の中の世界というものがわかるようになってきた。とは言っても、ほんの少しだけだが。

ここは、まりいのいる場所、地球と似ている。多少違いはあるものの、食文化や服装など一部を除けばさほど変わりはない。
唯一違うとすれば、獣と呼ばれるものと、術と呼ばれるものの存在。
獣。
いわゆる動物で、おとなしいものから獰猛なものまでいる（シェリア談）。特に集落の外には多いので、外へ出るには集団で行動するか今のようにある程度の戦闘ができるということが絶対条件とな

る。
術。
まりいの世界――地球では魔法とも呼ばれるもの。未知なる力。
この世界では誰もが使うことが出来る。ただし個人差はあるし大抵の場合、媒介となるものが必要だが。
術は専門の店で簡単に手に入る。媒介となるもの――術書と呼ばれる本を買い練習することで大抵のものを扱うことが出来る。術をある程度マスターした人から教わることも可能だ。ただし、使い込まないと威力は上がらないし高度なものも使えない。
それならば術を使った犯罪が増えるのではないかという心配もあるが、実際はそうでもない。なぜなら大抵の市街には結界がはられているからだ。結界には獣とある程度の魔力を中和する作用がある。だからある程度までは災害を防ぐことが出来る。ある程度ではすまなくなった場合は――その土地にいる自警団か騎士団に頼むしかないだろう。
さて、この世界に関する説明はここまでにしておくとして。
「こいつは食用だな。持っていこう」
ショウが荷物の中からナイフを取り出す。
「時間がかかるから二人とも（荷台の）中で待ってろ」
そう言うと、さっきまで戦っていた獣の死骸を丁寧にさばいていく。
「う……アタシやっぱだめ。悪いけど休ませてもらうわ」
シェリアが顔を青くして言う。なんだかんだ言ってもシェリアは公女様。獣の死骸を見て気分を悪くするのも無理はないだろう。まあ公女でなくても普通の人間なら抵抗があるだろうが。
「シーナはどうする？　休む？」
「私は……もう少し残る」
「そう？　だったら先に休んでるわ」
よほど気分が悪かったのだろう。それだけ言うと公女様は馬車の方へ戻っていった。

「休んでなくていいのか？」
気配を感じたのだろう。振り返らぬままナイフを片手にショウが言う。
「見ていてもいい？　邪魔はしないから」
そう言って、まりいは隣に腰を下ろす。
「今度はこいつのさばきかたでも教わりたいのか？」
ナイフを持つ手を止め苦笑交じりに振り返ると、まりいは首を横にふった。
「ううん。ただ、見ておきたかったの」
「まあ、別にいいけど」
視線を元にもどし再び獣をさばきにかかる。
こんなの見ていて面白いのか？　記憶喪失の人間は考えることがわからないよな。
『……』
ただ黙々と獣をさばくショウ。それを、ただ黙って見ているまりい。はたから見れば、それは奇妙な光景だった。
まったく。やりづらくてしょうがない。青ざめるくらいならはじめから見なけりゃいいだろ？
実際、まりいは青ざめていた。普通の女子中学生が動物を殺す現場など見たことがあるはずもなく。当然と言えば当然のことだろう。それでもこうして見ているということは、彼女なりの意思の表れだった。
みんなの足手まといにはなりたくない。せめて簡単なことくらいできるようにならなきゃ。
「できたぞ」
獣を全てさばき終わり、できあがったそれを袋につめる。
「これ食べれるの？」
「火を通さないと危ない。持ちきれないから残りは町で売らないとな」

「すごい……」
「何が？」
まりいのつぶやきにショウが怪訝な表情を見せる。
「ショウってなんでもできるよね。すごいよ」
「ずっとやってれば嫌でも覚える」
「それでも。やっぱりすごいと思う」
素直に尊敬の眼差しを向ける少女にショウはしばし言葉を失った。

「……そろそろ出発するぞ。シェリアも待ってるだろうしな」
「うん」
この時の少年の顔は逆光になっていたため、まりいには見えなかった。

しばらくすると三人はとある村に着いた。
「どうしたの？　シーナ」
「ここって、見覚えがある……」
そう言って視線を周りにさまよわせる。
これといって特徴もないような風景。でもまりいには確かに見覚えがあった。
「そりゃそうさ。ここはアンタが倒れていた場所なんだから」
『え！？』
ショウの言葉に二人そろって振り返る。
「驚くほどのことでもないだろ。前に通った道を逆にたどっているだけなんだから」
「じゃあここって、えーっと……」
「ジアノ」
まりいが思い出すより早く答えは返ってきた。
ジアノ。横たわっていたまりいをショウが見つけた場所。
「シーナって、ここで記憶をなくしちゃったの？」
「そうみたい」

確かに私はここで倒れていたみたい。ショウは私を見つけた時、私が変わった格好をしていたって言っていたっけ。
「じゃあ散歩に行かない？　もしかしたら何かわかるかもしれないわよ？」
明るい茶色の瞳を輝かせ、二人を交互に見つめる。
「俺はパス。宿を取ってくる。さっきの肉も売らないといけないしな」
「わかった。じゃあシーナ行きましょ！」
「えっ、ちょっとシェリア！」
シェリアに腕を引かれ、まりいは自分の倒れた場所を、ジアノを散歩することになった。

――のだが。
数時間後、ショウは目の前の大荷物にため息をついた。
「なんで一時間でこんなに物が増えるんだ？」
『あはは……』
二人は少年を前にただ笑うしかない。
「思ったより色々あったのよね。可愛い服もあったし」
「……でもやっぱり買いすぎなんじゃない？」
シェリアの抱えた大荷物（まりいも荷物持ちを手伝っている）を見ながら、まりいは軽いため息をついた。
「いいのいいの！　これはあなたの分もあるんだから」
「え？　私の！？」
驚くまりいとは裏腹に、シェリアは当然かのように答える。
「シーナ、その服しか持ってないんでしょ？　だったら着替えくらい持たなきゃ」
「いいよ。私お金持ってないし」
「それこそ余計な遠慮は無用よ。コレはアタシがやりたくてやってることなんだから！」

そう言って、なぜか誇らしげに胸をはる。
「どっちにしても馬車にこれだけの荷は入らないだろ。必要な物だけ残して後は返しとけよ」
「えー？」
「『えー？』じゃない。ちゃんと返すんだ」
そう言うとショウは部屋を出て行ってしまった。
「怒らせちゃったかな？」
「いいのよ。買い物の楽しさが男の子にわかってたまるもんですか！」
そう言って、再び誇らしげに胸をはる。
「……でも、少し買いすぎたかしら？　とりあえず横にどけとくわ」
多少気がひけたのだろう。小さく舌を出すといそいそと荷物をベッドのスミに片付ける。
「シェリア、私も手伝う」
同じく荷物を片付けようとしたまりいの足に、何かが触れる。それは青い石のついたペンダントだった。女性の肖像画が彫られており、銀色の鎖がつながっている。
「シェリア、これ……」
拾ったものを、彼女に差し出すと、
「ありがとう！」
シェリアは嬉しそうに――大事そうに、それを受け取った。

Part，10

「その石はね、アクアクリスタルと言うの」
「アクアクリスタル？」
そんな名前の石、見たことも聞いたこともない。まりいは首をかしげることしかできなかった。
「見てて」
そう言ってシェリアがコップに水をくむ。ペンダントにはめられた石にコップの中の水をたらすと石がまばゆい光を放った。
「綺麗……」
「でしょ？　ミルドラッドでしかとれない宝石なのよ？」
「ミルドラッドだけでしかとれない？」
おうむ返しにたずねるまりいに、シェリアはうなずきを返した。
「そう。ミルドラッドはね、カザルシアで最も水が豊富な街なの。水があるところには自然と人も集まる。だから別名『水の都』とも呼ばれているの」
何もかにもはじめてのまりいはシェリアの言葉にただうなずくしかない。
「この石にはこんな言い伝えがあるの。
二人の若者が水を求めてさまよっていた。
そのうち一人が倒れてしまった。残されたもう一人の若者は必ず戻るといい一人で水を探し続けた。けれどその若者もついに力尽きてしまった。
『ほんの少しでもいい。もう一人の者に水を』若者はひたすら祈った。
すると、どこからともなく全てが青い色の女性――水の精霊アムトリーテが現れ倒れていた若者に口付けをした。
不思議なことに若者はそれで乾きを癒やし生気をとりもどした。
だがそこにはアムトリーテの姿はなく、かわりに一つの石があっ

た」
「それが、アクアクリスタル？」
「そう。
精霊は言った。『それには水を呼びおこす力がある。水が欲しければそれに祈るといい。ただし自分の欲のみに使うと悲劇を呼んでしまう』と。
二人は石を使って大量の水を呼び寄せた。やがてそこには人が集まるようになった。水の都、ミルドラッドの誕生ね。二人は精霊の言いつけを忘れないように女性の像を作りアクアクリスタルを納めた。
以来、この石はその街の秘宝として今も王家に大切に保管されていると言われているの」
「ちょっとまって。その石は像に納められてるんでしょ？　それがどうしてここにあるの？」
いまだまばゆい光を放つ石を見つめながらまりいは問いかける。シェリアの話が事実ならば今彼女の手の中にあるものは何なのか。
「これも本物のアクアクリスタルよ。かけら、だけど」
「かけら？」
「像を作ったのはいいけれど石が大きすぎて入らなかったのよ。仕方なく石を砕いて入る分だけ石像に詰め込んだってわけ」
「はぁ」
なんとも間の抜けた話だ。
その様子がおかしかったのだろう。笑いながらシェリアはペンダントを自分の首にかける。
「これはね、リューザ――ミルドラッドの神官長ね。彼がお守りに持たせてくれたの」
「どうして神官長なの？　お父さんやお母さんじゃいけなかったの？」
王家に保管されていると言ったのは他ならぬシェリア自身じゃないか。

そう言おうとしたが、まりいは口をつぐんだ。なぜならさっきまで笑っていたはずのシェリアの目が悲しみをたたえていたからだ。
「彼は気づいていたのよ」
視線を落としながら石を軽く指ではじきながら言う。ペンダントはもう光を失っていた。
「アタシが今までリネドラルドにいたのはね、『たまにはリネドラルドにいる叔母様のところへ元気な姿を見せておあげなさい』ってお父様とお母様がすすめてくれたから。……表向きはね」
「表向き？」
「アタシね、小さい頃からずっとリューザに育てられてきたの。お父様とお母様は公務があって忙しいからって。だから二人に会うのも月に数えるほどしかなかった。それでも彼の言うようにたくさん勉強したわ。礼儀作法だって覚えたし。少しでもお父様達に褒めてもらいたかったから。
でもダメだった。お父様とお母様っていつもケンカばかりしているの。薄々感じてはいたけどね。アタシが14になってからはひどくなったわ。原因は何かわからないけど」
「シェリア、もういい」
まりいは、いたたまれなくなって口を開いた。でも公女は話をやめようとしない。
「なにが『たまには』よ。人がいい叔母様につけこんでアタシを厄介払いしてるだけじゃない。邪魔なら邪魔だってはっきり言えばいいのよ」
「もういいよ！」
まりいは再び口を開いた。さっきより幾分語気が荒い。
無理もない。まりいはつらかったのだ。言葉を紡ぐたびに悲しげな表情をするシェリアを、友達を見続けることが。
「ごめんなさい」
まりいを見て彼女は笑顔を作った。作ろうと、した。
「ほんとはね。ミルドラッドに帰ることがちょっと苦痛だったの。

でも、いつまでも叔母(おば)様の好意に甘えてちゃいけないものね」
精一杯の笑顔。今にも泣き出しそうな笑顔。見ているほうがつらい笑顔というものがあるということをまりいは初めて知った。
「そんな時、シーナ、あなたに逢ったのよ。アタシ、あなたに逢って思ったの。『この人達とならミルドラッドに帰ることができる』って。今でこそ普通に話してるけどこんなことって初めてなのよ？」

公女様の告白にまりいは驚いた。
てっきりこれが普通だと思っていた。元々、道に迷っていたまりいに話しかけてきたのはシェリアだった。あの時の公女様にはそんなかけらなどこれっぽっちも感じられなかった。
「お供は大勢いたけれど皆アタシを敬ってばかり。アタシはそんなに偉くないのにね。だからあなたと話ができてとっても嬉しかった」

「そんなことないよ！　私だってシェリアがいなかったら迷子のままだったし」
本当にそうだった。一人で心細くて。そんな時声をかけてくれたのが彼女だったのだ。
買い物をして一緒に旅をするようになって。ほんの数日だったけれどまりいにとってはそれがとても嬉しかった。
「アタシ達って、実は似たもの同士なのかもね」
そう言うとシェリアはようやく表情を元に戻した。
「ありがとう。なんだかすっとしちゃった。話聞いてくれてありがとう、シーナ。それに、ショウも」
「ショウ？」
振り返るとそこには栗色の髪の少年がいた。
「ショウ、いつからいたの？」
「『それはアクアクリスタルと言うの』あたりから」
壁にもたれかかりながらそっけなく答える。
「なんでここにいるの？　部屋に戻るんじゃなかったの？」

「天気が崩れそうだったから出発する時間を早めようって言いにきたんだ。そしたらその石の話になってるだろ。話に夢中みたいだったから終わるまでここで待機してたんだ」
もっとも公女様にそんな事情があったとは知らなかったけどな。
その一言だけは胸に押しとどめおいた。
「じゃあ、気づいてなかったのは私だけ？」
「そういうこと。アンタが一番話に夢中だったみたいだから」
「一言くらい言ってくれてもいいじゃない」
確かにシェリアの話に気をとられていて全く気づかなかった。だが、そう言われると釈然としないものがある。
「アンタどちらか一つしか集中できなさそうだったからな。鈍そうだし」
「そんなに鈍くないよ！」
そう言うと手元にあった枕をショウ目がけて投げつける。
これには予想外だったらしく、みごとに顔面に直撃する。
「訂正する。アンタ、見かけによらず力あったんだな」
枕を床に置きながらしみじみとつぶやく。
「……もう一回、投げた方がいい？」
「……っ、あはははは！」
『？』
シェリアのあげた笑い声に二人の目が点になる。
「あなた達って面白いのね。アタシ知ってるわ。こういうのって『仲間』って言うんでしょ？　あと『友達』とも。シーナ、ショウ、ありがとう」
急にお互いの手を握り締められ、二人はどうしていいかわからなくなってしまった。
「あなただけよ。アタシのこと公女様じゃなくて『シェリア』って呼んでくれたのは」
自分と同じ明るい茶色の瞳を見据えシェリアが言う。
「あなただけよ。なんだかんだ言ってもアタシを普通の仲間として

見てくれたのは」
黒い瞳を見据え、公女様が言う。
「二人ともありがとう。あなた達はアタシの大切な仲間。友達よ」
公女様の一言に二人絶句してしまう。
「アタシなにか悪いこと言った？」
言った当人だけがきょとんとしている。
「なんだかクサいセリフだと思って」
「『クサい』って何？」
「……キザだって言うこと」
「そうだったの。今度使わせてもらうわね」
「そんな言葉公女様が覚えるなよ」
「あら？　『何事も社会勉強です』ってアタシの従者はよく言うわよ？」
「どんな従者なんだ。そいつ」
「ホントね」
そう言うと二人して笑みをもらす。
だが、まりいは素直に笑うことが出来ないまま『仲間』という二文字の重みをかみしめていた。

Part，11

翌日。外は雨が降っていた。
「すごい雨。まるで滝みたい」
「俺の言ったとおりだっただろ」
「ホント。ショウってすごいわよね、シーナ」
シェリアが感嘆の声をあげる中、まりいはうわの空だった。
「シーナ？」
「え？　ああ、うん。ショウ、すごいね」
「旅を続けていれば、天候くらい、わかるようになる。この様子だと、あと二時間もあれば出発できるな」
「もうちょっと待った方がいいんじゃない？」
「二時間で充分。それまでに支度するんだぞ」
そう言うと、彼は部屋を出て行った。
「……だって。支度するわよ。シーナ」
公女様が呼びかけるも、まりいはまだ、うわの空だった。
「シーナ？」
「え、何？」
公女の声に、まりいは慌てて視線をむける。
「どうしたの？　さっきからボーっとして。体の具合でも悪いの？」

「そんなことないよ」
「そう？　じゃあ支度しましょ」
「うん……」
言葉とは裏腹に、まりいの足取りは重かった。
まりいの気が重い理由。それは昨日のシェリアの一言だった。
『アタシの大切な仲間……友達よ』
『仲間』とか『友達』って言葉人から聞いたのって初めてだ。そもそも、そんな台詞を面と向かって言う人間は珍しい。まりいは彼女

のことがうらやましかった。
だが、それだけでは気が重い理由にはならない。
まりいの気が重い理由。それは、シェリアの一言をきっかけに昔のことを思い出してしまったからだ。
まりいは孤児。小さい頃は施設で生活していた。
焦げ茶色の髪に明るい茶色の目。色素のうすい肌にやや西洋がかった顔立ち。きわめつけは『まりい』という風変わりな名前。
「なんで私だけこんな変な名前なの？　なんで私だけ、いじめられなくちゃいけないの！」
小さい頃は施設の大人に泣きながらよくすがったものだ。
「まりい。あなたの名前はあなたのお父さんとお母さんがつけてくれたものなの。もしあなたが『まりい』じゃなかったらお父さんとお母さんがお迎えに来た時に困るでしょう？」
「そんなのいらない！　だってお父さんとお母さんは私を捨てたんだもん！」
私は捨てられた子供。
だから、こんな名前もっていてもしかたがない。
そんななか、一人だけまりいに優しく接してくれる子供がいた。
「まりいはちゃんとお父さんとお母さんがくれた名前があるでしょ。大切にしないとダメだよ？」
「こんな名前嫌だもん。大っ嫌い！」
「そんなことないよ。あたしは『まりい』の名前、好きだよ？」
今までからかわれたことは何度もあったが名前を好きと言ってくれる子供はいなかった。
「あたしは美雪。雪がたくさん降っている日にここに来たんだって。よろしくね」
それからは二人ずっと一緒だった。
まりいがいじめられている時は美雪がずっとかばってくれた。
はじめは泣いてばかりだったまりいも少しずつだが笑うようになった。

だが、まりいが八歳になる頃、美雪はとある夫婦の養子として施設を離れていった。
まりいはまた、一人になった。
髪の色は歳がたつにつれ落ち着いたものになっていった。
容姿のことで口を挟まれることはなくなったが、その頃にはもう彼女は誰とも口をきかなくなっていた。怖かったのだ。同世代の子供達の輪の中に入っていくことが。またいじめられるのではないかということが。
小学校六年生になったある日、まりい自身もとある女性の養子となった。それが今の義母、椎名つかさだ。
つかさは、まりいのことを一度も名前で呼んだことはない。それは、まりいが自分の名前を嫌っていることを知ったうえでのことなのだが、まりいはそれに気づいていない。
そのうち、由香も家を訪れるようになり、少しずつ、少しずつだが新しい環境になれていった。
だが。
『この人は本当にいい人？』
『信じても大丈夫なの？　また私を一人にしない？』
その思いだけはいつまでたってもぬぐえない。
まりいは人と人の間に見えない壁を作るくせがついてしまっていた。
二人のことは嫌いではない。そもそも、道で倒れていたまりいをここまで連れてきてくれたのはショウだし、リネドラルドで迷っていた彼女に話しかけてくれたのはシェリアだ。悪い人であるはずがない。
だけど、これは夢。夢なんだ。だって。
「シーナ、降りるわよ」
「えっ？」
シェリアの声に我にかえる。
「だから、今日はここでキャンプするって言ったの。もう暗くなっ

たでしょ？」
確かにあたりは日が暮れていた。どうやら考えているうちにかなりの時間を費やしていたらしい。
「シーナ、やっぱり今日のあなた変よ。大丈夫？」
「うん……ちょっと疲れたかな」
「やっぱり。ショウ、早くご飯にしましょう」
「わかった」
二人の会話が聞こえていたらしく、ショウも手際よく馬車を止める。
「疲れたときは早く食べて早く寝る。これが一番！」
相変わらず公女らしくない台詞を言うシェリアに、まりいは曖昧（あいまい）な笑みをうかべた。
だって、これは夢。
夢から醒めたら、二人はいなくなってしまうんだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「おいしい」
スープの入った容器を片手に、まりいは素直に感想を述べた。
「でしょ？　頑張って作ったんだから」
シェリアが得意げに胸をはる。
（スープくらい誰だって作れるだろ）
そう思いつつも、ショウは黙って食事に手をつけた。実際美味しいのは事実だった。
「料理って誰に教わったの？」
「アタシの教育係」
「教育係ってそんなことまで教えるものなのか？」
「正確にはその息子ね。『公女様たるもの、いざと言うときに備えて一通りのことは出来ないといけない』って言われたから。夜中に厨房に忍び込んで練習したの。アレはアレでなかなかスリルがあっ

て面白かったわ」
――夜中に厨房に忍び込んで料理の練習をする公女様――
（教育係の息子ってどんな人なんだろう？）
まりいとショウは全く同じことを胸中でつぶやいた。
「……あれ？」
シェリアの声に、焼き魚に手をつけようとしていた手が止まる。
「どうしたの？」
まりいの声に、公女は指をさして言った。
「あそこで何か光ったの。あれってなんだと思う？」
確かにシェリアの指し示す方角は光っていた。
「ああ。あそこには湖があったからな。月の光が反射してるんだろ」
「詳しいのね」
「この魚はどこで取ってきたと思ってたんだ？」
魚に手をつけながらショウが言う。
「こんなところに湖があったんだ」
「俺もさっき見つけたんだけどな。ああいうところは浅いようで実は深かったりするからな。むやみに近づかないほうがいい」
彼の専門職らしいセリフに、二人こくこくとうなずく。
「じゃあ今日は休むか」
そう言って荷物の中から白い石を取り出す。
「それって何？」
「結界石。いわゆる魔よけの石ね。これがあれば獣もむやみに近づかなくなるの」
まりいの素朴な疑問にシェリアが答える。
「もっとも襲われる時は襲われるしあくまでも気休めだけどな。……よし、もういいぞ」
馬車とテントの周りが淡い光に包まれる。
「早く寝ましょう。睡眠不足はお肌の大敵よ。ショウ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」
「おやすみ」
それぞれ挨拶を交わすと、三人は、いつもより早い眠りについた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

――のだが。
「……」
眠れない。
真夜中にふと目をさます。
やはり昨日の一件が気になっているのだろうか。
隣を見るとシェリアが気持ちよさそうに寝息をたてていた。
これって、変だよね。
夢の中でも眠れないなんて。ううん、もしかしたら夢の中でも眠れていたこと自体おかしかったのかも。
とは言え、一度起きてしまうとなかなか寝付けないものだ。
もう一度目をつぶろうとしたその時、まりいの視界の隅で何かが光った。
「……？」
もう一度目をこらす。
それは、夕方見た湖だった。

行ってみようか。
二人はちょうど眠っている。二人が目を覚ますまでに戻ってくればいいよね。
そう。ほんの少しだけ、いなくなるだけだから。

Part，12

夜中だけあり、湖の周囲は静まりかえっていた。
「きれい……」
まりいは感嘆の声をもらす。
もっと小さなものを想像していた。だがまりいの予想に反してそれはとても大きなものだった。
月の光が湖面を優しく照らしている。
「……」
服を少しだけたくしあげ足先を湖面にひたす。少し肌寒くはあったものの、その冷たさが、まりいにとっては心地よいものに感じられた。
しばらく水遊びを満喫するまりい。だが時間がたつにつれ彼女の表情は曇っていった。
私、このままでいいのかな。
自分の夢なのだからと言ってしまえばそれまでだ。だが、あの言葉が気にかかってならなかった。
『ならば、扉を開きましょう。あなたに翼の民の祝福のあらんことを』
扉って何？　翼の民って何なの？
『きっかけを与えたにすぎません』
きっかけは確かに与えられた。でも私は変わっていない。いや、少しは変わったのかもしれない。だが根本的な部分においては何も変わっていない。
考えてどうにかなる問題でもない。
「これは夢だもの。全て、夢」
そう言い聞かせることで、まりいは無理矢理自分を納得させた。納得させようとした。
だが、一度生じた不安はそう簡単に拭いさることはできない。

長くいすぎたからかな。一人だから余計なことを考えてしまうんだ。二人も心配しているかもしれないし、そろそろ戻ろう。
足を湖面からあげようとしたその時だった。
リィィィン。
聞きなれない音に視界をめぐらす。だが、何も変わった様子はない。
湖面の中央が光っていることを除いては。
「誰か、いるの？」
返事はなかった。その代わり、呼びかけに対応するかのように音と光が増していく。
――ここに来いってこと？
意を決して、まりいは湖の中に足を入れた。
一歩、二歩。
光に向かって歩みを進める。幸い底が浅かったのか全身を水にひたすことはなかった。とはいえ湖であることには変わらず、ぬれることに変わりはなかったのだが。
「誰かいるの？　いるなら返事をして！」
返事はなかった。そうこうしているうちに光の中央につく。
見上げると月が真上にきていた。中央が光っていたのはこのためなのだろう。
――何も起こらない。私の気のせい？
もう帰ろう。
もと来た道をたどろうとした、その時だった。
光が一瞬にして消える。
「……え？」
気がついた時にはもう遅い。まりいの姿は一瞬にして消えた。
後に残るは、ただ、湖のみ。

「ショウ、起きて。シーナがいなくなったの！」
「……なんだって？」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

私、どうしたんだろう。もしかして死んじゃったのかな。
うすれゆく意識の中、まりいはぼんやりと考えていた。
もし死んだらどうなるんだろう。夢から覚めるのかな――
《あなたはまだ死んではいません》
どこからか声が聞こえてくる。
《あなたは気を失っていたのです。でも大丈夫。水の砦の中なら安全ですから》
否、声というにはあまりにも不自然だった。まるで頭の中に直接語りかけてくる。そう形容した方がしっくりとくるかのような。
「水の砦？」
聞きなれない言葉にまりいは目を開ける。そこには笑みを浮かべた美しい女性がいた。
「あなたは？」
《私の名はアムトリーテ》
「アムトリーテ？」
しばらく首をかしげるも、シェリアのセリフを思い出しまじまじと目の前の女性を見つめる。
『どこからともなく全てが青い色の女性――水の精霊アムトリーテが現れ倒れていた若者に口付けをした――』
ペンダントを見つめ、シェリアはそう言っていたではいか。
「あなたはもしかして――」
《あなたはこの世界の人間ではありませんね》
言葉を先に発したのはアムトリーテの方だった。
アムトリーテ――水の精霊の発した言葉に、まりいはただ絶句するしかない。
《ここはどこにでもある名もない湖。砦はどこにでもあるけれど決して人の目に触れることはない。それなのに私とあなたはこうして

話をしている。不思議なものですね》
まりいが絶句する中、水の精霊は話しを続ける。
《あなたはこの世界の人間ではない。少なくとも、この世界で育った人間ではない。それなのに、あなたを見ていると、どこか懐かしい気持ちになる。なぜかしら》
「……どうして、そう思うんですか？」
やっとの思いで口を開く。
これは夢じゃないの？　なんで精霊がそんなことを知っているの？
《私は水の精霊。私たち精霊には人の心というものがわかるのです。……あなたは今、迷っていますね》
精霊の声に、まりいは再び口を閉ざす。
確かに、まりいは迷っていた。
眠っていたはずなのに気がついたら目の前に見知らぬ男の子が、ショウがいて。シェリアという公女様と共に旅をすることになって。
だけど――
この精霊は、人の心がわかると言った。それなら――
「一つだけ聞いてもいいですか？」
《私に答えられることなら》
意を決してまりいは精霊に訊ねた。今まで一番聞きたくて聞けなかったことを。
「ここは、この世界は……私の『夢』なんですか？」
変わりたかった。ものおじしない自分に。
変わりたかった。元気な自分に。
夢の世界なら、なんでもできるんじゃないかって思っていた。だから、ショウともがんばって話すようになったし、シェリアの護衛も引き受けた。だけど、根本的なところは何も変わってなかった。
変わっていないもの。それは人を信じることができないということ。
どんなに大切に思っていてもいつかは離れてしまう。一番初めに自分を置いていった両親のように。いなくなってしまうのなら、は

じめから一人でいた方がいい。もう、あんな思いはたくさんだ。
だがそれを嫌だと思う自分も確かにいる。私は二人を、人を信じてもいいの？　そんな思いがずっとまりいの胸を締めつけていた。
《この世界があなたにとって何なのか。それは私には答えられません。あなたが夢だと思うのであればそうでしょうし、逆もしかりですから》
「逆……」
それはまりい自身、うすうす気づいていたことではあった。
いつまでも醒めない夢。はたして、これは夢と言ってよいものなのだろうか？
これは、何？　夢じゃなければ一体なんだというの？
「私は、どうしたらいいの……？」
今のまりいには呆然とつぶやくことしかできない。
《あなたの信ずるままに》
「信ずるまま？」
《言葉どおりです。ただし、これだけは覚えておいてください。どんな場所にいても、どんなに世界が変わろうとも、自分が変わらなければ何も変わらないのです》
それは痛いほどわかっていた。
自分が変わらなければ何も変わらない。
《いつまでもここに長居するわけにはいかないようですね。あなたを心配している人達がいます。早く帰っておあげなさい》
水の精霊が穏やかな笑みを苦笑に変える。
「心配している人……」
精霊の言葉に、まりいは今まで一緒にいた二人を思い浮かべる。
でもそれは一時のこと。あの二人もいつか目の前からいなくなってしまうんだ。この世界が夢なのか本当なのかわからないのならなおさら――
《あなたは何を怖がっているのです？》
考えていることそのものを指摘され、まりいは体をこわばらせた。

《何事も話さなければ伝わりませんよ。あなたにはそれができるじゃないですか》
「……できる？」
本当にできるだろうか。変われるのだろうか。
それは、今からでも遅くない？
まりいが顔を上げると、それを肯定するかのように水の精霊は微笑んでいた。
《元の世界へは必ず帰ることができます。それよりも、あなたにはなすべきことがあるでしょう？　大丈夫。あなたにならできます。翼の民の血をひくあなたなら》
そう言うと、精霊はまりいの額に手を当てた。
次第に意識が遠のいていく。
《……あの子を、水の都の姫をお願いします》
うすれゆく意識の中で。それが、まりいと精霊との最後の会話だった。

Part，13

シェリアに揺さぶられ、少年は目を覚ました。
「ショウ、起きて。シーナがいなくなったの！」
焚き木の火は消えていた。自分でも知らず知らずのうちに熟睡していたらしい。
「……なんだって？」
まだ半分しか覚醒してない頭を軽くふりながら、ショウは立ち上がる。
「だから！　シーナがいなくなったの！」
いらただしげにシェリアが言うと、ようやく彼の頭は正常にもどった。
馬車の荷台に駆け寄ると、本来ならそこで眠っているはずの少女の姿が見当たらない。
「散歩じゃないのか？」
「そうかもしれないけど。危険じゃない？」
公女の指摘は正しかった。いくら結界をはっているとはいえ、そこを離れれば危険であることに変わりはない。ましてや今は夜中なのだ。
「あいつの行きそうな場所は？　思い当たる場所はないのか？」
「思い当たる場所……」
しばらく考えるそぶりを見せていた公女様は、少ししてポンと手をたたく。
「そうよ！　あそこだわ！」
「あそこ？」
眉をひそめるショウに、シェリアは視線を向ける。
「ほら、あの湖。夕食の時に三人で話したでしょ？」
『こんなところに湖があったんだ』
確かに話した。

『俺もさっき見つけたんだけどな。ああいうところは浅いようで実は深かったりするからな。むやみに近づかないほうがいい』
だが、注意もしたはずだ。いくら記憶喪失とはいえ、そんな無謀なことをしなくてもいいだろ。
ショウは胸中でつぶやく。だが文句ばかり言っていても仕方がない。
「捜してくる。シェリアはここで待ってろ」
「嫌よ。アタシもいくわ」
世間知らずの公女様がついてきたところでしょうがないだろ。足手まといになるのがオチだ。
そう言おうとして振り返り、ショウは口をつぐんだ。なぜなら目の前の公女様の目が。あまりにも真剣だったから。
「気づかなかったのはアタシの落ち度だわ。でも、シーナは大切な友達なの。友達を捜すのは当然でしょ？　お願い。足手まといにはならないから」
真摯な瞳。彼女なりに責任を感じているのだろう。
落ち度と言われれば、ショウ自身そうだった。ある程度のことは教えたし大丈夫だろうとたかをくくっていた。素人は何をするかわからない。もっと考慮すべきだった。こっちは探検家、プロなのだから。
それを口にしようとしてショウは再び口をつぐむ。今はそんなことをしている場合じゃない。反省なら、あとからいくらだってできるのだから。
「わかった。その代わり俺のそばから離れるな」
「うん！」
こうして馬を残し二人は夜に消えた。
実際、生命の危機と言われるような事態にはならなかったのだが。
代わりに、二人は黒髪の少女からとんでもない事実を聞かされることとなる。
「ショウとシーナって、知り合ってから長いの？」

道の途中でシェリアが問いかける。
「ミルドラッドに来る少し前だから時間的には君と大差ない。ジアノの少し前の道で倒れてた」
「倒れてた？」
不思議な言葉にシェリアが怪訝な顔をする。
「文字通り倒れてたんだ」
いや、あの場合は寝ていたと言った方がいいのかもな。ふと少し前のことを思い浮かべショウは苦笑した。
リネドラルドへ向かう途中で出会った黒髪の少女。そのままにしておくのも気がひけたから宿に運んで。
本当なら、目が覚めた時点で宿の主人に事情を説明して別れるつもりだった。だが、いざ目を覚ましてみると自分のことがわかないと言う。
（『これは夢ね』なんて変なこと言ってたしな）
もちろん、それはまりいが本当に記憶喪失だからというわけではなく、ショウ自身、勝手に勘違いしただけなのだが彼はそれに気づいていない。
「ねぇ、ショウ。シーナって本当に記憶喪失なの？」
シェリアの声にショウの思考は中断された。
「リネドラルドのことも知らなかったんだぞ？　そうじゃなかったらなんなんだ」
ここまでくるとわかるだろう。察しのとおり、ショウは極度の心配性のだった。だがいわゆるお人好し、とはまた違う。
自分は探検家なんだ。そんなことをしていたら自分の身がいくらあってももたない。
ショウは自分にそう言い聞かせていた。とは言いつつも、まりいを助けた時点で怪しいところなのだが。
実際に今までそうしていた。行き倒れがいたら最低限の食料を置いていくだけにしていたし、ましてや一緒に旅をすることなどなかった。助けを求めるふりをしながら金品を奪おうと襲いかかってき

た人間と遭遇したこともある。その度応戦してきたし、無理だとわかればすぐに荷を置いて逃げ出していた。元々、必要最低限のものさえあればいいのだ。金は必要だが命に比べれば軽いもの。もっとも、反撃に応じるだけの技能が充分に備わっていなければそんなことはできないしショウにはそれがあったため滅多なことで襲われることはなかったが。

十四歳。まりいの世界では中学生になるが、ショウやシェリアの世界では人それぞれだった。学生として勉学に励む者もいれば、労働源として働いている者もいる。それでもショウのように、危険を伴う仕事につく者は少なかったが。

彼がこの歳で探険家という仕事をしているのにはちゃんと理由があるのだが、それはまた後に話すとしよう。

まりいをここまで連れてきた理由。それを知りたかったのは、他ならぬショウ自身だった。もちろん、色々な場所をみれば記憶を取り戻す、何かを思い出すきっかけになるかもしれないと思ってのことではあったのだが。

『行くっ！　行きます！』

一緒に来るかと尋ねてすぐに返ってきたセリフ。それまでのおどおどした態度とは違い、まっすぐな瞳でショウを見つめていた。もしかしたらショウがまりいを同行させたのは無意識のうちにこの表情に圧倒されたせいかもしれない。

「シーナ、この前から様子が変だったの。これの話をした時くらいから」

そう言った公女様の首にはペンダント――アクアクリスタルが輝いている。

「よくわからないけど、何か事情があるんじゃないかしら？　時々、思いつめた顔してたもの」

シェリアの指摘にショウは目をみはる。

全く気づかなかった。確かに口数は減っていたが初めて会った時からそうだったのだ。旅の疲れもあったのだろう、そうふんでいた。

（女ってわからない）
十四の歳にしてそれを悟る探検家の少年だった。
だが、どちらにしてもここまで彼女を連れてきたのは自分なのだ。
「プロなら最後まで面倒みないとな……」
人知れず少年がそうつぶやいたその時だった。
「ショウ、あそこ！」
そこには、湖のそばに横たわるまりいの姿があった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

チ、チチ……。
鳥のさえずる声が聞こえる。
「シーナ！」
「お願い、目を開けて！」
どこからかショウとシェリアの声が聞こえる。
「……シェリア？」
二人の見守る中まりいはうっすらを重いまぶたを開けた。
「よかった。心配したんだからっ……！」
「シェリア、一体どうしたの――」
「それはこっちのセリフ」
急にシェリアにしがみつかれ、そのうえ泣かれてしまい、まりいは、おおいに戸惑っていた。さらに追い討ちをかけるように、残りの一人が言葉を続ける。
「シェリアが血相変えて『シーナがいなくなった』って言うだろ。それで」
ショウの言葉によって、ようやく、まりいは全てを思い出した。
湖に行ったことも、水の精霊にあったことも。
この世界が夢なのか現実なのか。それは結局わからずじまいだった。
だけど――

「シーナ？　顔色が悪いぞ」
「本当。早く休まなきゃ」
二人が私のことを心配してくれている。それを嬉しく思っている自分は、確かにここにいる。これは、きっと現実なんだ。
「二人とも。心配かけてごめんなさい」
たくさんの感謝と申し訳なさと。
まりいは二人にむかって深々と頭を下げた。
「……これからは単体行動はとるなよ。仮にも三人で行動してるからな」
「うん……」
肩を落とすまりいに、シェリアは横からそっとささやいた。
「ショウったら、もっと別の言葉使いなさいよ。あなたが一番必死になって捜してたんだから」
「え？」
「余計な事は言うな」
予想外の発言にきょとんとするまりいと、そっけなく、でも顔はうっすらと赤いショウ。二人の反応が面白くてシェリアはくすりと笑みをもらした。
「でも、本当に心配したのよ？　これからはちゃんとアタシにも言うこと。いいわね？」
本当に、二人はいい人たちだ。
だからこそ、言わなければならない。
自分が変わらなければ何も変わらない。
だから――
「二人とも、聞いてほしいことがあるの」

Part，14

「なんだよ。急に改まって」
「実は――」
「はい。ストップ」
二人の会話をシェリアが強引に静止する。
「ショウ、悪いけど向こうに行っててくれる？」
「なんだよ。シーナが話してるだろ」
続きをうながすショウに、シェリアはため息をついた。
「この状況で、よくそんなことが言えるわね。もう少し女の子のこと気遣ってあげなさいよ」
「だから何のこと――」
「……クシュン！」
シェリアの答えを指し示すかのように、まりいは小さなくしゃみをもらす。ここにきて、ようやく少年は、シェリアの意図を理解した。
今までずっと水の中にいたのだ。くしゃみをするのも無理もあるまい。水分を含んだ髪は素肌にはりついていた。服も同様、しかも体の線がはっきりと出てしまっている上に、服の間からは胸元がのぞいている。それを確認すると、ショウはとっさにまりいから視線をそむけた。
もっとも、あられもない姿を見せている当人は、それどころではなかったためきょとんとしていたが。
「……早くすませろよ」
それだけ言うと、ショウは足早に去っていく。顔が赤いのは、どうやら気のせいではなさそうだ。
「まったく。男の子ってデリカシーがないんだから」
ショウの後姿を見ながらシェリアが憤然と言う。
「ほら。シーナもそんな顔してないで早く体ふいて」

あらかじめ用意していたのだろう。そう言って大きなタオルを頭からかぶせる。
「本当はお風呂に入ったほうがいいんだけど。これで我慢してね」
「うん……」
シェリアになすがままにされながら、まりいは弱々しくうなずいた。
「……何も、聞かないの？」
勝手にいなくなったうえに、迷惑をかけてしまったのだ。何も思わないはずがない。
「これから話してくれるんでしょ？」
「……」
タオルの下で涙を必死にこらえる。顔が見えなくてよかった。まりいは心底そう思った。今見られたら、間違いなく泣き顔をさらすことになるから。
いじめられっ子だった子供時代。何かがあるたびに部屋の片隅で一人で泣いていた。それは、まりいにとって精一杯の抵抗だった。人に涙を見せるのは嫌だから。特に、顔見知りには知られなくなかった。心配をかけたくないから？　……違う。愛想をつかされることが、嫌われてしまうことが怖かったのだ。足手まといには――いらない子供には、なりたくない。
「はい、終わり。次はこれに着替えて」
体をふき終わるとシェリアは紙袋を差し出す。
「これ、私のじゃないよ？」
ましてやショウの服でもない。さっきの服を再び着るにしても、乾くまでには時間がかかる。
「気分転換よ。大切な話をするんでしょ？」
そう言うと、シェリアは片目をつぶる。
こらえていた涙がまた出そうになり、まりいはしばらく話をすることができなかった。

「お待たせ」
「……誰？」
背後に現れた人物に、ショウはなんとも間抜けな声を返した。
「誰って――」
水色のワンピース。所々に刺繍がほどこしてあるもシンプルな形のそれは、目の前の少女によく似合っている。
誰だろう。自分の知り合いに、このような女子はいただろうか。
「シーナに決まってるでしょ」
シェリアの言葉にショウは絶句する。
「アタシもびっくりしちゃった。こんなに可愛いなら髪下ろしとけばいいのに」
「だって旅をするのには邪魔になるし……」
確かに、旅をするには髪はまとめておいた方が動きやすい。服だってお嬢様然とした服よりも動きやすい物の方がいいに決まっている。だが。
「……馬子にも衣装」
それだけ言うと、ショウはそっぽをむいた。もう少しまともな服も買ってやるべきだった。そんなことを考えながら。
「ショウ！」
「いいの」
シェリアの反論を、まりいはやんわりと制した。今はそんなことを話している時じゃない。もっと大切なことを話さなければいけないのだから。
「それで？　これから話すんだろ？」
顔を元にもどし、ショウはまりいをじっと見つめた。
「うん……」
しばらく目をつぶり、まりいは今までのことを思い浮かべる。
ショウに助けられてシェリアと出会って。今まで色々なところを旅してきた。獣と遭遇して落ち込んだり野宿をしたり。三人で過ご

した時間は楽しかった。本当に、楽しかったのだ。
今までのことを無駄にはしたくない。だからこそ、二人に本当のことを話さなくちゃいけない。
「……私は、この世界の人間じゃありません」
目を開けると、まりいは真実を述べた。
「今、私が、ショウが、シェリアがいる世界は私にとっては夢なの。私は、ここではまったく違う世界から来た人間です」
こんなこと言ったら余計心配されるだけかもしれない。もしかしたら、怖がられてしまうかもしれない。
「信じられないかもしれないけど、聞いてください」
だけど、この二人にだけは全てを知っていてほしい。たとえ、どんな結果になったとしても。

それから一時間。
まりいは気の長くなるような物語を――まりいにとっては事実をありのまま話した。
『この人は信用できるの？』
『大丈夫なの？』
『私を一人にしない？』
頭の中でずっとわだかまりとして残っていた。それでも、自分は話さなければならない。まりいはそんな気がしていた。
もし、これが本当に夢だったとしたら、目が醒めたら全て忘れてしまうのかもしれない。だけど二人のことだけは忘れたくない。もし二人に嫌われてしまっても後悔だけはしたくない。
『あなたが正しいと思うことをしなさい』
私が正しいと思うこと。それは、現実から背を向けないこと。人を信じること。
二人はずっとそばにいてくれた。だから、信じてみよう。たとえこの先背を向けられることになったとしても。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

話が終わっても二人は口を閉ざしたままだった。
「ごめんなさい。変なこと言って」
力なく笑い、まりいはその場を離れる。
「気味……悪いよね。だけど私にとっては本当のことなの」
こうなることは予想していた。でも二人とも最後まで話を聞いてくれた。それだけで十分。十分だ。
「今までありがとう。さようなら」
無理矢理笑顔をつくり、まりいはその場を後にした。
結局、また一人になってしまった。でも、後悔はしていない。
しては――いけない。
「……待てよ」
沈黙を破ったのはショウだった。
「お前、約束破るつもりか？」
「約束？」
「そうよ。アタシの前で言ったじゃない。『公女様をお守りします』って。あれは嘘だったの？」
予想外の二人の反応に、まりいは驚いていた。気味悪がられることはわかっていた。どうして黙っていたのかと責められることも覚悟していた。だが、こんなことを言われるとは思ってもみなかったのだ。
「うすうす気付いてた。お前がここの人間じゃないってことに」
「え……」
知ってて、旅をしていたの？
またもや予想外の返答に、まりいは驚きを隠せない。実際、ショウがそう言えたのは先ほどシェリアから話をもちかけられたからなのだが。この際嘘も方便だ。
「記憶喪失ってのも怪しかったからな」
「それはショウが勝手に勘違いしたんじゃ……」

「そうだったか？　とにかくだ」
一つ咳払いをすると、黒い瞳をまりいに向け、話を続ける。
「さっき言ったことを全部信じたと言えば嘘になるけど、俺達はお前のことを化け物扱いしたってわけじゃないんだ」
「そうよ！　シーナはアタシにとって大切な仲間なんだから。友達なんだから」
「私、ここにいて……いいの？」
震える声で、まりいは二人に問いかける。
「当たり前でしょ？　アタシは護衛の任を解いた覚えはないわよ」
「……だそうだ。まあお前が嫌なら話は別だけど」
そう言った二人の表情は先ほどと全く変わることはなかった。
「……嫌なわけ、ない」
泣くのは嫌いだ。足手まといになってしまうから。いらない子だと思われたくないから。
だけど。
「……っ！」
まりいは、この世界で初めて涙を流した。
二人にしがみついて、幼い子供のように大声をあげて。

Part，15

リネドラルドを離れて三週間。三人はようやくミルドラッドに到着した。

「きれい……」

「お前って、そればっかりだな」

感嘆の声をあげるまりいの隣でショウが苦笑する。もっとも、今回は彼自身納得せざるをえなかったが。

三人がいる国、カザルシアには二つの主要都市がある。一つは王都であるリネドラルド、もう一つはここミルドラッドだ。リネドラルドは活気があふれいかにも『都市』という感じだった。だがここは『華やか』より『清楚』という言葉がふさわしい。さすが水の都と言うべきか。

「シェリアって、こんなきれいな場所で育ったんだ」

「うん。……でも、昔はもっときれいだったのよ」

応えた友人の声が、心なしか沈んだようにみえて。

どうしたんだろう。まりいは隣にいる友人の顔をまじまじと見つめ、ある事実に思い当たる。

ミルドラッドにたどり着く。それは三人の旅の終わりを意味していた。

元々シェリアを、公女様をミルドラッドまで護衛するということが今回の役目、任務だった。どんなにそれらしくない振る舞いをしていたとしても、彼女は公女様なのだ。はたしてこれから先この友人と出会うことはあるのだろうか。

どうして気づかなかったんだろう。もしかすると、これがお別れになるかもしれないのに。

「大丈夫よ。これがお別れにはならないわ。アタシがそうさせるもんですか！」

まりいの表情に気づいたのだろう。公女様が安堵（あんど）させるように笑

った。
「ここはまだ街中だ。護衛っていうのは対象者をを安全なところまでお連れすることを言うんだ」
公女の言葉を肯定するようにショウが続ける。
「最後まで責任もって護衛しろ。シェリアを城内まで連れて行く。それがシーナの役割だろ？」
「うん……」
ショウの声にうなずくも、まりいは胸の中に漠然とした不安を感じていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「お初にお目にかかります」
ほどなくして。三人はシェリアの父親、つまりはミルドラッドの公主と対面することとなった。
「リネドラルドの王から話は聞いておる。ショウと言ったな。娘をよくここまで連れてきてくれた。礼を言うぞ」
「光栄です」
正装をして使者らしくなったショウとまりいが礼の形をとる。もっとも彼女の場合、持ち合わせがなかったためショウの服を借りることとなったのだが。
「お母様。こちらの方にもお世話になりましたの」
ドレスを着てすっかり公女様然としたシェリアが笑いかける。さすが公女様。それまでの町娘然といった雰囲気はかけらもない。
「一人では心細かったから。本当にお二人にはなんと礼を言っていいのか」
半ば瞳を潤ませ、優雅に笑いかける様は、先程とは同一人物には見えない。やはり、彼女は公女様なのだ。二人うなずくと、視線を公女から別のものに向けた。
「そうですか。そなたにも苦労をかけましたね」

「そんなことないです……」
二人と話せるようになったからとはいえ、完全に人見知りがなくなったというわけではない。半ば消え入るような声で会話をしながらも、まりいは一種の違和感を感じていた。
どうしたんだろう。この人達、変だ。
確かに会話は成り立っている。だが、何かが違う。まるで心ここにあらずと言ったような。リネドラルドの時とはまるで違う。それとも王族とはこのような人達のことを言うんだろうか。
「お父様。わたくしお礼がしたいの。ですから、もうしばらくこちらに滞在していただいてもかまわないでしょう？」
鈴を転がすような声でシェリアが言った。公主は一度だけ自分の娘を見ると視線を二人に向ける。
「長旅で疲れただろう。部屋を用意しているからそこで休むがよい。報酬はおってよこす」
「お心遣い感謝いたします」
淡々とした声。
（シーナ！）
ショウに肩をたたかれ、二人して再び礼の形をとる。
「わたくし、二人をご案内します――」
「シェリア。あなたには話があります」
公女の声を妃がさえぎった。こちらも感情のない淡々とした声――に聞こえるのはまりいの気のせいだろうか。
「――わかりました。ではお二人とも後ほど」
ドレスのはしをつかみ優雅に一礼するとシェリアは両親の元へ歩く。
こうして二人は公女様と別れることとなった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

公主にあてがわれた部屋の中で、まりいはずっと考えごとをして

いた。
あれが親というものなの？　あれじゃまるで――
「どうした？」
ショウに言われ、まりいははっと顔を上げる。
「どうもしてない」
「だったらいつまでそうしてるつもりなんだ？」
まりいは部屋に立ち尽くしたままだった。
「あの人達がシェリアのお父さんとお母さんなんだよね」
あらかじめ用意してあったイスに座りながら、まりいは二人のことを、シェリアの両親を思い浮かべる。
「王様みたいなものだしな。それなりに思うところがあるんだろ」
「でも……」
「お前の世界じゃ、こんなことってないのか？」
ショウの意図するものがわからず、まりいは首をかしげる。
「身分とか、そういうの」
「……わからない。でもあまり関係なかったと思う」
まりいが答えると彼は小さな笑みをもらした。
「いいな。それって」
「え？」
まりいは再び首をかしげる。それを見てショウは苦笑した。
何を言ってるんだろう。こいつにそんなことを言っても仕方ないだろ。
「なんでもない。あ……」
「どうしたの？」
振り返ると、そこにはシェリアがいた。
「さっきはごめんなさい」
そう言って頭を下げる。いつもよりしおらしいのはドレスを、正装をしているせいだろうか。
「いいよ。お父さんとお母さんとの大事な話だったんでしょ？」
「うん……」

それでも公女様は頭を上げようとはしなかった。
「何かあったのか？」
それまでの一連を見ていたショウが声をかける。ぴくりと体を振るわせた後、シェリアはぽつぽつと言葉を紡いだ。
「ケンカの原因がわかったの。ラズィアの領主と結婚するか寄宿学校へ行って時期公主としての務めをはたすか今すぐ決めろ……ですって」
『な……！』
あまりのことに、まりいはおろか、ショウすら声をかけることができなかった。
確かに両親の仲が悪いということは聞いていた。だが、ケンカの原因ももちろんだが結婚に公主など。目の前の少女にはあまりにも過酷ではないか。
「アタシね。これでも頑張ってきたの。アタシが頑張れば、公女様らしくしてればお父様とお母様と仲良く暮らせるんじゃないかって」
唇のはしを上げて、公女様は笑う。だがそれはとても痛々しいものだった。
「三人でどこかにでかけたり誕生日を祝ってもらったり。子供じみてるって思うでしょ？　でもアタシにとってはささやかで、でも何よりも大切なことなの。でも現実は違う。……バカみたい」
「シェリア、もういい」
悲痛とも言えるシェリアの声に、まりいは首をふった。
「公女って何？　国を治めるための道具？　名前も知らない人にあてがわれる人形？」
「もういい――」
それが限界だったのだろう。シェリアはまりいにすがって肩をふるわせた。
「アタシ、誰かと結婚するために、国を治めるために生まれたんじ

ゃないわ！
親子三人で生活することがそんなにいけないことなの？　アタシの人生って何なの！！」
前に泣いたのは、まりいを助けてくれた時だった。今、彼女の瞳に宿るのは冷たくて悲しい涙。
何も言えず、まりいは目の前の少女をぎゅっと抱きしめた。
自分にしがみついてむせびなく少女。まりいはおろか、ショウですら声をかけることはできなかった。
声を出せるようになったのは、しばらくしてからのこと。
「……落ち着いた？」
「ん……」
涙をぬぐうとシェリアは立ち上がった。
本来なら何か言うべきなのかもしれない。だが、まりいにはそれができなかった。
「ごめんなさい。これじゃいい迷惑ね」
苦笑すると扉に手をかける。
「今日は休むわ。二人ともおやすみなさい」
「部屋まで送ろうか？」
「一人で大丈夫。だってここはアタシの家だもの。大事なお客様にご迷惑をおかけしてはいけないわ」
ショウの言葉を丁重に断り公女様は微笑んだ。
そう、ここはシェリアの家。広くて豪華で、でも空っぽで。
「シェリア！」
去り行く後姿に、まりいは声をかけた。
何か言わなきゃいけない。でも、なんと言えばわからない。
「明日、街を案内してくれない？」
そう言うのがやっとだった。
まりいの気持ちが伝わったのだろう。シェリア様は少しだけ笑みを浮かべる。公女としてではなく、彼女本来の笑みを。
「まかせて。どこだって案内してあげる。ここはアタシの庭なんだ

から！」

部屋を訪れた時とはいくぶんか明るい表情で出て行く。だが、まりいはミルドラッドを訪れた際に感じた不安を打ち消すことができなかった。

この後、まりいはシェリアを一人で帰らせたことを後悔することとなる。

Part，16

シェリアは生まれついての公女だった。
カザルシアの二大都市の一つ、ミルドラッドの領主を父に、王都リネドラルドの三人の王女の一人を母に持つ。本来、公女とは貴族の娘のことを指しているが、彼女の場合、王家とは直系となるのだから王女と呼んでも差し支えはない。
「お話とはなんなのですか？」
顔を上げ、シェリアはミルドラッド公と妃に、父と母に尋ねた。
「あなたは今いくつになるかしら？」
答えたのは母の方だった。
「――十四です」
「そう。もうそんなにたつのね」
シェリアは幼少の頃から神殿で育ってきた。したがって、自分の本当の父と母であるにもかかわらず、会話をすることは年に数回しかなかった。
それでも彼女は嬉しかった。自分から話をしてくれた、自分に興味を持ってくれたのだから。
「綺麗な色。これならあの方が気に入られるのもわかるわ」
公妃が少しだけ笑い、娘の髪に手をそえる。
「……お母様？」
言っている意味がわからない。
「ラズィアの公爵がそなたを妃に迎え入れたいと言った。異存はあるまい？」
初めて父が、領主が口を開く。
それが、シェリアにとって約一年ぶりの親子の会話となった。
「どうした？　顔色が優れぬようだが」
父親の言葉にシェリアは返す言葉がなかった。
空都（クート）では男性は１８、女性は１６で成人とみなされ同じ歳に結婚

も認められる。したがって婚約者がいてもさほどおかしくはない。ましてや公女ともなれば、話が全くでないことの方がおかしい。
おかしいが――
「驚いているのですよ。あまりにも急ですもの。そうでしょう？」
髪をなでながら母親が言う。確かに驚いていた。あまりにも急だったから。
今までだってほとんど会話をしていなかった。暖かい声をかけてもらえるとは思ってなかった。
でもこれじゃあ――
「あなた。わたくしは反対です」
静かな声で妃が告げる。
「隣国に寄宿学校があるの。今すぐそこへお行きなさい。これからの公女は学問もおろそかにしてはなりませんから。
女性だって、立派に公務ができるということを周りの者たちにしらしめておやりなさい」
人の意見などおかまいなし。これじゃあ――
「今までだってあなただけでやってこれたんですもの。一人でも大丈夫よね？」
これじゃあ、まるで人形じゃないか。
アタシは二人にとって何？
公女って何？
アタシはカザルシアという領土の繁栄ための道具なの？　ただの人形にしかすぎないの？
そんな言葉がシェリアの頭の中をかけめぐる。だが、目の前の大人達はそんな自分の娘の状態など気にする様子もない。
「勝手に話を進めるでない！　すでにこれは決まったことなのだ！」
「あなたこそおやめになってください。この子はまだ十四なのですよ？」
娘の前で延々と口論が繰り返されていく。

シェリアはただただ唇をかみしめ、その場に立ち尽くすしかなかった。
もしかしたら。今度こそ。
何度も淡い期待をしては裏切られてきた。話しかけても他人行儀、顔を会わせたかと思えば叔母の元へ行け。それでも彼女なりに精一杯やってきた。頑張れば、いつかは自分のことを気にかけてくれると思ったから。
「シェリア、あなたはどちらがいい？」
「わたくしは……」
ドレスのすそを握りしめ、うつむく。
はじめから期待しなければよかった。いくら月日が流れても、結局、何も変わらないのだから。
瞳の奥から熱いものが流れようとしたその時。
「シェリア様は大変お疲れのご様子。今日はそのくらいになされては」
しわがれた、でもはっきりとした声。
「シェリア様は大変お疲れのご様子。今日は休ませてさしあげればいかがかと。二人ともよろしいですかな？」
そこには神官服に身を包んだ初老の男がいた。
「しかし……」
「一日ぐらいお待ちなされ。大丈夫。シェリア様は逃げも隠れもいたしませぬ。それとも、あなた様は娘のことが信用できませぬか？」
こうまで言われては領主も首をたてにふることしかできない。
「わかった。そなたに任せよう。今日はもう休むがよい」
「……ありがとうございます」
頭をたれると、青ざめたシェリアをひきつれ初老の男は広間を後にした。
男にならい、シェリアは広間から逆方向に歩みを進める。
あの場所に、いたくはなかった。離れたかった。

忘れかけていた現実を、最悪の形で見せ付けられてしまったから。
「お久しぶりです。すっかり見違えましたな」
公女の胸中をよそに、男は柔和な笑みを浮かべる。
「一年でそんなに変わるわけないでしょ。でも本当に久しぶり。リューザ」
そこで、ようやくシェリアは男に――リューザに本来の笑みを見せた。
リューザ・ハザー。ミルドラッドにある神殿の最高責任者である。
彼は神官長であると同時にカザルシア王家、とりわけミルドラッド家の代々の教育係でもあった。無論、シェリアやその父親も例外ではない。領主がしぶしぶ承諾したのもそういういきさつがあってのことだった。
「髪、またうすくなったわね。また悩んでるんでしょう。あんまり悩むとハゲるわよ？」
「苦労の種が二人いますから」
リューザは目を細めると苦労の種の一つの頭をなでた。
「もう一つの苦労の種は？」
「あいかわらずですよ。ようやく帰ってきたかと思えば昨日出て行ってしまいましたし」
ため息をつくとリューザは手を離す。
「昨日？　もう少しゆっくりしててもいいのに。
……って言いたいところだけど、それが彼らしいのよね」
本当に彼らしい。仮にも主君の娘なんだから挨拶ぐらいしていきなさいよ！
公女様は心の中で毒づいた。
「シェリア様、今日はどうされます？　私の家にいらしてもかまいませんが」
「せっかくだけどやめとく。友達が来てるの。少しくらい寄り道したってかまわないでしょ？」

「かまいませんよ。ここはあなたの家なのですから」
育ての親の発言にシェリアは曖昧な笑みを浮かべた。
そう。ここはアタシの家。
広くて大きくて、静かな家。寂しい家。
「さあ。友達にも早くあっておあげなさい。きっと待ちわびてますよ」
「そうする。おやすみなさい。リューザ」
育ての親と別れをすませると、シェリアは友達のいる部屋へ向かった。
そして、彼女は二人の前で涙を流すこととなる。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

泣きはらした目で部屋にもどる。
部屋はとても広くて静かで、シェリアにとっては寂しさを、物悲しさを助長させるだけだった。
『アタシ、誰かと結婚するために、国を治めるためだけに生まれたんじゃないわ！』
自分で言った台詞に苦笑してしまう。
さっきはみっともないところを見せてしまった。これじゃシーナのことをとやかく言えないわね。
まりいやショウは知らないが、本来、これが公女様の本質だった。元々気さくではあったが環境がそれを許してくれなかった。リューザが彼女を自分の屋敷に招きいれたのは領主からの命令であったことと同時に、少しでも親元を離れずにすむようにとの彼なりの配慮のたまものだった。
元々、いい意味でも悪い意味でも素直すぎたシェリア。忠実な神官親子の愛情のおかげで公女様はすくすくと成長していく。その成果を見て、リューザは誇らしく思う反面どこで教育を間違ったのかとため息をつくことも多々あったが。

「……」
鏡の前に立つ。そこには首元でゆれるペンダント、アクアクリスタルがあった。
アクアクリスタル。以前この場所を離れる際にリューザが渡してくれたものだ。
「大切な想いはここにある」
彼が教えてくれた、本来この宝石に込められた意味を唇にのせる。

大切な想い。
アタシの想いは。

カタン。

物音がしたのはそんな時だった。
おかしい。窓は閉じているはずなのに。誰かが閉め忘れたんだろうか。
「誰かいるのですか？」
窓を開け、あたりを見回す。
誰もいない。じゃあ今の物音は。
「一国の公女様にしては、あまりにも無用心ですね」
窓を閉めたのと入り口が開かれたのは同時だった。
「シェリア様、ですね」
そこにいたのは黒装束の男。
「……何者です」
窓の柵をつかみ、気丈にもシェリアは相手をにらみつけた。
怖い。なんなの？　この人。叫びたいけど声が出ない。
こんな人、今まで一度も会ったことがない。ショウやシーナとも、城の兵士とも違う。でも悟られてはいけない。アタシは公女なんだから。
「あなたを迎えにあがりました」

「迎え？　一体何を――」
それから先は、話すことができなかった。
「それはご本人から説明がありますよ。もっとも用があるのはアクアクリスタルのようですが」
何が起こったのかわからない。
体の自由が利かない。どうして！？
「即行性の睡眠薬です。大丈夫、すぐにお連れしますから」
アクアクリスタル？　この石を狙ってるの？
とぎれる意識の中、ペンダントの鎖からヘッドの石を引きちぎる。

お願い、誰か気づいて――
石を手から離すと、シェリアは意識を闇にゆだねた。

Part，17

「私、余計なこと言ったのかな」
荷物の準備をしながら、まりいはぽつりとつぶやいた。
「……さぁな」
まりいのつぶやきにショウは苦笑することしかできない。実際のところ、彼自身もわからなかったのだ。王族の裏事情なんて当事者でなければ知ることなんてないのだから。
「街を案内してもらうんだろ？　だったらそんな顔するなよ」
「うん……」
その時だった。言い争う声と、たくさんの足音がしたのは。
「ショウ、今の音って」
まりいが言い終わる前に、ショウは部屋を飛び出していた。

廊下とはいえ城内のそれはあまりにも広すぎた。現に部屋を出てそれなりに時間はたつはずなのに誰とも遭遇しない。
「そうだよな。なんだかんだいって公女様の家だからな」
やっぱりシェリアは公女だったんだな。ショウは一人つぶやいた。それでも歩かなければ何が起こったか確かめることもできないが。
やがて足元に小さくて硬いものがふれる。それを手にとるとショウは眉をひそめた。
これは、こんなところに転がっているものじゃない。公女が肌身離さず持ち歩いていたものだから。
一体何が――
「お客人。こんなところにいたのですか？」
それは兵士の一人だった。全身で大きく息をしている。
「声がしたので部屋を出てしまいました。何が起こったんです？」
手にしたものを服のポケットに入れ、ショウは平然を装って尋ねた。

「姫様が見つからないのです。城内をくまなく探しているのですが。客人はご存知ありませんか」
「いいえ。今日はまだお会いしてませんが」
「そうですか……。何かありましたら我々に知らせてください」
やはりただことじゃなかったのか。走り行く兵士を見ながらショウは心の中で舌打ちした。
「ショウ、シェリアは――」
遅れて出てきた少女の目前に小さな石を差し出す。それは公女様の首にかけられていたもの――アクアクリスタルだった。
ミルドラッドの公女様がいない。当然、城内は大騒動となった。捜索は続いているものの公女の姿は一向に見当たらない。
「私がちゃんと着いていってあげれば……」
まりいは友人の顔を思い浮かべる。
本当に辛そうだった。あんな顔、もう二度とみたくない。
「今更言っても仕方ないだろ。悔やむよりもシェリアを捜すことの方が先」
「……うん」
弱々しくうなずき、まりいは台詞の主を見つめる。
自分だけだったら何もできなかった。この人はすごい。こんな状況でもちゃんと現実を見据えている。
彼の言うとおりだ。今はシェリアを捜さなきゃ。
「ショウ、シェリアのお父さん達はこのことを知ってるんでしょ？」
「これだけの騒ぎになればさすがに耳に届くだろ」
「だったら直接聞きに言ったほうが早いよね？　もしかしたら手がかりがわかるかもしれない。私、行ってくる」
そう言って駆け出そうとしたまりいの腕を、ショウは慌ててつかんだ。
「わかってるのか？　何の許可もなしに公主に謁見できるわけないだろ」

「昨日は大丈夫だったよ？」
どうしてそんなこと聞くの？　と言いたげなまりいにショウは軽く額をおさえて言った。
「それはシェリアがいたからだろ。俺達は一介の客人にしかすぎないんだ」
事実その通りだった。ショウとまりいはシェリアを護衛するという任で遣わされた人間にすぎない。たまたま昨日はシェリアの口ぞえもあってここに泊まることができたのだ。任が終了した今、ここにいる理由はない。むしろ早くここを離れなければならない。
だが、目の前の少女にはそれが通用しなかった。
「ショウはシェリアがどうなってもいいの？」
腕を強引に振り払い、まりいはショウの黒い瞳を見つめる。
「そんなこと言ってないだろ」
どこをどうとればそうなるんだ。ショウは心の中で毒づいた。
「誰も、何もしないとは言ってないだろ。他の方法を考えようって言ってるんだ――」
手を離し顔をあげる。だが彼の話を聞いてるはずの人物はそこにはいなかった。
あいつ、本当に行ったのか？　この前まで頼りなさそうにしていた奴が。
「……くそっ」
頭を軽くふると、まりいがいるであろう場所に向かって走り出した。
少女のいる場所を捜すのは簡単だった。言動を思い返せばいいだけのことだから。
それだけのことだが、常識のある人間ならそのようなことはできない。縁があったとはいえ相手は雲の上の存在なのだ。よほどのことがない限り、関わりあうべきではないだろう。
――だが。
「お願いです。シェリアの居場所を教えてください」

謁見の間には焦げ茶色の髪に明るい茶色の瞳を持つ少女がいた。
「わからないなら、せめて心あたりだけでも」
明るい茶色の瞳を領主とその妃に向け、熱心に頼んでいる。
――本当にいた。
「なんだ。お前は。無断でこのような場所に立ち入る出ない」
「用があるから来たんです」
しかも自分から一方的に話しかけている。
「兵はおらぬのか。無用心にもほどがある」
「おねがいです。教えて――」
会話は見事なまでに成り立っていない。さすがに止めないとまずいだろう。
これも記憶喪失だからできることなのか？　そんな思いがよぎるも少年はすぐにかき消した。記憶喪失ではないと言ったのは彼女自身だ。ならば異世界の住人だからできることなのだろうか。
「無断で立ち入り申し訳ありません」
呼吸を整え、ショウはまりいの隣に立った。
なんて無茶をするんだ。今までとは全く違う。こいつ、こんな奴だったのか！？　そんなことを思いながら。
「これを発見したので公女様の身になにか不吉なことがあったのではと思い、はせ参じた次第です」
ショウは鎖のはずれたペンダントを、アクアクリスタルを領主に差し出した。
「これは確かにシェリアのものだ。お主がなぜ――」
「失礼ですが、なぜお二人はシェリア様の婚儀をそれほどまでに急がれるのです？」
公主が全てを言い切る前にショウは問いかけた。こういう場合、話の主導権を自分が持つようにしなければならない。
「シェリア様にお聞きしました。ここにたどり着くまでそのような話など一度もなかったと。護衛を任されていた者としてはその真意をお聞きしたく」

実際、ショウ自身も気になっていた。婚約ならまだしもいきなり結婚など。何か裏があるのではないか。
「……ラズィアの領主が言ってきたのだ。式を急がせてくれと」
しばしの沈黙の後、公主は重い口を開いた。
「ここミルドラッドほどとはいかぬが、ラズィアは繁栄している。後々はミルドラッドの繁栄により力を貸してくれるだろう。婚儀を迎える歳が数年早まっただけのことなのだ。シェリアにも依存はあるまい」
ミルドラッドの繁栄？　まりいは眉をひそめた。だかそれを気にすることなく彼は話を進めていく。
「そういえば、しきりにアクアクリスタルのことを口にしていたな。本来なら成人を迎えるか、公の場でしか持ち出すことができない石のだ。なぜこのような場所に……」
「あなた、あの子はまだ十四なのですよ？　結婚などまだ早すぎます」
妃が領主の話をさえぎった。
「それよりももっと教養に励むべきです。ねえあなたがた、もう一度シェリアを護衛してくださらない？」
「……それは、シェリアも同意してるんですか？」
震える声で、まりいは尋ねた。
「当前でしょう？　子の幸せを願わない親がどこにいるとお思いになって？　今苦労をすれば、きっとシェリアのためにも――」
「……あなた達に、何がわかるんですか」
震える声で、まりいは言った。
「あなた達に何がわかるの！　シェリアが望んでいたのは結婚することでも寄宿学校に通うことでもない！」
まりいのことばに周囲は唖然とした。公主も妃も、周りの兵士も。
まりいは怒っていた。許せなかったのだ、目の前の大人達が。
「シェリア言ってた。『なんで両親と一緒に暮らすことすらできな

いの』って」
なんでそんなことが言えるんだろう。
「シェリアが望んでいたものは、あなた達と一緒に暮らすことだったんです」
普通の家庭なら当たり前のことなのに。どうしてそれすらできないんだろう。
「アクアクリスタルには何か秘密があるのですか？」
次に口を開いたのはショウだった。
「むこうは石を気にしていたと言ってましたよね。もしかすると、シェリア様はアクアクリスタルにまつわることに巻き込まれたのでは」
「うるさい。なんなのだお主は。一般人が公務に立ち入るでない！」
「リネドラルド王の依頼で来たんです。我々にもできることがあるはずです」
それだけ言うと、ショウはまりいと共に踵を返した。
「これからラズィアに行ってみます」
「証拠もなく勝手なことを――」
「ミルドラッドの使者としていくなら問題があるかもしれません。ですが、私達が単独で行くのなら問題ないでしょう？　幸い我々はここに到着したばかり。顔は知られていないはずです」
「……できるのか？」
眉をひそめる公主に少年は首肯する。
「ご期待にそえるかはわかりませんが、できる限りのことはやってみます」
そう言った少年の横顔は、とても１４のそれには思えないものだった。
だが、その表情もすぐにくずされることとなる。
「ならば引き続き護衛の一環として頼む。場合によっては礼金を上乗せしてもかまわぬ。

その方が、そなた達にとっても有利だろう？」
領主の一言に、まりいの足が止まる。
「……シーナ？」
急に逆方向に歩みをすすめるまりいに、ショウだけでなく周りは怪訝な顔をした。
「おい……」
止める暇もなかった。
パシッ！
謁見の間に、子気味いい音が響いた。

Part，18

全ての人間があっけにとられていた。兵士も、妃も、領主も。
一番驚いていたのはショウだった。
なんでそんなことができるんだ？　これも異世界の住人だからか？　それにしたって限度があるだろ。もはや理解不能だった。
普通やるか？　くってかかったあげく、大の大人の――公主の頬をひっぱたくなんて。
「シー……」
声をかけようとして、やめる。言ったところで今更なにがどうかなるというわけではない。
視線を向けると少女以外の人間はまるで何かの呪縛にかかったかのように動きを止めていた。それくらい誰にも予測できなかったということなのだろう。一体何が起こったのか。その場にいた全員が焦げ茶色の髪をした少女を見つめていた。
「お金なんかいりません！
私はシェリアを、友達を助けにいくんです。公女様じゃなくて、私の友達を助けにいくんです」
よほど強く叩いたのだろうか、まだ赤みの残る手を握りしめ、まりいは言った。
まりいは目の前の領主が許せなかった。
どうしてシェリアのことをそんなふうに言えるのだろう。実の娘のはずなのに。
まりいは目の前の妃が許せなかった。
どうしてそれで子の幸せを願っていると言えるのだろう。シェリアの幸せはもっと別のものなのに。
どうして二人はこうなのだろう。シェリアの望む幸せはきっと望めば簡単に手に入るはずなのに。もしかしたら子供の頃、自分が欲しがってやまないものだったのかもしれないのに。

「家族ってこんなにも悲しいものだったんですね。これが本当の家族って言うなら、親なんかもう……いらない」
なんでそんなこと言えるんだ。なんでそんな顔するんだ。全てをあきらめきったような顔。言葉とは裏腹にその顔は今にも泣き出しそうだ。
だったらそんなことはじめから言わなければいいだろ。ショウにとってまりいという少女はは本当に理解不能だった。
『親なんかもう……いらない』
それは少年にとって一つの何かを思い浮かばせる要素だった。
本当に女はわからない。いや、もしかしたらこいつだからこそわからないのかも。ショウは何度目かのため息を心の中でもらした。
とはいえ、このままじゃ目の前の少女の身が危ない。
「……ごめん」
そう言って弱々しく笑った少女を放っておけるほどショウは悪人でもなかった。ここまでかかわってしまったんだ。どうして放っておくなどできるだろう。
もしかして俺は、とんでもない奴と行動を共にしてるのでは。そんな思いが頭をよぎるもショウはかぶりをふった。こうなった以上もはや後の祭りなのだから。
「行くぞ。シェリアを助けるんだろ？」
苦笑すると二人踵を返す。
「何をしている！　その者達を捕らえよ！」
ようやく呪縛から開放された公主が言うももう遅い。
「こっちだ！」
「うん！」
二人はこうして謁見の間を後にした。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
なんでこんなことになったんだろう。走りながらショウは考えた。

元々、王から受けた任はフロンティアと呼ばれるものを探すことだった。それが気がつけば隣にいる少女の面倒をみることに、ひいては公女様をミルドラッドに送り届けることになってしまった。

前者は自分で決めたことだし後者は王から命じられたこと。結果的に首を縦にふったのは自分なんだ。それなりに覚悟はしていた。だが、この状況はあんまりではないか。

「ショウ、このあとどういけばいい？」

自分の隣を走る少女に視線をやる。全速力というわけではないがそれなりに急いでいるのにもかかわらず、まりいは息を乱していなかった。

こいつ筋がよかったんだな。これなら先の旅でも着いてこれるかもしれない。兵士から逃げているという状況にもかかわらずショウは妙なところで感心した。

「ショウ？」

「つきあたりを右だ！」

そこを曲がれば城から抜け出せる。兵士がいようがかまうものか。まずはここを出ることが先決だ。

「お前、変わったな」

走りながらショウは隣の少女に言った。だが聞こえていなかったのか、まりいはそれに答えずひたすら走るのみだった。

本当に変わった。

一番変わったのは表情だった。今まではどちらかというと弱々しく頼りなさげだった。なにしろ自分の顔を見ただけでおびえたように後ずさっていたのだから。

それが今では堂々とまではいかなくても顔をまっすぐにあげている。

それは自分とここにいない、まりいにとってはもう一人の友人のおかげなのだが、ショウはそれに気づくことはなかった。

「……！」

急にまりいの足が止まった。

「どうした――」
続いて、ショウの足も止まる。そこには神官服に身を包んだ初老の男がいた。
「……これはこれは」
初老の男が軽く目をみはる。
まりいを後ろにかばいながら、ショウは男をにらみつけた。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「長様、ここを男女の二人連れが通りませんでしたか？」
かけつけた兵士の声にリューザは首をかしげた。
「はて。一体何事です？」
「領主様に狼藉をはたらいたのです。すぐ見つかると思ったのですが――」
「男女の二人連れですか。わたしは見ませんでしたよ。一体どこにいるのでしょうね」
「我々はむこうを捜します。もし見かけたらお知らせください」
「わかりました。見かけたら声をかけましょう」
「申し訳ありません」
兵士は一礼の後、その場を去っていった。
「……狼藉、ですか」
誰もいなくなった後そうつぶやくと、リューザは一人廊下を歩く。しばらくすると小さな扉が見えた。
左右をゆっくりと見回し誰もいないことを確認すると彼は扉にむかって声をかけた。
「もう大丈夫ですよ」
「……ありがとうございます」
扉から姿を現したのはまりいだった。
「どうして私達をかくまってくれたんですか？」
同じく顔を出しながらショウは男をにらみつけた。
職業柄、著名人の顔は覚えていた。だが彼が――ミルドラッドの

神官長が自分達を助けてくれた理由がわからなかった。
「そちらの方はわたしのことをわかっているようですね。お初にお目にかかります。わたしはリューザ・ハザー。ここで神官の長を務める者です」
そう言うと、リューザは二人に笑いかけた。
「お二人のことはシェリア様から聞いています。シーナ様とショウ様ですね」
「シェリアを知ってるんですか？」
そういえば、子供の頃は神官の家ですごしていたって言っていた。もしかしたらこの人が？
まりいの考えていることがわかったかのように、リューザは笑みを返した。
「老いた身ですが、あなた達が何をしようかとしていることぐらいはわかります。これでもシェリア様の育ての親ですから」
そう言うとリューザは二人を伴い廊下を歩く。それは兵士が二人を追っていた方向とは正反対の道だった。
「この先を進めば外に出られます。シェリア様を早く助けてあげてください」
そう言って声とまりいに包みを渡す。
「あの、これは……」
「あとで必要になると思います。それからこれを」
続けてまりいの首にペンダントをかける。
「シェリア様に伝言です」
耳打ちされた言葉をきいて、まりいははっと顔をあげた。
「この石の本当の意味は『離れていても願いは叶う』です。どうか、あなた方に水の精霊の加護がありますように」
深々と頭を下げる神官長を見て二人は返す言葉がなかった。
シェリア。もう泣かなくていいよ。あなたにはこんなにあなたのことを想ってくれる人がいる。

神官の長に礼をすると、今度こそ二人は城を抜け出した。

Part，19

「『離れていても願いは叶う』」
ペンダントを握り締めながら、まりいはリューザに言われた言葉をつぶやいた。
手のひらサイズの青い石。その中心には女神像が彫られてある。シェリアが持っていたものと全く変わらない。唯一違うのは鎖が銀色ではなく金ということぐらいだろうか。
離れているってどのくらいの距離になるんだろう。
願いって何？　私の願いは――
「ショウは叶えてほしい願い事ってある？」
ラズィアにむかう馬車の荷台の中、まりいはショウに問いかけた。

「別に」
手綱を握ったまま、まりいの方を見ることなくそっけない返事が返ってきた。
「本当にないの？　これっぽっちも？」
「ない。強いて言えば――」
「言えば？」
まりいは思わず荷台の中から乗り出していた。だがその続きを聞くことはできなかった。
「……なんでもない。まずはフロンティアを見つけることが先だろ」
淡々とした声に苦笑するとまりいは再び荷台の中に身を潜めた。
男の子って願い事なんて考えないのかな。私だったら叶えてほしいことたくさんあるのに。
まりいが荷台に戻ったのを見てショウはほっと胸をなでおろした。

思わず口を開きそうになった。何を言おうとしてるんだか。今さら言ったところでどうしようもないのに。
実は、まりいとショウが願っていたものは形は違えど同じものだった。二人がシェリアを助けようと思ったのは根底にその願い、想いがあったからなのかもしれない。もっとも、そのことに気づくことは誰一人としていなかったが。
「さっきの包みってなんだったんだ？」
「うん、それが……」
肩越しにリューザからもらった包みを渡す。その中身を見てショウは絶句した。
「一体何を考えてるんだ」
「うん……」
ショウは思わずつぶやいた。まりいも苦笑せざるをえない。
確かにこれは使える。初めて見たときからそう思うことはあった。

だが同時に無理があるとも思った。だからできなかった。まさかあの神官ははじめからこれを考えてたのか？
「私、やってみる」
ショウの気持ちを見透かすかのようにまりいは言った。
「シェリアこのままじゃ可愛そうだもん。それに私が嫌だから」
まりいの言葉にショウは唖然とした。
今までだったら何をバカなことを言ってるんだと怒っただろう。でも目の前の瞳は真剣だった。
「……勝手にしろ」
それだけ言うと視線をずらした。反対することはできなかった。目の前の少女の決意が本物だとわかっていたから。
「うん。勝手にする」
ショウには見えなかったが、そう言ったまりいの顔は微笑んでいた。

「お前、変わったよな」
城内でつぶやいた台詞を再び口にする。今度はちゃんと聞こえたらしく、まりいは首をかしげた。
「まさか領主をひっぱたくとは思わなかった」
「あ……あれは！」
真っ赤になってうつむくまりいを見てショウは苦笑した。変な奴。さっきまでさんざん突拍子のないことをしでかしてたくせに。
「さっきの台詞、ちょっと胸にきた」
本当に驚いた。でも感動した。
『お金なんかいりません！
私はシェリアを、友達を助けにいくんです。公女様じゃなくて、私の友達を助けにいくんです』
シーナは異世界の人間だから常識はないんだろう。でも、いくらそんな人間だとはいえ俺だったらそんなことができるのか？
「……できないよな。きっと」
「え？」
「なんでもない」
再び首をかしげたまりいを見てショウは笑った。無自覚だったってことか。だったらなおさらすごいな。
まりいはどうして自分が笑われてるかわからなかった。だがいくら考えてもわからないものはわからない。考えることを放棄すると背中ごしに声をかけた。
「変わったとしたら、ショウ達のおかげかな」
「え？」
今度はショウが聞き返す番だった。
「私ね、子供の頃に両親に捨てられたの。だから……怖かった」
一人になることが。親しくなってもいつか離れていってしまうから。だから自然と距離をおくようになった。でもそれじゃダメだった。だからぶつかった。
「二人が私の話を聞いてくれたから。だから旅を続けられた。一人

にならずにすんだ」
背中ごしに聞こえる独白をショウは黙って聞いていた。　それ以上話すこともなくなったのか、まりいもずっと黙っていた。
二人の間に静寂がおとずれる。
「隣座れば？　外見えないだろ」
「うん……」
促されるままショウの隣に座り、まりいは外を見た。
初めてここに座ったのはリネドラルドに向かう時。あの時は無理矢理ショウに座らされたんだっけ。そのあとシェリアに出会って。もうずっと前のことのような気がする。
見渡す限りの草木。二人の間を吹き抜ける涼しい風。今は状況が違う。本当なら景色を見ている場合じゃないのかもしれない。でも――
「私、この世界に来れてよかった」
二人に遇えてよかった。
「ありがとう。あの時最後まで聞いてくれて。だから、今度は私の番」
シェリアを、大切な友達を助けるんだ。
そんなまりいの横顔をショウはまぶしそうに見つめていた。
「ショウ、この世界の名前って何？」
まりいに言われ慌てて表情をひきしめる。
気のせいだろ。目の前の奴がほんの少しだけ――大きく見えたなんて。
視線を前に向け、まりいの質問にショウはこう答えた。
「この世界の名前は、空都（クート）」
「空都？」
「空の都って意味。誰がつけたかしらないけど俺は気に入ってる」
「そう……」
まりいは頭上を見上げた。その横顔をほんの少し見つめた後ショウも同じ行動をとる。そこには雲一つない青空があった。

二人が出会った異世界。その名は空都。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ラズィアは人があふれていた。

リネドラルドのような華やかさもミルドラッドのような落ち着きもない。だが人でにぎわっている。

ここにシェリアがいるんだ。街の中で、まりいは館を見上げた。

カザルシアには主要都市は二つ。領地内に城が建てられているのもその二つ、リネドラルドとミルドラッドだけだった。

「シーナ！」

振り返るとショウが駆けてくるのが見えた。

「どうだった？」

「話はつけた。人手が足りないからいつでもいいって言ってた」

「わかった」

準備はできた。後は行動を起こすだけだ。

「本当に大丈夫か？」

念を押すようにショウはまりいの明るい茶色の瞳を見つめた。

「シェリアを助けるためだもん。やってみる」

その瞳に迷いの色はなかった。　苦笑するとショウはまりいの元に近づき正面に立つ。自分を見つめる黒い瞳にまりいは軽い戸惑いを覚える。どうしたのかと問いかける間もなく、次の瞬間まりいはショウの腕の中にいた。

「彼の者に幸福を。彼の者に祝福を。彼の者に――願いを」

触れるか触れないかくらいの軽い抱擁（ほうよう）。それは空都（クート）ではごく一般的な別れの挨拶だった。これから旅立とうとする者に願いを込めて言うのだ。これからの行く末に幸多からんことを。無事に自分の元に帰ってこれることを願って。それは、彼なりの敬意の表れでもあった。

「後で行くから絶対無茶はするなよ」

耳元でささやかれた声に一度だけ顔を赤らめるも、まりいはゆっ

くりと笑みを返し体を離した。
「うん。ショウも気をつけて」
互いにうなずきあうと、それぞれの役目を果たすため二人は別れた。

「……」
ふと、まりいは空を見上げた。

『この世界が嫌いなんですか？』
まだわからない。ようやく知り始めたばかりだ。
『今の生活が嫌なんですか？』
二人に会うことができたんだ。嫌――じゃない。
『変わりたいんですか？』
変われたんだろうか。それもわからない。

全てがまだ始まったばかり。何もかもこれからなんだ。
やってみよう。まずはそれからだ。
顔を元にもどすと、友人を助けるため、まりいは走り出した。

Part，20

『シェリア、こちらへいらっしゃい』
ああ、これは夢ね。
まどろみの中、シェリアはそう感じていた。
『お父様。見て！　お花』
『シェリアが取ってきてくれたのか？』
『うんっ！　わたくしお父様が大好きだもの！』
リューザに預けられる前に三人でお忍びでお花畑に行ったのよね。すっかり忘れてた。あの頃は二人とも笑っていて。

なのに――
『この子だって立派にここを治めることができます！』
『不可能ではないだろう。だが荷が重すぎやしないか？』
いつからなんだろう。二人が口論ばかりするようになったのは。
『シェリア、今からリューザの元へおいきなさい』
『どうして？』
『お勉強をするの。知識を身につけてお父様とお母様を助けるのです。それが公女としての勤め』
『わたくしの？』
『あなたはわかってくださるわよね？　あなたはいい子だもの』
『わかりました』
本当はわかりたくなかった。でもアタシが頑張れば、二人ともいつか笑ってくれると信じてたから。

『ねぇ、アタシは人形？』
『どうしてそんなことを聞くんです？』
そう。あの神官はアタシにそう言い返したのよね。親も親なら子も子供。あの親子にはたくさんのことを教えてもらった。おかげで

すっかり変わってしまった。でも後悔はしてない。だからこそ、今の二人に会うことができたの。大切な友達に。
『……私は、この世界の人間じゃありません』
そう言われた時は本当に驚いた。だけど、同時に守りたいと思った。目の前の友達は本当に真剣だった。きっとこの子は嘘をついてない。だったら、アタシがしっかりしないと。この子にはきっとアタシ達しかいないから。
友達に出会う。皆で旅をする。それは夢にまでみていたこと。彼と約束したこと。だけど、本当のアタシの願いは――
夢はそこで途切れた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「……？」
シェリアはゆっくりと目を開けた。
見知らぬ部屋。見知らぬ天井。視界をめぐらせ自分のおかれた状況を思い浮かべようとして、体を起こし――そこで動きを止める。
『話が違うではないか！』
なぜなら声が聞こえたから。内容はわからないが、なにやら言い争っているようだ。
『……』
『くそっ！』
延々と続く声にシェリアは気をひきしめた。自分がどういう状況にあるのかまだわからないのだ。油断はできない。
「なんなのだあいつは！」
やがて荒々しい音とともに一人の人間がが姿を現す。歳の功なら二十代。痩せぎすの体にギョロッとした目の男だった。
「あんな奴など雇わなければよかった。だからならず者は信用ならん」
いらただしげに爪をかむ男をシェリアは唖然として見るしかなか

った。
「だいたいあれさえ持ってくればよかったのだ。あれさえ――」
そこまで言ってシェリアと目があう。
「失礼。花嫁となる方をこのような場所に連れ出したこと、許していただきたい」
とってつけたように笑いかける男。だがシェリアはその男に好感を持つことはなかった。いや、できなかったのだ。まだ状況が全く把握できていなかったのだから。
「挨拶がまだでしたね。わたしはイプロ・ラズィア。もうすぐ貴女(あなた)の夫となる男です」
そう名乗った男は微笑むとシェリアの手の甲に口付けをした。
突然の行動に公女は顔を赤くした。彼女とて公女だ。そのような場面には何度か経験したことはある。だが今までの事態が事態であったために混乱してしまったのだ。
「婚約はお父様が決めたことです。わたくしは、あなたと結婚するつもりはありません」
口調を皇族のものに変え公爵の目を見据えて言うも、ラズィアの領主は特に意に介した様子もなく肩をすくめるだけだった。
「お父上が望まれたことを無に帰すつもりですか？　きっと嘆かれますよ」
父親が嘆く。それを聞いてシェリアは身をすくませた。
ラズィアの公主に、目の前の男性の元に嫁ぐ。それがお父様の望んでいたこと？　だったらアタシの意思は？　アタシはやっぱり人形にすぎないの？
「シェリア。石はどうされましたか？」
「宝石？」
「アクアクリスタルのことですよ。肌身離さずお持ちになられていたんでしょう？」
その名前を聞いた途端、シェリアは首元に手をやった。首にかけられているのは銀色の鎖だけ。アクアクリスタルはない。なぜなら

彼女自身が引きちぎってミルドラッドの城内に置いてきたのだから。
思い出した。アタシは黒装束の男の人に連れ去られたんだった。アタシを、アクアクリスタルを迎えに来たって。それを命じたのは目の前の公爵なんだろう。そう考えると筋が通る。
「……アクアクリスタルをどうなさるおつもり？」
公女は今までよりも敵意を込めた瞳で公爵を見つめた。
「どうもしませんよ。ただ大切なものをお預かりしようと思ったまでです。貴女にとってもわたしにとっても」
――嘘。シェリアはとっさにそう感じた。はじめから結婚だけが目的だったらこんなことはしないはずだ。
「さあ正直に言ってください。石は一体どこにあるんです？」
「寄らないで。無礼者！」
近づこうとした公爵を大声で怒鳴りつける。
「それ以上寄ったら大声だしますわ。ミルドラッドにいるはずの公女が助けを呼ぶんですもの。あなたきっと捕まりますわ」
これは一種のカケだった。立て続けに色々なことがおこりすぎて頭が混乱している。まずは考える時間がほしかった。
「……いいでしょう。今日は引き下がりましょう。時間はまだありますからね」
あっさりと返事は返ってきた。
「わたくしをどうするつもりです」
「しばらくここに滞在してもらいます。わたしの元にいても何の不思議もないでしょう？　貴女はわたしの妻となる人なのだから」
その言葉にシェリアは青ざめた。アタシはもうここから出られないの？　お父様やお母様にも、友達にも会うことすらできないの？
「女中を用意させます。身の回りのことはその者に頼むといいでしょう」
そう言うも公女は青い顔のまま公爵をにらみつけるだけだった。無理もない。ことの元凶である男に優しい言葉をかけられても余計

不信感が募るだけなのだから。
「おやすみなさい。わが妃」
苦笑して再び公女の手の甲に口付けをすると、ラズィアの公爵は部屋からいなくなった。

誰もいない部屋で、シェリアはベッドにたおれかかった。
「なんなの、もう」
久しぶりに城に帰れば予想もしなかった婚約話。そしてその相手であるはずの男性に捕らわれてしまった。これで何も言わずにいられるだろうか。
「なんなのよ、一体」
枕に顔をうずめシェリアは泣いた。

それから一週間。シェリアは部屋から一歩も外に出ることができなかった。
食事や湯浴みはいつもさせてもらっている。だがいつも監視つき。これでは休まる暇もない。毎日訪れる公爵に監視のことを尋ねても話をそらされ、逆に石はどこだと質問攻めの日々。これでは気も狂いたくなってくる。
「でも、ここで泣き寝入りしちゃダメなのよね」
シェリアは必死に自分に言い聞かせる。
「『公女たるものいついかなる時も臨機応変に対応できなければならない』。そうよね？」
かつて自分にそう教えてくれた友人の、兄の言葉をつぶやく。それだけで幾分か彼女の心は軽くなった。
そう、しっかりしなくちゃいけない。アタシは公女なんだから。
その時だった。
「公女様、湯浴みの準備が整いました」
扉ごしに女性の声がする。ほんの少しだけ扉を開き、シェリアは

外の様子を観察した。
そこにいたのは二人の侍女。一人は姿勢が正しく、いかにも侍女然と言った方がよさそうな初老の女性。もう一人は少女だった。恥ずかしいのだろうか、頭を下げているため表情は読み取れない。
「何度も言っています。それくらい一人で十分です。これ以上わたくしにかまわないでくださる？」
シェリアとしては棘棘しく言ったつもりだった。だが年老いた侍女は気にする様子もなくもう一人の侍女に呼びかける。
「ほら。あなたも何か言いなさい」
もう一人の侍女は、一つうなずくと公女にこう言った。
「公女様、お疲れでしょう？　私達がお手伝いします」
それは、公女にとって聞くに久しい者の声だった。
「……わかりました。お願いしますわ」

浴場に着くまでシェリアはずっと無言だった。侍女二人も何も言わなかった。やがて浴場にたどり着くとシェリアは言った。
「あなたはもうお帰りなさい」
「ですが、この子一人では――」
「外のお話を聞かせてもらいたいのです。それくらいいいでしょう？」
その笑顔はとても寂しげだった。
領主が丁重におもてなししろといわれた姫。その姫がこう言うのだ。自分よりも近しい年頃の娘の方が話もできるのだろう。年老いた侍女はそう思った。
「わかりました。あとでお迎えにあがります」
もう一人の侍女に『くれぐれも粗相のないようにするのですよ』と言うと、年老いた侍女はその場を後にした。

浴場の片隅で公女と侍女は言葉を発することなく対峙していた。
「あなたもそんなところにいないでこちらへいらしてください」

公女の呼びかけに侍女が近づく。
「うつむいてないで、顔を見せてくださらない？」
さらなる呼びかけに、侍女はゆっくりと顔をあげる。
「……まさか、来てくれるとは思わなかったわ」
それはシェリアの正直な感想だった。
自分がいなくなれば城内が大騒ぎになることは予想できた。だが、ことがことだし城内に着いた時点で契約の期限は切れている。彼女を友達だと言ったのは自分だ。でもまさかこうして助けに来てくれるなんて。
侍女は、まぎれもないシェリアの友人――まりいだった。

Part，21

「シェリア、大丈夫？」
自分と同じ明るい茶色の瞳が心配そうにのぞいている。
「平気よ。……って言いたいところだけど、なんか疲れちゃった」
まりいと再会したことで緊張の糸が切れたのだろう。シェリアはそばにあったイスにぺたんと座る。
「ここにはどうやって来たの？」
「ショウが手配してくれた。ここで働かせてもらえるようにって」
ショウと別れた後、まりいは領主の館へ向かった。だが公女の元へすぐ駆けつけるのは危険すぎる。そこで侍女として働きながらシェリアと接触する機会をずっとうかがっていたというわけだ。
「お父様達は？」
「ミルドラッドにいる。公にはなってないから私達だけで来たの」
まりいが告げるとシェリアは自嘲的に笑った。
「そう。……アタシってやっぱり道具だったのね」

本当は少しだけ期待していた。お父様が来てくれるんじゃないかって。

「シェリア……」
「大丈夫よ。慣れてるから。元々変な期待をもったアタシがいけなかったんだし」

嘘。本当は少しだけ期待していた。お母様が心配してるんじゃないかって。

「これも公女の勤め。これくらいのりきらなきゃ」
明るい口調とは裏腹に、シェリアは表情を見せようとはせず、そ

の肩は震えていた。
『お父上が望まれたことを無に帰すつもりですか？　きっと嘆かれますよ』
違う。お父様はアタシなんかのことで嘆いたりしない。アタシはミルドラッドのための人形にすぎないのだから。
本当は来てほしかった。否定してほしかった。『あなたは道具なんかじゃない』って言ってもらいたかった。
震える肩をそっと抱くと、まりいは静かに言った。
「もう一度やり直してみたら？」
「……え？」
「リューザさんからの伝言。『離れていても願いは叶う』だって」
神官から託されたペンダントを、まりいはシェリアの首にかける。

「シェリアの願いって何？」
「アタシの願いは……」
そんなもの、一つに決まっている。ささやかで、でも決して叶えられることのなかったもの。
「ご両親もきっと心配してるよ」
「嘘よ！」
まりいの一言にシェリアはばっと顔を上げる。　その目には涙がたまっていた。
「二人とも国のことばかり。アタシのことなんかちっとも考えてない！　だから――」
「ケンカをしていても、親は親だよ」
シェリアの言葉をさえぎり、まりいは静かに言った。
「二人とも本当はいい人なんだよ。そうじゃなかったらシェリアみたいないい子が生まれてくるわけないもん。
きっとどこかでネジがくるっちゃったんだよ。大丈夫。話しあえばきっとうまくいくよ」
まりいのあまりにも穏やかな表情にシェリアはあっけにとられた。

なんでこの子はそんなことが言えるのだろう。ついこの前まで心もとなげにしていたのに。
「……本当にうまくいくかしら」
消え入るような声でシェリアはぽつりとつぶやいた。
「大丈夫。だって私がここにいるのはシェリアのおかげだから」
「え？」
「私がここまで来ることができたのは二人が話を最後まで聞いてくれたから。自分のことを話すのって勇気がいると思うんだ」
『私は、この世界の人間じゃありません』
あの時はとても怖かった。もしかしたら友達と思っていた二人と離れることになるかもしれないから。でも二人は最後まで聞いてくれた。受け入れてくれた。だから今度は私の番。
「やれるだけやってみようよ」
そう言って微笑むまりいをシェリアはしばらく呆けたように見ていた。
この子にはアタシ達しかいない。だからアタシがしっかりしないと。アタシにも人を守る、友達になることができる。そう思って今まで接してきた。でも今ここにいる子は誰だろう。アタシよりも何倍も大きく見える女の子は。
「今度はシェリアの番。私にもできたもん。きっとできる。そのきっかけをくれたのはシェリアなんだから」
涙を浮かべた瞳と、意思を含んだ瞳が無言で交差する。どちらも明るい茶色の色。
「……アタシは道具になりたくない」
先に口を開いたのはシェリアだった。強引に涙をふいて口の端を上げる。
シェリアはかつて自分の兄と呼ぶべき人が言った台詞を思い浮かべていた。
『あなたは公女である前に一人の人間なんだ。だから閉じこもって

るだけじゃいけない』
道具じゃない、人形じゃない。本当は誰かにそう言ってもらいたかった。でもそんなの誰かに決めてもらうことじゃない。
『あなたはそうなりたいですか？』
かつて、彼はシェリアにそう聞いた。その時はうまく答えられなかった。だけど――
「アタシは人形じゃない」
自分で決めた。誰がなんと言おうとそれは変えられない。変えさせはしない。
「そうね。やってみる」
アタシはシェリア。公女である前にシェリアなのだから。
「あの二人にガツンと言ってやらなきゃ！」
誰にも文句は言わせない。それで十分。だって――
「うん。シェリアはシェリアだよ」
だって。アタシにはそう言ってくれる友達がいる。

シェリアが笑ったのを見てまりいは安心した。
よかった。もう大丈夫だ。
本当のところ、ご両親とどうなるかは彼女自身もわからなかった。なぜならまりい自身がそうなのだから。だが相手を信じて自分の気持ちを伝えなければ何も始まらない。
（いつか、私もそんな日がくるのかな）
頭の隅でそんなことを考えるも、まりいは慌てて首をふる。今はここから抜け出すことの方が先だ。
「シェリア、時間がないの。これに着替えて」
そう言うと、まりいは包みを手渡す。
「これは？」
包みの中身を見てシェリアはショウと全く同じ反応をした。
「リューザさんが渡してくれたの」
「リューザが……」

シェリアは額を指で軽く押さえた。確かに二人とも背格好は似通っている。でもさすがにこれは無理がある。
そう思っていた。少なくともこの時までは。
「時間がないの。早く」
まりいに促され、シェリアはしぶしぶ自分の服を脱ぎはじめた。
隣ではまりいが同じことをしている。
「どうなってもしらないわよ？」
それでも皆の心遣いが嬉しくて、シェリアは笑みをもらした。そこにはもう『公女』としての姿はない。シェリアはシェリアなのだから。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「公女様。湯浴みはすみましたか？」
再び侍女が訪れる。そこには新しい服に身を包んだ公女と若い侍女がいた。
「体を冷やしてしまっては大変です。すぐに部屋へ戻りましょう。そちらのあなたは持ち場に戻りなさい」
年老いた侍女の言葉に一つうなずき若い侍女はその場を後にする——
「ああ、お待ちなさい」
呼び止める声に、侍女だけでなく公女までもが身を硬くした。
「ご苦労様。後でちゃんとお給金をもらうのですよ？」
こくこくとうなずくと、今度こそ侍女はその場からいなくなった。
「……気をつけて」
後姿を見て公女は小さくつぶやいた。
「あら、お帰りなさい」
道すがら声をかけられ侍女は体を強張らせた。もう何度目になるのだろう。心の中で小さくため息をつく。でもここをのりきらなき

ゃいけない。
「どうしたの？」
声をかけてきたのは同じ格好をした者、侍女仲間の一人だった。
もっとも彼女よりもずっと年上ではあったが。
「婚約者のところへ言ったんでしょう？　どうだったの？」
「歳若いっては聞いていたけど、実際どのくらいなの？」
「公爵様も少しくらいお見せしてくれたっていいのにねぇ」
そんな気持ちとはお構いなしに周りは興味津々といった顔で歳若い侍女に詰め寄ってくる。
「すみません。気分が悪くて……」
なおも問いかけてくる女性達にうつむきながら、若い侍女は消え入るような声で返事をした。
「あらごめんなさい。気づかなくて」
「奥の方で休む？」
さっきとはうってかわったように気遣わしげな声をあげる。
――この人達は普通の人なんだ。事実を知ってるのは一部の人だけなのね。
「大丈夫です。ごめんなさい。今日は帰らせてもらいます」
「そうね。それがいいかもね」
ほんの少し罪悪感を感じながら歳若い侍女は後にした。

城はあっけないほどあっさり通り抜けることができた。周りに誰もいないことを確認すると、侍女は大きなため息をついた。
「……ふー」
本当ならこのまま本当に休んでしまいたい。でも中に取り残された子はどうなるの？
「いけない、弱気になっちゃ」
両手で自分の頬を軽くたたき、歩きだす。
その時だった。急に腕をつかまれたのは。
「どうしてここにいるんだ？」

それは久々に目にする慣れ親しんだ少年の顔だった。
「失敗したのか？」
それはよく見知った少年のものだった。
「あの計画自体無理もあったからな。いくらなんでもそう上手くはいくはずもないか」
彼女だけじゃない。目の前にいる男の子もこうして助けに来てくれた。
「おい――」
「あなたも来てくれたのね！」
ほっとしたのと嬉しさと。感動のあまり侍女は少年にしがみついた。
「……もしかしてシェリアなのか！？」
少年が――ショウが戸惑いの声をあげる。
「他に誰に見えるの？」
大通りの真ん中であるにもかかわらず侍女は――シェリアは腰に手をあてた。
どうやら本物の公女様だ。少なくとももう一人の奴はこんなことはしない。ショウは苦笑すると言った。
「とりあえず場所を変えよう。詳しい話はそれからだ」

Part，22

宿の一室でショウはシェリアと久しぶりの会話をしていた。
「そうしてると似てるな」
「でしょ？　アタシも驚いたわ」
そう言ってくるりと優雅にまわる。服装は侍女の格好のままだ。
二人が入れ替わる。それはまりいが考えた作戦だった。元々背格好が似ていた二人。幸い周りはこちらのことを知らない人ばかり。少しの間ならごまかしがきくのではないか。もっとも神官長が二人のカツラを用意しなければできなかったことだが。あの神官はそれをたった一回で見抜いたのか。だとしたらとんでもない人だな。人知れずショウは背筋に冷たいものを感じた。
確かに似ているとは思った。でもまさかここまでそっくりだとは思わなかった。それがショウの正直な感想だった。焦げ茶色の髪に明るい茶色の瞳。何も話さなければ目の前の少女はまりい以外の何者でもない。これだけ似ている――そのものなのだ。公女が偽物だとは気づかれてはいないはず。だがもしものこともある。
「ミルドラッドに戻るぞ」
気を取り直しショウはシェリアに言った。
「シーナは？」
「数日は公女のふりをしてもらう。その間にリネドラルドの騎士団に来てもらう」
二人が入れ替わりシェリアはミルドラッドへ。まりいが時間かせぎをしている間にショウがリネドラルドの騎士団に連絡を入れる。これが今回の手順だった。
「間に合うの？」
「ぎりぎりってところだな。
そう言えば城にアクアクリスタル落としてただろ？　今回の一件と何か関係あるのか？」

「部屋にいたら黒尽くめの人に襲われたの。アクアクリスタルを話していたからとっさに――」
それで城に落ちていたわけか。それなら合点がいく。
ふとショウは公女の首元を見る。彼女の首にはペンダントはなかった。
「もう一つはシーナに預けたの。いけなかった？」
よくはなかっただろう。そう言いたかったが抑えることにした。公女をここまで連れてこられただけでもまりいの功績は大きい。後は運を天に任せるしかない。
「とにかく帰ろう」
そう言って踵をかえそうとしたショウの腕を公女様がつかむ。何事かと振り返った少年に、公女は真摯な瞳で言葉を紡ぐ。
「まだ言ってなかったわ。来てくれてありがとう」
少しの間絶句するも、肩をすくめショウは苦笑した。
「礼ならあいつに言え。元々あいつが言い出したことだしな。すごかったぞ。領主のところに直談判。怒鳴ったあげくに最後は……」
ここまで言うとショウはシェリアから視線をそらした。言っていいものかと思案しているような口ぶりにシェリアが続きを促すと、ショウは口を開いてこう言った。
「領主の頬をひっぱたいた。平手でおもいっきり」
「……」
二人の間を沈黙が流れる。その後どちらともなく笑い出した。
「すごいわね。お父様をぶつ人がいるなんて」
「俺もまさかあんなことするとは思わなかった」
もしかしたらこの中で一番すごいのは彼女なのかもしれない。二人の間に共通の思いが生まれる。そして笑いをおさめた後も同じ思いが生まれていた。
「こんなことしてる場合じゃないわね。早く帰りましょ」
「そうだな。早く迎えにいかないとな」

シーナ、どうか無事で。
偽りの公女を一人残し、二人はミルドラッドの帰路についた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

シェリアとまりいが入れ替わって五日。偽りの公女はずっと一人だった。
「シェリア、大丈夫かな……」
幸いだったのか当然のことだったのか。公女の素性が周囲の人間にばれることはなかった。それだけ二人の容姿が似通っていたということなのだろう。なにしろ一緒にシェリアの元におとずれたあの侍女でさえもまりいを公女だと信じて疑わなかったのだから。もっともシェリアがここでは口数が少なかったため余計ばれずにすんだのではあるが。
「いつまでこうしてるといいのかな」
無理は承知での時間稼ぎなのだ、そうそう上手くいくはずがない。それは充分承知していた。だが日がたつにつれ、はたしてうまくいくのか、まだばれてはいないのかと不安が募る。
「あなたが石のありかを教えてくれればいつでも出してさしあげますよ」
第三者の声にまりいはあわてて振り向く。そこには、まりいより一回り年上の男性がいた。痩せぎすの体に鋭い目つきの男。彼はラズィア公爵だったのだが初対面だったまりいは当然知るはずもない。
「石ってアクアクリスタル？」
つぶやいてまりいはあわてて口をおさえた。私は今シェリアなんだ。余計な事を言ったら怪しまれてしまう。だが公爵がまりいの態度に気づく様子はなかった。
「やはり知っていたんですね。早く渡してください」
口調とは裏腹に表情は険しい。早くほしくてたまらない、切羽詰

っているような顔――そう表現するのがふさわしい。その表情にまりいは思わず胸元をおさえる。それがいけなかった。
シュンッ！
「！」
胸元、正確には首にかけていた鎖を切られ、まりいは体をすくませる。
小さな音をたて青い石が床に転がる。
「やはり隠し持っていたか」
公爵は忌々しげにつぶやくと石を、アクアクリスタルを手にした。
「ちゃんと調べたのか！　だからならず者は――」
「『石と公女をラズィアに連れてくる』それが仕事だ。確かに石はあった。その後落としていたなら俺の管轄内じゃない。あんたの不手際が起こしたことだ」
淡々としいて、威圧感のある低い声。そのとたん公爵の顔は一瞬にして青ざめた。
「怒鳴りちらす前にやることをやればどうだ？　時間がないんだろ？」
そう言って目の前にあったナイフを手に取ったのは黒尽くめの男。さきほどペンダントをちぎったのはこの男によるものだった。
公爵は再び忌々しげに男を見ると再びまりいに問いかけた。
「これで道具はそろった。次はどうすればいいんです？」
やっぱりアクアクリスタルが目的だったんだ。問いかけに答えることなく、まりいは公爵をきっとにらんだ。
「石と公女がいなければ道は開かれない。方法は教わっているはずでしょう？」
公爵の台詞にもまりいは答えない。本当に知らないのだ。話しようもない。
怖い。怖いけど逃げられない。だったら黙っているしかない。
「言え！　言うんだ！　さもないと――」

「さもないと何なんだ？」
それ以上公爵が近づいてくることはなかった。なぜならば黒装束の男が公爵の首にナイフを突きつけていたからだ。
「わたしにたてつく気か！？」
「そんなこと知ったことか。俺の目の前であまりも無様なやりとりだけはやめろ。どう見てもこいつの方がお前より立派だ」
長身の男。同じ痩せ型でも公爵とは違い、黒装束からのぞく藍色の目はとても冷たい。まるで見ている人間を凍らせてしまいそうだ。
一度だけ瞳が合い、まりいは慌てて目をそらした。男はさしてそれを気にするそぶりもなく視線を公爵の方に向けた。
「……ふん」
荒々しくナイフをどけると公爵は男とまりいを交互に見る。
「婚儀は三日後です。それまでによい返事を期待してますよ」
それだけ言うと公爵は部屋を後にした。後に残されたのは公女と黒装束の男のみ。
「……」
まりいは震えていた。無理もない。かすっただけとはいえ目の前にナイフが飛んできたのだ。悲鳴をあげなかっただけでも立派なものだろう。
公爵がいなくなったのにもかかわらず男は一向に部屋を出て行こうとしない。おそるおそるまりいが声をかけようとしたその時だった。
「……あの」
「お前は公女じゃないな」
黒装束の言葉にまりいの表情は凍った。
「わ……わたくしはシェリアです。何を証拠に――」
「公女はアクアクリスタルを身につけていた。銀色の鎖に青い石のな。今、お前のつけているものは金色だ」
黒装束の言葉にまりいは慌てて首もとに手をやる。それは男の言

うことを肯定していることに他ならないのだが、まりいにはそんなことを気づく余裕もない。
「そういう時は最後までしらをきれ。自分は偽物ですと言っているようなもんだ」
そう言うとまりいの肩をポンと叩いた。そのとたん、まりいの体はくずれおちる。
どうしよう。ばれてしまった。やっぱり石は返しておくべきだったんだ。　シェリアごめんなさい。これじゃあ時間稼ぎにもならなかった――
だが、この時点でまりいの素性がばれることはなかった。
「何が目的か知らないが何を言われようが最後まで毅然としてろ。それが相手を欺くコツだ」
そう言うと黒装束の男は部屋を後にしようとする。遠ざかる後ろ姿を呆けたように見た後、まりいは慌てて声をかけた。
「待って！」
なぜ男を呼び止めたのかまりいにはわからなかった。男もそう思ったらしく顔だけをまりいの方に向ける。
「どうして私が偽物だって言わなかったんですか？　はじめからわかってたんでしょ？」
「本当に似ていたからな。その鎖を見るまで確信はなかった。それに、これ以上あの男に義理立てするつもりもない」
「え？」
「かと言って、お前を助ける義理もない。このことは黙っておいてやる。後は一人で切り抜けろ」
そう言うと今度こそ黒装束の男は部屋から出て行く。
完全に一人になると、まりいは大きく息をはいた。
「なんなの……これ」
それは同じ場所で本物の公女が言ったものと同じ台詞だった。
見知らぬ男の脅迫まがいの言動にナイフを投げてきた黒装束の男。何もかもがまりいにとって初めてのことばかりだった。まあ身の危

険にさらされることなど普通の少女にはありえない話なのだが。
「……怖い」
全身の震えはまだとまっていない。
本当はとても怖かった。シェリアと入れ替わろうとした直前、こんなことはやめるべきだとも思った。でもできなかった。シェリアを、大切な友達を助けたいというのもまりいの本心だったから。
変わりたい。そう思ったから。あの時の気持ちに嘘はない。
「……がんばらなきゃ」
そうつぶやくと、まりいはしばしの休息をとることにした。黒装束の男の言葉を借りるわけではないが、ここまできた以上毅然としているしかないのだから。

「あれ。もう用は終わり？」
黒装束の男の前には銀髪の少年がいた。姿を認めると、男は手だけふってそれに答える。
「もらえるものはもらった。ここに用はない」
「そのわりには長居してたみたいだけど？」
旅装束に身を包み、あどけなさの残る表情で声をかけてくる少年を、男はやはりそれまでと変わらぬ冷たい眼差しで見る。
「お前だけここにいるか？　俺はそれでかまわないけど」
「言ってみただけじゃん。ゼガリアって短気だね」
「……」
「あっ、待ってよゼガリア！」
人懐っこい笑みを浮かべ銀髪の少年は黒装束の男を――ゼガリアの後を追った。

Part，23

そして同時刻。
「アタシはシェリアです！　公女である前に一人の人間なの！」
謁見の間でショウは以前と同じ境遇に頭をおさえた。
どうしてだろう。どうして俺の周りにはこんな女しかいないのだろう。
「アタシはアタシです。人形でも道具でもない！」
ずっと旅をしていたからわからなかった。女って案外たくましいんだな。
公女様のうしろで少年は大きなため息をついた。

「帰ってきたのね……」
シェリアは感慨深げにつぶやく。街中のいたるところにあるのは噴水。まぎれもないここはミルドラッド。シェリアの生まれ故郷だった。
「どうする？　直接城に行くか？」
ショウの申し出にシェリアは首を横にふった。
「直はさすがにダメでしょ。他の方法でいきましょ」
「考えがあるのか？」
「着いてきて」
シェリアに促され二人して道を歩く。城内であれだけのことをしていたのにもかかわらず、街は初めて来た時と全く変わりなかった。街の住人も全くおびえた様子もない。
おかしい。兵の姿が見えない。領主が自分達の詮索をやめたとは考えにくい。あれほどのことをやったのだ、怒っていないはずがないだろう。ならなぜこうも平和なのか。
「障害物はないにこしたことはないか」

疑念を追い払うようにショウは首を横にふる。今さら考えていても仕方がない。余計不安に陥るだけだ。
「何か言った？」
「なんでもない。急ごう」
二人はさらに道を進んでいった。しばらくすると古ぼけた一軒家にたどりつく。
「中に入って」
言われるままショウは建物の中に入った。家具全てが埃にまみれていて今にも壊れそうだ。
「ここに何があるんだ？」
「抜け道があるの。ちょっと待ってて」
何でそんなものを知ってるんだ？　ショウが問いかけるその前に、ドカッと何かを蹴破る音がした。その後に見えたのは壊された壁とその奥に続く通路。
「……ええと」
彼にしては珍しく言葉につまってしまった。
「さ、早く！」
なんと言っていいのかわからず、ショウは公女様の後に呆然とついていくことしかできない。
「子供の頃はよくここで遊んでたの。あの家が壊されてなくてよかったわ」
何事もなかったかのように道を進む公女を見て、運び屋の少年はおずおずと声をかけた。
「周りは何も言わなかったのか？　あの神官長、リューザ様が教育係だったんだろ？」
「リューザは色々言ってたけど、この方法はその教育係の息子が教えてくれたのよ？　これくらい知ってて当たり前だって。抜け道だって買い食いの仕方だって教わったんだから」
それこそ何事もなかったかのように会話を続ける公女に、今度こそショウは言葉をつまらせる。

「どーかしたの？」
「……なんでもない」
額に手をあてるショウを見てシェリアは首をかしげた。
なんでそんなことを聞くのかわかってないといった表情。原因が自分にあるなんてこれっぽっちも思っていないんだろう。実際その通りなのだが――ショウは他の言葉を捜す。
「こんなこと、いつも『教育係の息子』とやらに教わったのか？」
そう言ったのは何度目かの扉を蹴破った時だった。
「そうよ？」
あっけらかんと言ってのけるシェリアにショウは目まいを覚えた。比較的幼い頃から旅や運び屋の仕事をしていた彼にとって、同年代の異性と接する機会はあまりなかった。だからそうだと言われたら納得するしかない。だが仮にも公女がさびついた扉を蹴破っていくという状況はいかがなものだろう。
シーナの時といい、女とはこういうものなのだろうか。王族とはこういうものなのだろうか。それとも今までの俺の認識が間違っていたのか。
「『公女たるものいついかなる状況においても臨機応変に行動しなければならない』そうでしょ？」
「……そうかもしれない」
この際だ。そういうことにしておこう。別の疲れを感じながらショウは曖昧にうなずいた。
「その教育係の息子に会いたくなってきた」
その人に会って聞きたい。一体どちらの認識が間違っているのかと。その人に会って聞きたい。一体どんな教育をしたのかと。
「この間までいたみたいなんだけどまた旅に出たんですって。今度帰ってきたら紹介するわ」
実はこの人物とは後に顔をあわせることとなる。もっともそれが長い付き合いになろうとは二人は知る由もない。
やがて通路は終わりをむかえ、視界は明るさをとりもどす。

「着いたわね」
公女の嬉々とした声にショウは半ばげっそりとした表情で顔を上げる。
「今度はどこに着いたんだ？」
「アタシの第二の家」
そう言った公女は本当に嬉しそうだった。公女は神殿で育ったと言っていた。ということは――
「そう言っていただけると、わたしとしても嬉しいですね」
そこにいたのは神官服に身を包んだ初老の男。
「お帰りなさい。無事に帰れたようですね」
「リューザ！」
考えるまでもなく、そこは神殿だった。
「お帰りなさい。お体は大丈夫ですか？」
「あの時はありがとうございました。公女様もなんとか無事です。幸い兵士にも遭わなかったですし」
実際、この神官がいなければシェリアを助け出すことはできなかった。ショウはリューザに深々と頭を下げた。
「それは何よりです。街の皆さんに手配してもらった甲斐がありました」
『手配』とは一体どのようなことを言うんだろう。そう聞こうとして、ショウは口をつぐんだ。表情は穏やかだが、かもしだす雰囲気が『これ以上野暮なことを聞くな』と物語っている。これ以上深入りするのは怖い。本能的にそう感じていた。
それと同時に、ショウは一つの結論に至る。シェリアがシェリアなのはこの神官長とその息子とやらの教育によるたまものだと。一方、そのシェリアは育ての親に会えたという嬉しさでいっぱいだった。
「お帰りなさい。大変でしたね」
自分に抱きついて泣きじゃくる公女の背中をリューザは優しく叩いた。

「アタシ、アタシ……っ！」
子供のように泣きじゃくる――実際子供なのだが――公女をショウは離れた場所で見ていた。たて続きに色々なことがおこったのだ。緊張の糸が切れたんだろう。彼女も普通の女子だったんだな。そういえば姉はどうしてるだろう。元気でやっているだろうか。
「ショウ様もありがとうございました。育ての親として礼を言います」
リューザの声にショウは慌てて思考を閉ざした。
「私は……俺がやったことは少しにしかすぎません。実際にやったのはシーナだ」
そうだ。ここにいるのは本物の公女一人。ラズィアには偽物の公女が、シーナが取り残されているのだ。彼女を連れ戻さなければこの一件は本当の意味で解決したことにならない。
「そうよ！　シーナを助けなきゃ！」
涙を拭いてシェリアはショウの方を見た。
「救援はどれくらいかかるの？」
「話はつけた。二日もあれば十分だ」
大急ぎで馬を乗り継ぎリネドラルドに事の顛末を告げたのはつい先日。公女が、姪が捕らわれの身であることを知った王はただちに兵を集めた。
だがそれでも時間はかかる。必ずラズィアにむかうという約束をとりつけた後、ショウは一人ミルドラッドに戻ってきたのだった。
「二日ですか。その間に私たちは私たちにできることをしましょう」
厳かに告げる神官を二人は不思議な顔で見た。
「まずはあなたです。思いのたけをぶつけてください」
育ての娘の肩をつかみ、リューザはにこやかに告げた。
そして、現在に至る。

「アタシはシェリア。公女である前にアタシなの！」
両親の前で公女は思いのたけをぶちまけていた。
「……いいのか？　あれで」
なんと言っていいのかわからず、ショウは思わず本来の口調でつぶやく。少しして聞きとがめられたかと口をつぐむも、リューザは意に介した様子もなく穏やかに言った。
「いいんですよ。あれで」
そう返す神官もどうかと思うけど。その台詞はなんとか飲み込みんだ。シェリアをじっと見た後、視線を隣の少年に移し神官は静かに語る。
「シェリア様は色々溜め込みすぎていたんですよ。本当に素直なお方ですから。いい意味でも悪い意味でも」
「どういう意味ですか？」
「いずれわかります」
リューザの言葉の意味を考えてみるも少年にはまだ理解できない。仕方がないのでショウは神官や周りの兵士と同じく成り行きを見守ることにした。
全てを吐き出した後シェリアは言う。
「だから結婚はしません。
勉強は、します。だけど寄宿学校には行きません。アタシは……わたくしはお父様とお母様と一緒にいたいんです。自分のことは自分で決めたいんです」
その後ぎゅっと目をつぶる。
言うだけ言った。後はどうなるのだろう。聞き入れてほしい。わかってほしい。
だってアタシは、あなた達が好きだから。

Part，24

謁見の間は静まりかえっていた。　兵士はおろか領主も言葉を発しない。

連れ去られたと思われていた公女の突然の帰還に領主と妃への反発。突然の事態のたてつづけに誰もがどう対すればいいのかわからなかったのだ。

「公よ、あなた様はまた同じ過ちをおかすおつもりですか？」

老神官の一言が重い沈黙をやぶる。

「口がすぎるぞ。私は過ちなど――」

「御自分の娘を泣かせて正しいとでも？」

全員がはっとして公女を見る。公女は、シェリアは泣いていた。

「これが過ちでなくて何なのです？」

厳かに告げる神官長を前に、公主は二の句が告げなかった。　その様子を見て、リューザは妃に同じ質問をする。

「妃様。あなたのお父上は、先代のカザルシア王はいかがでしたか？　立派な方だったのでしょう？」

「当然でしょう。それはリューザ、あなたが一番よく知っているはずです」

シェリアの母親はリネドラルドから嫁いできた。とどのつまりは元リネドラルドの皇女、父親は先代のカザルシア王ということになる。今さら何を聞くのかと半ば嘲笑じみた発言に、初老の神官は静かに語りかけた。

「ではその先代はあなた様に――自分の娘に今のシェリア様のようなことをなさったのですか？」

そう言うと、妃は顔を赤らめうつむいた。否定しないということは神官の言葉に思い当たる節があるということなのだろう。

――すごい。

ショウは心の中で感嘆の声をあげた。まさに鶴の一声。俺達が行

動を起こさなくてもはじめからこの人に任せておけばよかったのではないか？
「差し出がましいことを言って申し訳ありません。ですが、育ての親として不穏な行動をしている輩にシェリア様を嫁がせたくはなかったもので」
「不穏な行動？」
それまで口を閉ざしていた公主が顔を上げる。
「それはこちらにいるショウ様がよくご存知かと」
その場にいた人間の視線が一斉にショウに向けられる。
――すごい。すごすぎる。
再び感嘆のため息をもらした後、ショウは公主にむかって事実を告げた。
「ラズィアの公主は不正をはたらいています。シェリア様の婚儀を急がせたのもそのためです」
「不正？」
「詳しいことは騎士団からおって知らせがあります。これを」
周囲のざわめきをよそに、ショウは公主に一枚の書状を手渡した。目を通した途端、公主の顔がみるみる青ざめていく。
「ラズィア公はアクアクリスタルを使って何かをしようとされていたようです」
「アクアクリスタルを？」
「それは神官長様が詳しいかと」
ショウ一言で視線が再び初老の神官に注がれる。
「純正のアクアクリスタルには王族にしかなしえないことがあるのです。これは我々神官の一族にしか伝えられていませんから」
「なぜ今まで黙っていた！」
公主が声を荒げるもリューザは平然とした顔で会話を続ける。
「神官長代々受け継がれていた秘め事だったのです。それは君主であるあなた様にも伝えることはならない。知りえたところで現在はシェリア様しか扱うことができないことですから」

「アタシしか？」
目をこすりながらシェリアは首をかしげた。そんなこと今まで一度も聞いたことがなかったのだ。
「正確には、成人を迎えていない王族の者しか扱えないのです。アクアクリスタルはあるものを示す手がかりなのです。あちらはどこかでその情報を知りえたのでしょう」
「……内通者がいたと？」
「それはわたしのあずかり知らぬところです。ですが、あちらの思うようにはいかないでしょう。あちらにはこれがありませんから」
リューザの手の中にはもう一つのアクアクリスタルがあった。銀色の鎖に青い石。それは公女が肌身離さず身につけていたもの。もう一つは偽りの公女が身につけているはずのものだった。
『大切な想いはここにある』『離れていても願いは叶う』これらの指し示すものとは一体何なのだろう。
「さあ。あなた方はどうされますか。それでもシェリア様を嫁がされますか？　寄宿学校へよこされるのですか？　ご自分の娘が悲しむことをなされるおつもりか」
目の前にはかつての教育係であるリューザ。そのすぐ隣には娘のシェリア。公主は言葉につまってしまった。
「お父様……」
弱々しく声をかける自分の娘。父親と――自分と同じ明るい茶色の瞳。怒られるのが怖くて、でもわかってほしくて。
娘の顔をこんなにじっくりと見たのは久しぶりだ。前は公爵との婚礼と妻との一件でろくに会話もしようとはしていなかった。いつの間にこんな表情をさせるようになってしまったのだろう。考えてみれば公務にかまけて娘どころか妻である妃のことさえろくにかまおうとしなかった。いくら公女とは言えこの子はまだ子供なのだ。親の愛情を欲しがらない子供などいるはずがない。
少しだけ目を伏せ公主は――父親は、娘に言った。
「シェリア、そなたは……おまえはどうしたい？」

今までのものとは違う穏やかな口調に気づき、シェリアは一言一言かみしめるように言った。
「一緒にいたいです。お父様と、お母様と一緒に」
それがシェリアの願いだった。
両親と一緒に暮らす。それはささやかで、簡単なようで、今までずっと叶うことのなかったもの。
「……そうか」
シェリアの言葉に公主は静かに目をつぶる。再び目を開けた時、彼の目はそれまでと違っていた。
「婚約は破棄だ。こちらからも直ちに兵をあげろ」
「……え？」
「寄宿学校もいかなくていい。ここには優秀な教育係がいるからな」

父親の言葉にシェリアは唖然とした。
「おまえのようなはねっかえりを行かせるわけにはいかないだろう。……不満かい？」
真っ赤な顔でシェリアはぶんぶんと首を横にふった。
「これは私の独断にすぎないが、そなたはどうだ？」
夫の言葉に妻は苦笑しながら首を横にふった。　妃とて全く娘のことを想っていなかったわけではないのだ。こうなった以上、何を否定する必要があるだろう。
「夫の言葉には妃は従わなければなりませんわ。その代わりちゃんと教養を身につけるのですよ」
「はい！」
シェリアは何度もうなずき二人に抱きついた。戸惑いながらも娘を抱きしめる公主と妃。そこにはもう、それまでの悲しい親子の姿はなかった。

「はじめから、こうなることがわかっていたんですか？」

シェリア達の様子を遠巻きに見ながらショウはリューザに問いかけた。
「まさか。わたしは神に遣える身ですが、預言者ではありません」
ここに来る前と全く変わらぬ表情の神官を見て、ショウは肩をすくめる。深くは考えないほうがいいのだろう。公女の幸せそうな姿を見れただけで充分じゃないか。
「きっと、これからが大変でしょうね」
「今ではなくて？」
「あのお二方はろくに夫婦らしい会話もできていませんでしたから。しかもシェリア様とはそれ以上でしょうし、シェリア様ご本人がいつここを離れてしまうかわかりません」
「……シェリアは両親と一緒にいることを望んでたんだ。そう簡単にミルドラッドを離れようとはしないと思う」
これまでの言動から、口調を元にもどしてショウはリューザに言葉を投げかける。それに対し、神官はまるで自分の子供にでも語りかけるような口調で告げた。
「今は、そうでしょうね。本来あの子は一つの場所にとどまる性格ではないのです。期をみていつかいなくなってしまうでしょう」
「よくわかりますね」
「育ての親ですから。子供は日々成長している。それを目の当たりにするのは嬉しい反面寂しくも感じます。それはあなたにも言えることです」
ショウは曖昧な笑みを返すことしかできなかった。
シェリアはそれまでの環境を嘆いていたが、決して不幸ではなかったのだろう。こんなに立派な養父がいたのだから。ましてや、これから本当の家族になろうとしているのだ。不幸であるはずがない。
「全ての行動には何かしら意味があるのです」
目をつぶり、神官長は静かに語る。
「何事も行動を起こさなければはじまらないのです。

今回はシェリア様のことがきっかけになりました。ですが、その糸口となったのはあなたとシーナ様。あなた方がいなければあの光景は決して見ることができなかった」
「それは神官としてのお言葉ですか？」
「わたしの持論です。　若者の行動力には時に驚かされます」
神官長だからだろうか、それとも年老いた者の発言だからか。リューザの台詞には心を動かされるものがあった。
「全ての行動には何かしら意味がある」
神官の言葉を、ショウは自分の唇にのせる。行動をおこさなければ何もはじまらない。確かにあの一連の行動がなければ何も起こらなかった。そして、そのきっかけを作ったのは――
「あいつだよな」
ここにいない一人の少女の行動を思い出し、少年は苦笑した。
本当に、なんであんなことができるのだろう。出会った頃はただの弱々しげな少女でしかなかったのに。
「一つ聞いてもよいですかな？」
リューザの言葉にショウは顔を向けた。
「俺の答えられることなら」
「あのお方はシェリア様と大変よく似ていらっしゃる。ですが、ミルドラッドにはおろかリネドラルドにもあのような方の存在は記録されていない。あの方は一体何者です？」
その言葉にショウは静かに目をつぶる。それは先ほどの公主と全く同じ行動だった。
そんなもの、俺の方が知りたい。顔を見たとたんに後ずさって、怖がりなくせに自分から狩りについてきて。かと思えばとんでもない行動をとって。
だけど、一つだけ確かなことがある。
目を開けると、ショウは神官長の目を見据え、静かに、だがはっきりとした口調で言った。
「あいつは――シーナは、俺の相棒です」

Part，25

「姫様お綺麗ですわ」
「これなら公爵様もお喜びになりますわね」
侍女達の声をうけながら、偽りの公女は鏡に映る自分の姿を見る。真っ白なウエディングドレス。裾の部分に銀糸の刺繍が入ったそれは侍女達の成果もあってか公女によく似合っていた。本来ならば少なくともあと二年はたたなければ着ることのできなかった代物に、まりいは苦笑する。
今日はラズィア公爵とミルドラッドの公女の結婚式だった。何度か抜け出せないかと試みてはみたものの、今度はさらに警備が厳重になっており少女一人では出歩くこともままならない状況になっていた。
「姫様これを」
年老いた侍女が花束をまりいに手渡す。
「これは？」
「他の者につんでもらいました。このブーケは花嫁を幸せにしてくれると言われています」
（この世界にもそんな言い伝えがあったんだ……）
ドレスとてらしあわせたように真っ白な花。地球で言う、かすみ草だろうか。小さな花をたくさん集め、周りを水色の紙で覆ってある――
「……？」
ブーケの中に何かが紛れ込んでいることに気づき、まりいは尋ねた。
「この花を摘んでくださった方は？」
「さぁ……。誰か知っているかしら」
周りの侍女に尋ねてもそれぞれ首を横にふるばかりだった。
他の者に頼んだが送り主のわからないブーケ。それに紛れ込まれ

たあるもの。導き出される答えは一つ。
「少しだけ一人にさせてもらえますか？　気持ちを落ち着けたいんです」
「ですが……」
「ほんの少しでいいんです。お願いします」
頭を下げる公女を見て、年老いた侍女は慌ててしまった。
「おやめになってください。あなたは妃様になられるお方なのですから。
……わかりました。またお迎えにあがります」
礼をすると侍女達は部屋を後にする。扉が閉められたことを確認して、まりいは改めてブーケをまじまじと見た。ブーケの中にひそんでいたもの。それは小振りのナイフと一枚の手紙だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

シーナへ

ごめんなさい。アタシのせいでこんなことにまきこんじゃって。何かひどいことされてないかそれだけが心配です。
あの後、お父様とお母様に話してみたの。婚約は破棄、これからは三人一緒にくらそうって言ってくれました。これもシーナのおかげね。あなたには本当に感謝してる。
今いる部屋からまっすぐ行ったところに大広間があります。そこから左へ行けば外へ抜け出せます。ショウがそこで待ってるから頑張って抜け出して。目印に赤い花を置いてるんですって。あなたの無事を確認してから騎士団が城内に入るみたい。
それじゃあ、また会いましょう。

シェリア

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

手紙を読み終えると、まりいは安堵のため息をもらした。
よかった。仲直りできたんだ。これでもう大丈夫。あとは逃げるだけでいい。
手紙とナイフを服の中にしまい、部屋を出て行こうとして――まりいは、あることに気がついた。
アクアクリスタルはどうなったんだろう。手紙には一言も書いてない。もどることは簡単だ。でもあれはシェリアにとって大切なものだ。
……このままでいいの？
「姫様、準備はよろしいですか？」
扉の向こうで侍女の声がする。
「……はい」
まりいはある決心を胸に返事をした。
だがその決意は、後に自分の身を滅ぼすこととなる。

侍女に連れられ、まりいは礼拝堂にたどりつく。
「これは素晴らしい」
「式を急がせたのもうなずけますな」
そこには来客だろうか、大勢の貴族も参列していた。その中心には正装をしたラズィア公爵の姿がある。
「シェリアよ、お待ちしていました。この日が来ることをどんなに待ち望んでいたことか」
「アクアクリスタルはどこですか？」
笑みを浮かべる公爵にまりいは毅然として答えた。
『何が目的か知らないが何を言われようが最後まで毅然としてろ。それが相手を欺くコツだ』
ペンダントを奪った男の姿は見えない。本当に公爵が自分を偽物だと知らないという確証もない。だがここまできた以上公女として

通すしかない。まりいの静かな決意が彼女をより公女らしくさせていた。
「困った方だ。わたしより宝石の方がよっぽど大事だとみえる」
「答えてくださ――」
まりいはその先を言うことができなかった。なぜなら公爵に抱きしめられていたからだ。
いや、正確には公爵の言葉に恐怖を感じたからだ。
(大人しくしていないとこれから先のことが保障できないぞ)
耳元でささやかれ、まりいは体を強張らせた。男性に抱きしめられている嫌悪感と恐怖で足が震える。それを見て公爵はほくそえんだ。所詮は小娘のたわごと。何を言おうが聞き流しておけばいい。石さえあれば用はないのだ。もっとも、その前にもうひと働きしてもらわねばならないが。
「これをわが妃の証としてさしあげましょう」
大人しくなった公女のベールをめくり、公爵はティアラをとりだす。ティアラの中央には青い宝石が――アクアクリスタルがはめ込まれいた。
ティアラを花嫁の頭の上にのせると周りから歓声がわきおこった。
宴が始まり、周囲はますますにぎやかになった。
「シェリア、私に勺(しゃく)をしてくれませんか」
公爵に声をかけられまりいは身震いした。
「どうした?　あなたは私の妃になったでしょう?」
それは暗に逆らえばどうなるかわからないと言うことを指していた。ここで下手に逆らうのは危険すぎる。それくらいの判断能力はまりいにも備わっていた。
「……はい」
まりいはしぶしぶ酒を公爵のグラスに注いだ。アルコールの濃度が高かったのか元々酔いやすい体質だったからなのか、口にしたとたん公爵の顔が赤く染まる。

もしかしたらこのまま酔いつぶらせることができるかもしれない。次の酒を注ぎながら、まりいは公爵に尋ねた。
「どうして式を早めたのですか？」
「前にも言ったでしょう。あなたを早く妃に迎え入れたかったのですよ。多少乱暴になってしまったことはいなめませんが」
本来なら本物の公女がきくはずの台詞にまりいは嫌悪感を覚えた。違う。本当にシェリアが大切ならこんなことはしない。アクアクリスタルのことがなかったとしても、シェリアがここに来て幸せになれるはずがない。
「アクアクリスタルをどうするつもりなんですか？」
なおも同じことを言い募る妃に公爵は赤い顔で言った。
「それはあなたが一番よく知ってるでしょう？」
まりいは顔をしかめた。一体何のことを言っているのだろう。本当にわからなかったのだ。この時までは。
だが、上機嫌の公爵の言葉にまりいの表情は固まる。
「フロンティアを知っていますか？」
知らないはずがない。元々それを求めて旅をしているのだから。
リネドラルドに着いた日、まりいはショウに旅の目的を尋ねていた。
一つは人捜し。もう一つはあるものを探してその人を捜し出す。一体どんな形をしているのかわからない。もしかしたらものですらないのかもしれない。確かなのは、どんな願いも叶えてくれるということだけ。
それは空都（クート）の住人なら誰もが知っているおとぎ話。だがそれを躍起（やっき）になって探す者達もいる。そのあるものの名前が――
「アクアクリスタルはそれを求める手がかり。それを扱えるのはあなただけ」
酒に酔ったのだろうか。公爵はさらに饒舌になる。
「あなたを欲しいと思ったのは本当ですよ。あと数年もすれば立派な女性になるでしょうから」

赤ら顔で近づき腕をつかまれる。何をするつもりかと問いただす暇もなく、口に液体を注がれる。
「祝杯です。これくらいいいでしょう？」
初めて飲んだ酒は、まりいにとって苦々しいものだった。その様子を見ても周りは何も言わない。全てが見て見ぬふりをしていた。それもそのはずだ。招かれた人々は皆、アクアクリスタルを、フロンティアを目的とした集団なのだから。
アクアクリスタルを使ってフロンティアを手中に収める。それが公爵の狙いだった。
フロンティア。それは今まで何度も人々の間に語り継がれては誰もが正体を見たことがない未知なるもの。願いをかけた者の望みをかなえるという不可知なるもの。この力が石にこめられているという情報を、公爵はある人物を通して知った。だがアクアクリスタルを扱えるのはミルドラッドの公女だけ。そこで領主に取り入りシェリアを妃にと申し出たのだった。
準備は整った。小娘を使うことはいつでもできるのだ。しばらくは勝利の余韻にひたろう。
この慢心がやがて自分の身を滅ぼすということも知らず、公爵は酒を飲み続ける。

数時間後。まりいは鈍い痛みに目を覚ました。
頭がガンガンする。この吐き気は何？
それは常に言う二日酔いなのだが、まりいが知る由もない。
隣を見ると公爵は眠っていた。あれだけの酒を飲んでいたのだ。当然だろう。
それは周りも同じだった。気持ちよさそうに寝息をたてる者や今もなお話を続けている者。
この中で一つだけ言えること。逃げ出すなら今。
ティアラから宝石を抜き取りまだ痛む頭をおさえながら、周りに

気づかれぬよう、まりいは礼拝堂を抜け出した。

Part，26

ドレスをひるがえし、まりいは走る。一刻も早くここから抜け出すために。
この石にそんな力があるなんて知らなかった。シェリアも教えてくれなかったし。実際それはシェリアもその事実について知らなかったのだが、まりいの知るところではない。
しばらくすると大広間に出た。婚儀が行われていたためかそこに人はいない。
『そこから左へ行けば外へ抜け出せます。ショウがそこで待ってるから頑張って抜け出して。目印に赤い花を置いてるんですって』
視界のスミに赤い花を見つける。あと少し。あと少しでここから抜け出せる――
「どこへ行くのです？」
背後からかけられた声に、まりいは動きを止めた。
「部屋へもどるにはまだ時間が早すぎるのではないですか？」
それはまぎれもなくラズィアの領主だった。
どうして？　さっきまで眠っていたはずなのに。
「侍女が教えてくれたんですよ。あなたが出て行ったと。戯れにしてはやりすぎですよ」　笑いながら、まりいに近づいていく公爵に比例して、まりいは一歩一歩足を後ろにやる。嫌だ。出口まであと少しなのに。もう少しでみんなの所に帰れるのに。
「さあ戻りましょう――」
「来ないで！」
公爵の目の前に、まりいは隠し持っていたナイフを突きつけた。
「それでどうすつもりです？　わたしを刺すつもりですか？」
笑みを浮かべながら近づいてくる公爵に、まりいは再び後ずさる。
「来ないでください！」

ナイフを握る両手に力をこめる。そうしないと簡単に手から外れてしまいそうだった。
だが声と反比例してまりいの体は震えている。その様子に余裕を見せたのか、公爵をはじめ兵士達が近づいてくる。
一体どうしたらいいの？　出口まであと少しなのに。一体どうしたら――
『アクアクリスタルはそれを求める手がかり。それを扱えるのはあなただけ』公爵の台詞を思い浮かべる。あれがもし本当だとしたら――
公女の周りが兵で囲まれる。だがあと一歩というところで彼らの動きが止まった。
体は震えているが、目は凛としている。公女のとろうとしている行動に一同が怪訝な顔をする。逃げ場もないのに一体この少女は何をしようというのか。
「……来ないでください」
堅い声で、まりいはもう一度言った。自分の首元にナイフを突きつけて。
「アクアクリスタルがないと、わたくしがいないとフロンティアのことがわからないんでしょ？　だったら近づかないで」
アクアクリスタルだけじゃきっとだめなんだ。公女が、シェリアがいてこの石は効果を発揮するんだ。だったら公女と思われている私に手出しはできないはず。それは、まりいなりに必死に考えてとった行動だった。
「道をあけてください」
公女に睨まれ兵士はすごすごと道をあけた。
少しずつ、少しずつまりいは出口に向かう。もう大丈夫。あとはこの道をまっすぐ行けば――
「……はははは」
公爵のあげた笑い声に、まりいは足を止めた。
「確かに二つが、公女とアクアクリスタルがなければ意味はありま

せん。ですが片方が偽物だったらどうするんです？」
「何を言っているんですか？」
公女は毅然として言った――つもりだったが、はたから見ればそれは茶番にしか見えなかった。
どうしよう。私がシェリアじゃないことがばれてしまったの？
その短時間のとまどいが間違いだった。次の瞬間あっという間に手首をひねられ、まりいは動けなくなってしまった。
「その石は偽物ですよ。本物はここに」
公爵の手の中には青の球体に女神像が彫られた石――アクアクリスタルがあった。
「おいたがすぎたな。まあさっそくだからここでミルドラッドの血筋を証明してもらおうか」
笑みを浮かべながら、公爵は本物の石を公女の前にかざした。
石が淡い光を放つ。
「さあ、フロンティアの栄光をわたしに指し示せ――」
公爵だけでなく、誰もが固唾を呑んでその光景を見守った。
おとぎ話だと言われていたものが今よみがえろうとしている。果たして『未知なるもの』と呼ばれるものの正体とは一体何なのか。
だが、ことはそう簡単には運ばなかった。　石が光を放ったのは数秒のこと。光を失ったそれは、何事もなかったかのように床に落ちる。
「話が違う！」
公爵は人目もはばからずに叫んだ。
「何故だ。なぜ光を失う」
石は本物だ。公女だってわざわざ人を雇って連れてきたというのに。
「……！」
ある考えが浮かび、公爵は再び逃げ出そうとする少女の腕をつかんだ。
「痛っ……！」

少女が苦痛の悲鳴をあげるのを無視し、強引に髪の毛をひっぱる。床に落ちたのは金色の髪。石が光らなくて当然だ。アクアクリスタルは本物でも、目の前の少女の髪は焦げ茶――公女は偽者なのだから。

「よくもわたしをたばかってくれたな！」

公爵の視線にまりいは足がすくんだ。

敵意をむき出しにした顔。これが本来の彼の表情なのだろう。元々、公女自体を必要としていたわけじゃないのだ。

自分達の行動が正しかったと認識する一方、まりいは別の恐怖を際自覚する。

「言え！　本物はどこだ！」

強引に腕をつかまれ、まりいは苦痛の表情を浮かべた。

「シェリアはここにいません。ミルドラッドに、お父さんとお母さんのところにいます」

泣き出したいのを、逃げ出したいのを必死にこらえながら、まりいは公爵をにらみつけた。

「シェリアはあなたと結婚なんかしません。あなたと結ばれて幸せになれるはずがない！」

偽物の公女ににらみつけられて公爵の顔は赤くなった。小娘だと思って油断していた。まさかこんなことになろうとは。

「賊を捕らえよ！」

公爵の声に我に返った兵士達が近づいてくる。　再び逃げ出そうとするもこの状況じゃどうにもならない。

……嫌。まだ私は――

まさに絶体絶命。その時だ。

「シーナ！」

少年の声に、まりいははっとした。

「こっちだ。早く！」

間違いない。この声は――

その後の行動は早かった。

「痛っ！！」
腕にかじりつき公爵が手を離した隙に、まりいは声の主の下へ走る。兵士達が慌てて止めようとするももう遅い。　必死の思いで、まりいは声の主――ショウの元へ駆け寄り、しがみついた。
「ショウ……っ！」
自分にしがみつく少女の姿を見て、ショウは戸惑いをおぼえた。
汚れてしまった花嫁衣裳。その瞳は涙でぬれている。
小さな肩が小刻みに震えている。無理もない。たった一人でこの状況をのりこえてきたのだから。
安心させるようにショウはまりいの背中を軽く叩く。
「よく頑張ったな」
本当によくやったんだろう。何の訓練も受けていない少女が城をおびやかす一大事に貢献したのだから。
「シェリアはミルドラッドにいる。本当はここに来たいって言ってたけどさすがにな。
大丈夫。後はあの人達に任せておけばいい。もう終わったんだ」
もう終わった。その言葉にまりいは安心して身をゆだねる。少年が慌てて抱きとめた時には、少女は深い眠りの中にいた。
満ち足りたような穏やかな寝顔。苦笑すると、ショウはまりいを抱えなおす。
「……お疲れ様」
一方、二人の少し離れた場所では一つの話が幕を閉じようとしていた。
「ラズィア公主、イプロ・ラズィア様ですね。我々はリネドラルドの使いで来ました。これから身柄を拘束させていただく」
鎧に身を固めた中年の赤毛の騎士が、一枚の書状を公爵に突きつける。口調とは裏腹にその表情は堅い。
「何を証拠に――」
「アクアクリスタルを持ち出したのが何よりの証拠。そちらの御仁はリネドラルドの正式な使者だ」

「それは――」
「他にも不正を働いたとの通告がきている。言い分は後ほどきかせてもらおう」
そう言うと、公爵はがっくりと肩を落とした。
こうしてラズィアの一件は幕をおろすこととなる。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あの男って馬鹿だよね。情報を流しただけであっさりのってくれるし」
「この国は簡単に落としやすいことがわかっただけでも上出来だ。話す暇があったら歩け」
「ねぇ。あの話って本当なの？」
「石があれの力を込めているのは事実だ。だが、それを導くには相当の時間がかかるだろうがな」
「勝手に勘違いして勝手に自滅しちゃったのか。無能な奴を牢獄送りにしたんだ。むしろ、ぼく達ってこの国に貢献したんじゃない？」

「もらえるものはもらったんだ。それだけで充分だろ。今回は元々本業じゃなかったからな」
「ねぇねぇ。その公女様って人可愛かった？　せっかくここまで来たんだから、見せてくれたっていいのに」
「……」
「あっ、待ってよ！」

一部の声を残して。

Part，27

鳥のさえずりに、まりいは重いまぶたを開けた。
視界に映ったものは見知らぬ部屋に見知らぬ天井。
「……？」
ここは一体どこなんだろう。
そうだ、シェリアを助けにラズィアにむかってシェリアと服を交換して、それで――
「起きた？」
元気な声とともに扉が元気よく開けられる。そこには数日振りに顔を合わせる公女の姿があった。
「もう大丈夫なの？　アクアクリスタルは？」
体を起こし、まりいはシェリアに尋ねる。
そうだ。偽物だとばれて捕らえられそうになった。そこにショウが駆けつけてくれて……。まりいはそこからの記憶がなかった。
「ちゃんとここにあるわ。ほら」
シェリアの首元は金色の鎖で輝いていた。その先にあるのは青い宝石。
「あなたが取り返してくれたのよ。ショウと一緒にね。
ここに来るまで苦労したんだから。石とショウをつかんだままなかなか離さなかったもの。よっぽど必死だったのね」
シェリアの言葉にまりいは瞬時にして顔を赤らめる。本当に記憶になかったのだ。アクアクリスタルを取り戻すことに必死で、ショウが来て『もう終わったんだ』って言ってくれたから安心して――
一人うろたえているまりいをよそに、シェリアは窓を開けた。そこから入ってきたのは涼しい風と日の光。
「着替えたらちょっと外に出てみない？　ずっと寝てるのも退屈でしょ？
まずはリューザのところに行って、それから街ね。一日中かかる

から覚悟しときなさいよ」
「え？」
「シーナが言ったんでしょ？　『街を案内して』って」
いたずらっぽく笑うシェリアを見て、まりいも自然と笑みがこぼれた。もう大丈夫。ご両親ともちゃんと仲直りできたんだ。よかった。本当によかった。
「アタシちょっと外に出てるわ。早く準備してよね」
本当に終わったんだ。騎士団が来て公爵も捕まって、アクアクリスタルもちゃんと取りもどすことができて。
遠ざかる後姿を、まりいは嬉しそうに見送った。

その頃、ショウは一人の騎士と話をしていた。
「無理を言ってすみませんでした」
「元々あの公爵もいい話は聞いてなかったからな。陛下の勅命だったんだ。そんなに気に病むことはないさ」
赤毛の大柄な男――リネドラルドの騎士団長は、そう言ってショウに視線をおくる。
「ちょっと見ない間に大きくなったな。背も伸びたんじゃないのか？」
「……そんなに伸びてない。同年代に比べたらまだ小さい方」
「なんだ。背気にしてたんだな」
「ギルドおじさんっ！」
顔を赤くして怒鳴る少年を見て、団長は――ギルドは笑みをもらした。
「そうそう。子供はそれくらい可愛げがないとな」
「俺はそんなんじゃ――」
「子供だよ。お前は」
再び視線を向けられて、ショウは言葉を失う。それは先ほどとは違う鋭いものだった。

「確かにお前は強いし賢い。だがな、それは同年代の連中から見ての話だ。
所詮お前はまだ子供なんだよ。知らないことのほうが多すぎる。無理に強がろうとするな。父親の姿を追い続けるのもどうかと思うぞ？」
少年の返事は返ってこない。それは事実を肯定しているからか他のものからなのか。苦笑すると、ギルドはショウの頭上に手を置いた。
「俺も陛下――レインもお前のことを心配してるんだよ。もちろんアスラザも……トキサもな」
ギルドの大きな手の下で、ショウは一度だけ体を強張らせる。それは親しい者の名を聞いたからか、それとも他のものからなのか。
「無理に今の仕事を続ける必要はないんだ。なんなら前みたいに俺が口を利いてやってもいい。そうすりゃゆくゆくは騎士になれる。お前には素質もあるし世が世ならいっぱしの貴族なんだからな」
「……ごめん。できないよ」
ギルドの手の下で、ショウは小さくつぶやいた。
「 今度で最後なんだ。王からの命もうけているし。
私情は関係なく、この依頼は最後までやりとげたい。……たとえどんな結果になったとしても」
「そうか」
ここまで言われれば引き下がるをえない。全く誰に似たんだか。ギルドは苦笑すると手を離した。
「ショウーー？」
自分を呼ぶ声に、少年は顔をあげた。そこには先ほどまでのあどけない表情はない。
「行くのか？」
「ああ」
「たまには顔を見せろよ。俺達はお前の『おじさん』なんだからな」
「ありがとう……おじさん」

それだけ言うと、少年は姿を消した。少年の後姿を見送りながら、ギルドは笑みを深いものに変える。
「俺はずっと独身だし、レインも子がいなかったからなぁ。だから余計あいつが息子のように思えてしょうがないんだろうな」
やがて、自分を呼ぶ部下の声に彼自身も場を後にする。
「アスラザ、息子は大きくなってるぞ。だから、お前も早く顔を見せてやれ」
ここにはいない友人につぶやいた言葉は、誰に聞かれることもなく空にとけた。

「ショウどこにいたの？」
少年の姿を見つけシェリアは声をかけた。
「騎士団の団長と話してた。もう少ししたら持ち場に帰るってさ」
「そう……」
ショウの横顔を、まりいはまじまじと見つめる。やっぱりショウはすごい。あんなすごい大人の人達と会話ができるなんて。
もっとも、少し前まで彼自身が子供だと諭されたばかりだったのだが、まりいの知るところではない。
「それで？　用があって呼んだんだろ？」
「そうそう。リューザが呼んでるの。二人に来てほしいって」
「神官長が？」
「ほら早く早く！　きっと待ちくたびれてるわよ！」
シェリアに腕をつかまれ、二人はずるずると神殿にむかった。

「お二人とも、どうもありがとうございました」
まりいとショウの姿を認めると神官長は深々と頭をたれた。
「頭を上げてください。私そんな立派なことしてないです」
うろたえながら答えるまりいをショウは苦笑しながら見ていた。立派かどうかは別として、とんでもないことやらかしてくれたくせ

に。
「いいえ、育ての親として礼を言わせてもらいます。わたしにはこれくらいのことしかできませんから」
再び頭を下げられて今度こそ二人は恐縮してしまう。
「リューザ、他にも用があったんじゃないの？」
シェリアのわざとらしい咳払いに神官長は笑みをもらした。
「そうですね。では役者もそろったようですし本題にうつらせていただきましょう」
リューザの含みのある言葉に、まりいとショウは顔を見合わせた。
「ミルドラッドにあるアクアクリスタルは二つ。フロンティアを求めるための手がかりなの。それはもう知ってるわよね？」
シェリアの言葉に二人はうなずいた。うなずきながら、二人別々のようで同じことを考えていた。

確かにアクアクリスタルは成人していない皇族の女子しか扱えないみたいなこと言ってたからな。
そういえば神官長に聞かれて変なこと言ったな。『相棒』って、今考えるとすごいことじゃないのか？　……まあ、深い意味はなかったけど。

確かにラズィアで公爵がそんなことを言っていた。でも石は少し光っただけで何も起こらなかったし。その後ショウが助けにきてくれて。そのまま抱きついて倒れた――ってシェリア言ってた。それって……
「二人ともどーしたの？」
シェリアの言葉に二人は慌てて我にかえる。
「なんでもない。話を続けて」
ショウの言葉にまりいはこくこくとうなずいた。首をかしげた後、公女は話を進めた。

「アクアクリスタルは二つではじめて道を示す。『大切な想いはここにある』『離れていても願いは叶う』……」
言葉とともに、シェリアは二つの石を重ね合わせる。
「アムトリーテよ、汝の娘、シェリアの名において道を示したまえ」
途端にあたりがまばゆい光に包まれ視界がさえぎられる。
視界が元にもどったのはそれから数分後。四人の目の前に現れたのは全てが青い色の女性――水の精霊、アムトリーテだった。
「水の主よ。勇敢な子供達に道を示してあげてくだされ」
年老いた神官にアムトリーテは微笑むと、一条の光となって消える。光が指し示す方向は、東。
《ありがとう。姫を守ってくれて》
去り際に、まりいは精霊の声を聞いたような気がした。
「これでアタシと石の役割は終わりね」
そう言うとシェリアはペンダントをはずし、まりいの首にかける。
「これはあなたが持ってて」
「でもこれって大切なものなんじゃ――」
「アタシがいいって言ったからいいの。大丈夫。アタシはこっちを持ってるから」
そう言って金色の鎖を自分にかける。
「お父様達だっていいって言ってくれたもの。それにリューザのお願いでもあるんだから」
神官長の方を見ると、始終変わらぬ笑みで三人を見つめていた。
「石は役目を終えました。今回の功労者であるあなたが持っていてください。護符としての役目は充分にありますよ」
ここまで言われると断ることができない。まりいは素直に受け取ることにした。
「この一件はもしかするとみなさま方にとっては吉兆だったのかもしれませんね」
『え？』という視線を向けた三人には目をくれず、神官は笑みを浮かべながら淡々と話す。

「この石は確かにフロンティアとかかわりがあります。ですがあくまで道を示すだけ。しかもミルドラッドの血筋をひく女性――シェリア様だけしか扱えないんです。
そこから先は、当人の努力次第。どこで情報を手に入れられたかは存じませんが、公爵も愚かなことをなさいましたね。野心など持たなければ安定した暮らしができたものを。まあこの国のためにとってはよかったのかもしれませんが。
……みなさまどうされました？」
神官の問いかけに三人は慌てて首をふった。
もしかしたらこの街で一番すごいのは公主ではなくこの人なのかもしれない。三人の思考がみごとに一致した瞬間だった。
「さ、話はここまで。これから街に行くわよ？」
軽い咳払いをしてシェリアが二人に言う。
「悪いけど俺はパス。仕度がまだできてない」
「そんなの後からすればいーじゃない」
「そういうわけにもいかないだろ。明日出発するんだから」
明日。その言葉に二人は口をつぐむ。
そうか。もう明日になったらミルドラッドから離れるんだ。シェリアともお別れなんだ。
でも、これは悲しい別れじゃない。だったら今を楽しむしかない。
「仕度がすんだら後から行く。だから二人で行ってこいよ。約束してたんだろ？」
「わかった。じゃあ先に行ってる」
少女二人は約束を果たすため街へくりだした。

Part，28

まりいとシェリアは約束を果たすべくミルドラッドの城下町にいた。

「リネドラルドもいいけどやっぱり自分の故郷が一番ね！」

今までのことなど嘘のようにシェリアが大きくのびをする。

「誰だって自分の生まれ育った場所が一番いいんだよ」

「そうね」

二人は笑みをもらした。

初めてここに来た時はみんな表情が暗かった。でも今は違う。シェリアは親子三人で生活するという願いが叶った。それは彼女がずっと前から望んでいたこと。離れてしまうのは寂しいけれどこれは悲しい別れじゃない。まりいはそれが嬉しかった。

「まずはお礼を言わなきゃね。ちょっと待ってて。みんなに挨拶してくる！」

「あいさつ？」

まりいが首をかしげる暇もなく、シェリアは一つの店に入っていった。菓子店だろうか。中から甘い香りがする。

「おじさーん、それ一つください」

「はいただいま……シェリア様？」

少女の姿に主人は目を丸くした。それはそうだろう。街中を、ひいては国を騒がせていた張本人が目の前にいるのだから。

「ひさしぶり。元気してた？」

まるで親戚のおじさんにでも声をかけるようなシェリアの行動ににまりいは唖然とするも、首を横にふる。ラズィアの一件でなりを潜めていたが、そもそも彼女はこういう女の子なのだ。

「シェリア様、よくご無事で！」

「やだ。泣かないでよ」

目の前で大の大人に泣かれてしまいシェリアは戸惑ってしまった。

その隣にいたまりいはもっと戸惑っていたが。
「リューザ様のおっしゃるようにしたかいがありました。よかった。本当に良かった」
「リューザさんの？」
涙をぬぐう店の主人にまりいは思わず問いかけてしまった。
「簡単ですよ。遊び場を悟られないようにするんです。シェリア様はよく城を抜け出してここに来ていましたから。兵士に悟られないようにするのは大変でしたが、『いざとなったら皆で殴って気絶させればいい。通路さえ確保しておけばあとは自分が責任を持つ』とリューザ様もおっしゃってましたから」
それが神官長がシェリアとショウに語った『手配』だったのだが、まりいは知る由もない。『それですんなり通れたのね』とつぶやくシェリアを横目で見ながら、まりいは背筋に冷たいものを感じてしまった。
「なに、シェリア様だと！？」
「あたしにも会わせておくれ！」
どこで話を聞きつけたのか、いつの間にかシェリアの周りは人であふれる。
「シェリアって有名なんだ……」
たくさんの人だかりに、まりいは呆然とつぶやいた。
「小さい頃はよく神殿を抜け出してここに来てたの。教えてもらったのはリューザの息子だけど」
「……」
一度その人に会ってみたい。なぜかいつかのショウと同じことを考えるまりいだった。
この場合、嬉しい悲鳴と言うべきなのだろうか。きさくに声をかける人や泣き出す人。旅の話を聞きたがる子供。先を進みたくても進めない状況になっていた。
「シーナ……」
シェリアは苦笑いでまりいの方を見た。

「シェリアはここでゆっくりしてきていいよ。私は少しお店見てくる」
「ごめんね。もう少ししたら追いつくから」

まりいは一人街を歩いていた。
結局、街を案内するという約束は中途半端に終わってしまった。それでも彼女は満足だった。シェリアの笑顔をみることができたのだから。
お金はシェリアからもらってはいるものの、これといって買わなければいけないものもない。時間もあるのだ。色々見てまわってみよう――
「お嬢さん」
声をかけられたのはそんな時だった。
辺りを見回すも声の主らしき人影はない。聞き間違いだろうか。
「こちらですよ。お嬢さん」
再び声をかけられ、まりいはもう一度辺りを見回した。
そこにいたのはフードを目深にかぶった男。男性だとわかったのは女性にしては声が低すぎたからだ――がまりいの方を見ている。
「すみませんが道を教えてもらえませんか？」
中肉中背。年の頃なら二十歳前後だろうか。真っ赤な服に緑のフードつきマント。体には不釣合いなほどに大きな水色の袋を背負っている。普通なら目立ちそうな容貌だが不思議なことに誰もそれをとがめようとしない。
「ごめんなさい。私もよくわからないんです」
「そうですか……。ああ、申し遅れました。わたしはこういう者です」
藍色の髪と紫の目。白い肌と相まって、本来ならば病的に見えそうなものだが全くそう見えないのはなぜだろう。そんなことを考えながら、まりいは差し出した名刺に目を通した。

「『魔法よろづ屋商会』？」
見たことも聞いたこともない名だ。なんと言えばいいのかわからず、まりいは名刺と男の青い瞳を交互に見比べる。そのうち、男が自分を見つめていることに気がつく。どうしたのだろう。普通の視線とは違う。まるで自分のことを見定めているような――
「あの、なにか……」
「失礼。つい見とれてしまいました。綺麗な顔をしていますね」
「はぁ……」
言葉とは裏腹に表情からは全く別のものが感じられる。よくわからないが、ここは逃げた方がいいのだろうか――
「あなた、逃げようとしていますね」
「え！？」
図星をつかれ、まりいは目を白黒させた。その様子を満足そうに見ると男は語る。
「これでも商人ですからね。それくらいはわかります。お客さんに逃げられてしまっては大変ですから」
「そうなんですか」
まりいは安堵の息をもらした。なんてことはない、品物を買ってくれるかどうかの値踏みの視線だったのだ。だからといって逃げた方がいいことに変わりはないのだが。
「ほら、今日はあなたのために取っておきの商品を用意しました。お一ついかがです？」
「え、でも――」
元々物を買う気はない。そもそも道を聞きたいのではなかったのか。
「見るだけでかまいませんから。ね？」
『見るだけ』でいいのなら何故こんなにも必死なのだろう。そう思ったときにはもう遅く、腕をがっしりとつかまれてしまった。
「お願いします。路銀がないんです。このままじゃのたれ死んでしまいます。話を聞くだけでもけっこうですから」

先ほどとは対称的な、すぐにでも泣き出しそうな、まるで欲しいものをねだる時の子供のような瞳。本来まりいは押しに強いほうではない。ましてやのたれ死ぬとまで言われた人を見逃せるほど悪い人間にもなれなかった。

こうしてまりいは『魔法よろづ屋商会』と名乗る不審な男と一時間も行動を共にすることとなる。

「――ですからこれは、旅をするのにもってこいの品なんですよ」

「はぁ」

「こちらの袋はどうです？　どんなものでも入りますよ」

「荷物の管理はショウがしてくれてるから……」

「お連れの方がいるんですか？　でしたらお連れ様にこれなんかどうです？」

「私だけじゃなんとも……」

まりいは完全に男のペースにはまっていた。

どうしよう。断りたいけど断れない。あやまって立ち去ればいいんだろうか。でもそれじゃあこの人が気の毒だし。

ショウかシェリアがいればこのような状態にはならないのだろうが、不運にもこの場にはまりい一人。話は一向に終わる気配を見せなかった。

「ではこれなどいかがでしょう？」

そう言って男が袋から取り出したのは、やはり袋。口を開けると中から本や布、ナイフが顔をのぞかせる。

「生活必需品がつまった一品。まさにお買い得ですよ」

そんなことを言われたところで、どれが生活に欠かせないものなのか、まりいにわかるはずもない。

「ごめんなさい。私お金あまり持ってないんです」

気の毒だがここは事情を言って立ち去るしかない。

「そちらのいい値段にしますよ？」

「でもこれだけしかないんです。ごめんなさい」

自分の財布を男に見せた後、まりいは素直に頭を下げた。

「ごめんなさい。だから――」
頭を下げたまま、まりいが再びあやまろうとした時だ。
「扉は開かれた」
それまでとは違う厳かな声に、まりいははっと顔をあげた。
「君が変わりたいと願ったから。だからあいつは扉を開いた。ここから先は自分次第」
自分を見つめる青い瞳。それはこれまで見てきた中で一番大人びた眼差しだった。
「オレ達はこうして見守ることしかできない。だから頑張って。全ては君次第なんだ」
それまでとは違う口調。だが内容はいつか聞いた『あの声』そのものだった。何故この人は知っているのだろう。見守るとは一体何なのか。
「あなたは一体――」
「シーナ！」
自分を呼ぶ声に視線を移す。そこにはシェリアの姿があった。
「ごめんなさい遅くなって。一人で何やってたの？」
「一人じゃないよ。『魔法よろづ屋商会』の人と話してた」
「『魔法よろづ屋商会』？」
「うん、この人が――」
シェリアに商人を紹介しようと振り返り、まりいは唖然とする。
そこにはもう男の姿はなかった。

Part，29

「絶対騙されたのよ！」
ベッドの上で、シェリアはまりいに指を突きつけた。
「そうなのかな……」
「絶対そーよ！」
ミルドラッドでの最後の夜。まりいはシェリアたっての願いで同じ部屋に泊まることとなった。公女を救った恩人として盛大なパーティーをという意見もあったのだが、まりいとショウは丁重に断った。元々二人ともそのようなことを好む質ではなかったし何より騒ぎにされたくはなかったのだ。
「アタシがもっと早く駆けつければよかったのよね。ショウだって結局来れなかったし」
「それはしょうがないよ。二人とも忙しかったんだし」
「でも余計なもの押し付けられたじゃない。しかも相場の二倍よ？」
まるで自分のことのように怒るシェリアにまりいは苦笑した。
『魔法よろづ屋商会』という名刺を見せた男。気づいた時にはその姿はなく、財布もなくなっていた。代わりにあったのは、がらくたと呼ぶにふさわしいものばかり。念のためにショウに聞いてもみたが、まりいの所持金の半分以下ですむとのことだった。
大きなスカーフに石鹸、ロープ。本のようなものにタオルとナイフ。確かに旅をする者にとっては生活必需品であるのかもしれないが、まりいには何が何だかわからない。
「これは何？」
薄い本、これも男からもらったがらくたの一つだ――を開いてまりいは聞いた。
「術書ね。ほらアタシが前に使ってたでしょ？」
「前ってリネドラルドの時の？」
「そう。でもあなたに使えるのかしら……」

リネドラルドで弓の稽古をつけてもらった時、シェリアはまりいの隣で術の特訓をしていた。手をつけたことはないが果たして自分に扱うことができるのか。
「時間は長いから、ゆっくりじっくりやっていけばいーわよ。それよりも！」
ぱたんと本を閉じ、シェリアはまりいの手をぎゅっと握る。
「……シェリア？」
「ありがとう。助けてくれて。本当に感謝してるの」
親に結婚の話を持ち出された時は、自分がまるで道具かも、人形かもしれないと言われたようで怖かった。悲しかった。『もう一度やりなおしてみようよ』あの言葉にどんなに救われたことか。
助けたつもりが、いつの間にか助けられていた。リネドラルドに、シーナに会うことができて本当によかった。
「『大切な想いはここにある』」
今は、まりいのものとなったペンダントをなぞりシェリアは言った。
「……『離れていても願いは叶う』」
それにならい、まりいも公女の首にかけられているアクアクリスタルを見て言う。
「それ、どうしたの？」
「リューザにもらったの。やっぱりあった方が落ち着くもの」
シェリアの首で輝く青い石。それを縁どるのは金色の鎖。
「アタシの願いは叶ったわ。次はあなたの番。今度はアタシが聞くわ。あなたの願いは何？」
「私の願いは――」
シェリアに聞かれ、まりいは言葉に詰まった。
まりいの願い。それはきっと他の人間から見れば他愛もないこと。でも彼女にとっては大切なこと。それは言葉にしたくてもできなくて。口にすることが怖くて。
「ごめんなさい。困らせるつもりはなかったの。ただあなたの願い

が叶うよう祈ってるって言いたかったの。その石みたいにね」
シェリアの心遣いが嬉しくて、まりいは銀色の鎖をぎゅっと握った。
「不思議よね。どうしてアタシ達ってあんなに似ていたのかしら」
「うん……」
ラズィアでの二人の入れ替わりは苦肉の策のはずだった。にもかかわらず、あれだけ容姿が酷似していたのは偶然と言っていいものなのだろうか。
「もしかしたら双子だったのかも。なーんてね。
もう寝ましょ。明日早いんでしょ？」
そう言って毛布の中にもぐりこんだシェリアをまりいは複雑な気持ちで見ていた。
朝が来ればシェリアと本当のお別れだ。でもそれは悲しい別れじゃない。だけど、寂しいことに変わりはない。
「そうそう。アタシあなたに渡したいものがあったの」
「え？」

翌日。
「そなた達には世話になった」
旅支度を終えたショウと騎士団の面々に領主は頭を下げた。
「当然のことをしたまでです。礼を言うならこの少年達に言うべきでしょう？」
「そうですわね。ありがとうございます」
領主に続いて頭を下げる妃に軽く頭を下げる自分を、ショウはどこか客観的な思いで見ていた。
ただ公女を故郷まで送り届けるはずだったのに。それがちょっとしたお家騒動まで発展してしまった。今回の任は予想外のことばかり起こる。
一人ではこんなこと、まずなかったのに。それもこれも――

「ショウ様どうかなさいましたかな？」
「……公女様の姿が見えないようですが」
神官長の視線に気づき、ショウは軽い咳払いをして聞いた。付け加えるならもう一人の連れの姿もない。
本来ならここにいるはずの二人の少女がいない。別れを惜しんでいるのだろうか。それとも――
「ああ、それならご安心ください。腕によりをかけて磨かれているようですから」
「腕によりを？」
料理でもするつもりなのか。もう一度問いただそうとしたその時だった。
「こっちよこっち！」
少女の声に一同は視線を向けた。やってきたのはドレス姿の公女様、そしてもう一人は。
「ジャーン。シーナ嬢の御召変え」
一つの三編みにまとめた髪に青のミニスカート。下に黒のズボンをはいているものの、今のまりいは少女と呼ぶにふさわしい格好だった。
「いつまでもショウの服を借りてるわけにはいかないでしょ。女の子なんだもの。これくらいしなきゃ」
公女様の発言にショウとまりいはもちろん、騎士団までもがぎょっとした。実際服を買うだけの持ち合わせがなかったので彼やシェリアの服を借りていたのは事実だったのだが。
「可愛いでしょ。とてもお父様をぶった人とは思えない！」
今度は居合わせた全員が顔を青ざめさせた。もっとも兵士の間ではすでに暗黙の了解となっていたのだが。
「あのっ、あの時はすみませんでした」
真っ赤な顔でまりいは領主に深々と頭を下げた。いくら感情に任せたとはいえ自分がとんでもないことをしてしまったという自覚はあったのだ。それを見ると領主は苦笑しながら言った。

「もうあのようなことは御免こうむりたいからな。そなたの言うように娘と妃とよく話しあうことにしたよ」
「二人とも本当にありがとう。公女として、シェリアとしてお礼を言います」
恭しく頭を下げた領主と公女に、まりいとショウは顔を見せあい笑った。この親子はもう大丈夫だ。この先何かあったとしてもきっと乗り越えていける。
「これからどうされるのですか？」
「東に、アクアクリスタルの指した道を進もうと思っています」
リューザの問いかけにショウが答える。
アクアクリスタルの光は東の方角をさしていた。そこにフロンティアがあるのなら黙って進むしかない。
「じゃあ私達はこれで失礼します」
「シェリア……元気で」
自分と同じ明るい茶色の瞳を見つめ、まりいは言った。別れは辛い。それがどんなものであったとしても。
この世界で初めて会った女の子は彼女だった。彼女と、ショウと出会って旅をして。自分のことを話して、受け入れてくれて。本当に嬉しかった。それはシェリアも同じだったのだろう。シェリアはまりいに覆いかぶさるように抱きついた。
「彼の者に幸福を。彼の者に祝福を。彼の者に――願いを」
まりいを抱きしめシェリアは耳元でささやく。
「ショウ、シーナをよろしくね」
友人を離し、公女はもう一人の友人に言った。
「シェリアも元気で」
こうして二人は本来の目的を果たすためミルドラッドを後にする。
去り行く友の姿をシェリアはずっと見つめていた。

Part，30

「――そもそも魔法とは古代より神から与えられた偉大なる力である。その偉大なる力を言葉にして引き出したもの、それが術だ。術とは――」
「……おい」
「ここでは初歩的なものをいくつか紹介していこう。まず代表的なものが『月光』だ。これは旅をする者なら誰しもが身につけているもので――」
「シーナ！」
「わっ！！」
近づけられた少年の顔の近さに、まりいは思わず声をあげた。その反動か、足元に手にしていた本がぱさりと落ちる。
「ごめん。急に声かけられたから」
とりつくろうとするまりいに、少年は呆れ顔を向ける。
「さっきから何度も呼んでたけど？」
「え……」
全く気づかなかった。それだけ本に夢中になっていたのだろうか。
「ずっと読んでるな。これってシェリアが言ってた詐欺師からもらったやつだろ？」
苦笑するとショウは落ちていた本を拾い、まりいに手渡した。

ミルドラッドをたって数日が過ぎた。シェリアを送り届けるという任を無事に終えた二人は、本来の任であるフロンティアを探すため東の方角を目指していた。
「シェリア、元気かな」
数日前に別れた友人のことを思い、まりいはぽつりとつぶやく。
「元気じゃなかったらお前がやったことが無駄になるだろ」
そう言ってショウはまりいの首にかけられたものを見る。銀色の

鎖の先につけられたのは女神像の彫られた青の球体。本来は二つで意味を成すものであり、先日もフロンティアのありかを指し示してくれた。それまでの持ち主は役目を終えたこの石を――アクアクリスタルをまりいに託したのだ。

「居場所はしっかりしてる。任を終えたらそのうちまた会いにいけばいい」

だが現在の持ち主は返事を返そうとはしなかった。どうやら完全に本に夢中になっているらしく少年の方は見向きもしない。再び苦笑するとショウは馬を走らせることに専念した。

まりいが読んでいるのは他でもない。先日『魔法よろづ屋商会』と名乗る男からもらったものだった。相場の倍以上の金と引き換えに手に入れたのはガラクタと呼ぶに相応しいものばかり。その中で唯一まともだったのが術書と呼ばれる本だった。

本は二冊。移動中の馬車の中は特にすることもなく、まりいが暇つぶしにと読んでいたのだが、いつの間にか夢中になってしまったというわけだ。

「――最後に。全ての術に言えることですが、術を扱うためには『精霊との契約』が必要です。また属性の違いから向き不向きも考えられます。色々試し自分なりの方法を探しましょう」

属性って何？　精霊の契約って何のことだろう。ショウに聞いたらわかるだろうか。

本を閉じようとして、まりいは裏表紙に気になる一節を見つける。

『これはサービスです。お代を払う必要はありません。あなたの旅が少しでも有意義なものになりますように。リザ・ルシオーラ』

「……あの人、ルシオーラさんって名前だったんだ」

今さらながらに相手の名前すら聞いていないことにまりいは気づく。

「ショウ……」

まりいが声をかけようとしたのと馬車がとまったのはほぼ同時だ

った。
「どうしたの？」
「霧が出てきた。今日はもう動けない」
荷台から出てきて外を見ると、確かに外の景色は白以外何も見えない。これでは進むこともままならないだろう。
「仕方ない。今日は野宿だな」
ため息をつくとショウは荷台からテントを取り出す。
「何か手伝うことある？」
「特にない」
「そう……」
手際よくテントを組み立てていく後姿を見て、まりいは手持ちぶさたにつぶやいた。まだまだ足手まといなのかな。これでも少しはよくなったと思ったのに。
実際はテントを組み立てるのは一人で充分だったからなのだが――まりいの様子を見てなのか、今度はショウが声をかける。
「せっかく時間ができたんだ。術の勉強でもすれば？」
「術？」
「あれ術書だろ。見た目は変わってたけど。行動手段が増えるのにこしたことはないしな」
本当は時間つぶしに読んでいただけなのだが、ショウの言うことにも一理ある。まりいは先ほどの質問を少年にすることにした。
「『精霊の契約』って何？」
「早い話が力を発揮するためのセリフ。言っている間にイメージがわくことってあるだろ」
「属性って？」
「人それぞれにあった術の性質のこと」
テントを組み終え夜のために薪（まき）になりそうな枝を拾う。ショウにならい薪を拾いながら、まりいは続けて聞いた。
「ショウの属性は何なの？」
「知り合いには火だって言われた」

「火ってこの前シェリアが使ってた？」
『この前』とは、まりいが空都（クート）に来て初めて獣と遭遇した時のことだ。シェリアが術を使い獣を撃退していたのだ。
「少し違うけど似たようなものなのかもな。たとえばお前が覚えようとしているこの術――」
まりいの手にしていた本、『月光』と書かれてあるものを手にし、ショウは言う。
「『月光』は属性は『月』だけど初歩的なものだからあまり関係ない。強力な術ほど属性が必要になる。反対に弱い術はそれほど属性を気にする必要はない。だからはじめは簡単なものを覚えていってその後少しずつ自分にあったものを探していけばいいんだ」
「この本は？」
まりいはガラクタの中にあったもう一冊の本を差し出した。
「『招雷』か。こっちは上級の術だな。俺には使えない。シェリアなら使えたかもしれないけど」
「難しいの？」
「イメージするのが難しいんだ。そもそも属性自体難しいからな」
「この術は何属性になるの？」
「雷だから風、ととれないこともないし空かもしれない。空を扱える人間は少ないけどな」
「空って？」
一つ一つたて続けざまに質問をしてくるまりいにショウは本を返しながら言う。
「全部聞いても頭が混乱するだけだろ。だったら一つ一つ丁寧に覚えろ」
「……そうする」
素直に返事をしてまりいは本を受け取った。
こいつといると自分が学校の先生をしているような気がしてならない。いくら場慣れしてるとはいえそんな歳でもないのに。再び本に集中するまりいの様子を見てショウは苦笑した。

こいつと出会って一月近くたった。ラズィアの一件もすんだしそろそろ考えなければならない。元々、彼がまりいを旅に誘ったのはその方が記憶をとりもどすきっかけになるかもしれいから――まりいが記憶喪失だと思っていたからだった。だが実際は記憶喪失ではなく異世界から来たと言う。それはそれですごい事実なのだがそうなると事情は変わってくる。

（まずは村についてからだな）

真剣に本とにらめっこをしているまりいを見た後、出来上がった薪の山に火をつけた。

「この霧、晴れるかな」

早めの食事をとりながらまりいはショウに聞いた。

「大抵は一日もすれば大丈夫だろ。そうじゃなかったら俺が見てくる」

「私も――」

「もしもの話。今は下手に動かない方がいい」

立ち上がろうとしたまりいを座らせ、ショウは自分の食事に手をつける。

わからないことはたくさんある。黙々と食事をとりながら、ショウは一人思考の渦の中にいた。

どうしてシーナはこの世界にやってきたのか。どうして彼女は名前を偽っていたのか。言葉や文化の違い等、数をあげればきりがない。

そもそも異世界という言葉ですら疑わしいのだが、本人がそう言ってるんだ。そうなのだろう。少なくともこいつは嘘をつけない。この旅を通してショウはそれをはっきりと認識していた。

もしかするとこの旅は、私情なのかもしれない。だったらシーナを同行させるべきではないだろう。

『確かにお前は強いし賢い。だがな、所詮お前はまだ子供なんだ。

知らないことのほうが多すぎる。無理に強がろうとするな。父親の姿を追い続けるのもどうかと思うぞ？』

ふとミルドラッドで言われた言葉を思い出し、ショウは頭をふってそれを打ち消す。自分が未熟だということはわかってるつもりだ。おじさんが言っていることもわかる。だけど――

「俺はフロンティアを見つける」

思わず声に出してしまいショウは慌てて口を押さえた。何をムキになっているのだろう。そんなこと、口に出さなくても決めていたじゃないか。

「……もう寝るか。明日も早いしな」

そっぽを向き、照れ隠しをするように呼びかける。だが話を聞いていたであろう少女からの返事は返ってこなかった。

「シーナ？」

視線をやると、そこにはうつらうつらと船をこぐ少女の姿があった。どうやら眠ってしまったらしい。

苦笑すると荷台にあった毛布をかぶせ、ショウはまりいの元を離れた。

Part，31

ふと目を覚ますと辺りはまだ暗かった。
「ショウ……？」
目をこすりながら、まりいは少年の名を呼ぶ。だが返事をするはずの少年はそこにはいない。
何かあったのだろうか。座っていた場所から立ち上がり、もう一度辺りを見回す。その際に毛布がぱさりと落ちた。それはショウがかけてくれたものだったのだが、まりいがそれに気づくことはなかった。
「ショウ？」
もう一度名を呼ぶ。返事は返ってこない。
……もしかして置いていかれたの？　そんな不安がまりいの胸をよぎる。だがそれは一瞬のこと。弓と矢を身につけると、まりいはその場を後にした。

霧はいくぶんか晴れたようだが暗いことに変わりはない。だからと言って懐中電灯があるわけでもなく。したがって手探りで歩いていくしかない。
（使えるかな）
目を閉じて片手を胸の高さにやる。もう片方の手で本を抱え、呼吸を整えると言葉を紡ぐ。
「月の精霊よ、我は汝の加護を求める者なり。我にその力の欠片（かけら）を与えよ」
それは数時間前に読んでいた術書に書きつづられていた言葉だった。
『早い話が力を発揮するためのセリフ。言っている間にイメージがわくことってあるだろ』
昨日言った少年の台詞を思い浮かべながら光をイメージする。目

を開けるとそこには淡い光の球があった。
「……できた」
まりいは安堵の息をもらす。弱々しくて小さな光。風に吹かれれば消えてしまいそうな小さな光。それでも何もないよりはずいぶんましだ。
「ショーウ、どこにいるの？」
小さな灯りを頼りに少年の名を呼ぶ。やはり返事は返ってこない。
（……一人）
ふと頭をよぎった考えにかぶりをふる。
施設の時もそうだった。ずっと一人で寂しくて。仲良くなれたと思っても離れ離れになってしまって。信じたくても信じられなくて――
見えない恐怖を打ち消すかのように本をぎゅっと抱きしめる。
違う。ここは空都（クート）。子供の頃とは違うんだ。ショウは私の話を聞いてくれた。私を受け入れてくれた。あの人達のように私を置き去りにしたりはしないはずだ。私だっていつまでも子供のままじゃない。
「ショウを捜さなきゃ」
嫌なことを思い出して立ち往生している場合じゃない。
バサバサッ。
物音がしたのはその時だった。
何？　森が騒ぎ出した。行ってみよう――
物音の正体。それは獣の咆哮だった。
例えるならば、それは獅子。いつかの時とは比べものにならないくらいのたくましい体躯。それと絡みあっているのは肩から血を流した少年。
どうして怪我をしているの！？　私に助けることができるの！？
考えればきりがなかった。でも彼が――ショウが血を流していることは確かだ。

迷っている場合じゃない。早く助けなきゃ。まりいは矢をつがえた。
以前はただ怯えることしかできなかった。でも今度こそは――
ザシュッ！
獣がうめき声をあげる。
「……？」
ショウは自分の身に何が起こったのかわからないもなんとかして体を起こす。それを確認すると、まりいはできるかぎりの声をふりしぼり叫んだ。
「ショウ、早く逃げて！」
「バカっ！　逃げるのはお前だ！」
ショウが叫び返した時にはもう遅い。
「ガルルル……」
獅子は視線をショウからまりいの方に移す。その瞳に映るのは確かな殺意。さっきの一矢で精一杯だったのか、まりいは足がすくんでうごけない。その矢は獅子の背に深々とささっている。
獅子がまりいめがけて襲い掛かってくる。もう駄目だ。襲われてしまう。まりいはぎゅっと目をつぶった。
「シーナっ！」
……本当に？
動かない体に対し、まりいの頭の中はひどく冷静だった。目をつぶったまま、本で見たもう一つの言葉を紡ぐ。
「光に宿りし精霊よ、我は汝の加護を求める者なり」
ここに来るまでに覚えたもう一つの術。それはショウが扱うのが難しいと言っていたものだった。
「汝の力の欠片（かけら）を我に貸し与えよ」
やってみるしかない。私は今までとは違うんだ。
「……招雷！」
雷鳴がとどろき地面に向かって落ちていく。
焦げ臭い臭いが辺りに広がる。成功はした。だが当たったのは獣

ではなく隣の樹木だった。
獅子は動かずまりいの方をじっと見つめていた。予期せぬ攻撃に警戒しているのかつかず離れずの距離を保っている。
「光に宿りし精霊よ、我は汝の加護を求める者なり。汝の力の欠片を我に貸し与えよ」
本を見ながら同じ呪文を唱える。当たらなかったのならもう一度やるしかない。
一時は警戒していた獅子も攻撃をしてこないとふんだのか再び襲いかかってくる。
「……招雷！」
ライオンが飛びかかってきたのと術の詠唱が終わったのはほぼ同時だった。
ピシィィィ！
雷が背の矢に当たり、獣が体をのけぞらせる。だがしばらくするとその動きも弱くなっていく。
獅子は動かない。
動かない獣と近づいてくるショウの姿を確認するとまりいはその場に崩れ落ちる。
「シーナ！」
少年の声に、まりいは意識を手放すことを拒否する。だめ。ここで倒れたりしたらまた足手まといになってしまう。
「このバカっ！」
「ショウ、怪我は大丈夫なの！？」
ショウの怒声とまりいの声が重なる。あまりにも真剣な表情にショウは台詞をのむも、『怪我』という言葉にああ、と納得したようにうなずく。
「怪我なんかしてない」
「だって肩から血が――」
「俺のじゃない。そいつの返り血」
そう言ってショウが指差したのは先ほどまで奮闘していた獅子だ

った。よく見ると獣の腹部には背中とは違う傷がつけられていた。
「……じゃあ私がこなくても大丈夫だったってこと？」
呆けた声でつぶやくと、『そうだな』という少年のそっけない言葉が返ってきた。
「そろそろ出発できそうだったからな。気晴らしに歩いてたらこいつに遭遇したんだ。運が悪かったな」
そんな言葉もまりいの耳には届かない。
「襲いかかられた時はどうなるかと思ったけど落ち着いて対処すればなんてことなかった。それよりもだ。お前はなんで――」
「……ばかみたい」
「お前な――」
のみこんだ言葉を再び言おうとして、ショウは絶句する。
まりいは泣いていた。
「なんで、いなくなるの」
目をこすりながらまりいはショウを問い詰める。
「お前が寝てたからだろ？　俺も散歩がてら見回りに行っただけだったし」
「私の時は一人で出歩くなって言ってた」
「お前一人だとまだ危なっかしいからだろ。俺はちゃんとそれくらいの判断はつけられる」
そう言いながら、ショウは内心動揺していた。もっとも表面上には出してなかったためそれがまりいに伝わることはなかったが。
「……また一人になるかと思った」
取り残されるんじゃないかって。いらない子供だって置いていかれるんじゃないかと思った。両親の時のように。
ショウは何故まりいが泣いているのかわからなかった。
まりいが泣いているのを見たのは今日で二回目。前の時はわかる。自分が異世界からきたということを、異質のものであることを打ち明け、なおかつそれを受け入れてもらえたことでほっとしたのだろう。だが今回は違う。自分がいなくなっただけでなぜ泣かれなけれ

ばならないのか。そもそも荷物は置いたままだったし、仮に置き去りにするとしても、ちゃんと水と食料を渡すくらいの配慮はする。
結局まりいの涙のわけは考えてもわからなかった。ただ言えることは。
（村に行くしかないよな）
きっと疲れているからこんなことになったのだろう。まずはちゃんとした場所で休むしかない。
「霧も晴れた。もどるぞ」
そう言って馬車の方を視線で促す。だがまりいはついてこようとはしなかった。
「……ない」
「え？」
「立てない」
さっきの一件でまりいは力を使い果たしていた。今は気力で話をしているに過ぎない。
だったらはじめから来るなよ。そう言ったところで無駄なんだろう。本来なら怒鳴りたいところなのに、彼の口から出たのはため息となんとも言えない笑みだった。
「ちゃんとつかまってろよ」
そう言うとショウはまりいを抱えあげる。途端にまりいは顔を真っ赤にさせた。
「離して！　少したてば歩けるから！」
「立てないのにどうやって歩くんだ。今は大人しくしてろ」
「……っ」
ショウの腕の中でしばらくは抵抗するも、時間がたつにつれ大人しくなる。
「シーナ？」
静かになったまりいを見て、ショウはため息と苦笑を深くする。
今度はちゃんとした場所で休ませてあげないと。村についたらあの人はどんな顔をするだろう。

そしてまりいは別の場所で――別の世界で目を覚ます。

Part，32

「まりい、起きなさい」
自分を呼ぶ声にまりいはうっすらと目を開ける。
「……？」
そうだ。獣を倒した後に眠ってしまったんだ。また彼に助けられたのだろうか。だったら悪いことをしてしまった。
「ごめんなさい。ショウ……」
だがそこにいるのは栗色の髪の少年ではない。
「何寝ぼけてるの」
呆れ顔で立っているのは数年前からまりいが住居を共にする女性だった。
「つかさ、さん？」
「朝ごはんできてるから早く着替えてきなさい」
彼女は椎名つかさ。まぎれもない、まりいの儀母だった。
つかささんがいる。まぎれもない、ここは現実。
ショウがいない。あれは夢だったのだろうか。それとも――
「まりい？」
「……はい」
夢とも現実ともおぼつかないまま、まりいは義母に返事をした。
『この世界があなたにとって何なのか。それは私では答えられません。あなたが夢だと思うのであればそうでしょうし、逆もしかりですから』
かつて水の精霊が語った言葉を思い浮かべる。あれを夢にはしたくない。でもこうしてここに――地球にいるという状況はなんなのだろう。
「顔色が悪いわね。今日は休む？」
制服を着て台所のテーブルについたまりいに義母が声をかける。
実際、まりいの顔色はすぐれなかったが当人は気に留める様子もな

く食事に手をつける。
「大丈夫。なんともないから」
「本当に？」
「本当」
本人がこう言っている以上、何を言っても無駄だ。つかさは説得をあきらめ義娘と共に朝食をとることにした。
「まりい、今日はすぐ帰れる？」
そう言ったのはまりいが朝食を食べ終えた時だった。
「特に用事はないけど」
「そう……」
彼女にしては歯切れの悪い返事にまりいは首をかしげた。どうしたのだろう。いつもならすぐに用件を言うはずなのに。
「学校が終わったらすぐに帰ってきて。でも無理はしないこと。具合が悪かったら先生に言って早退するのよ？」
念をおすつかさにただならぬ気配を感じ、まりいはこくこくとうなずいた。
あんなにたくさんの出来事が、たった数時間で済まされてしまうなんて。やはりあれは夢だったのだろうか。
やはり夢と現実ともおぼつかないまま、まりいは靴を履いた。玄関のドアを開けると、その先にあるのは見慣れた光景。
「まりい、おはよっ」
「おはよう、由香ちゃん」
友人の声に、まりいはあわてて笑顔をとりつくろった。
アパートの階段を降りるとそこには友人がいて。二人して学校までの道のりを歩く。それはまりいにとってごくありふれた日常だった。
……日常？
だったら今までのことはどうなるの？　同じ年頃の少年や少女と出会って旅をして。時には獣と戦ったり時には何もない草原で野宿をしたり。普通に考えればまずありえない事態だが、まりいにとっ

てはそれも日常だった。
「顔色がよくないわね。何かあったの？」
つかさと同じことを言われ、まりいは苦笑した。本当にそんな自覚がなかったのだ。強いて言えば――
「夢をみたからかな」
あんなことがあったから。夢と現実の境目がわからなくなって混乱してしまったんだ。
「夢って前に言ってた？」
「うん」
まりいは由香にことの一部始終をかいつまんで話した。男の子と出会って旅をしたこと。自分と似た容姿の女の子と友達になってお城へ行ったこと。全てを話すと由香は大きなため息をついた。
「スケールの大きな夢ね」
「そう思う」
お互いに顔を見合わせて笑う。
本当に壮大な夢だった。ショウとシェリアに会って三人で旅をして。おまけに領主の館で大立ち回りを演じてみせたのだ。でもそれは夢。現実ではそんなこと、自分にできるはずがない。
……本当に？
「まりい、それ何？」
「え？」
「首のところで光ってるように見えたんだけど。見間違いかな？」
何のことだかわからず、まりいは由香の視線をたどる。
視線の先にあったもの。それは、まりいの首もとで光るペンダント――アクアクリスタルだった。

夢の中であるはずのものがどうして実在するの？　制服の中にしまったペンダントを見つめながら、まりいはずっと自問自答していた。

あれは夢ではなかったの？
「椎名」
名前を呼ばれ、顔をあげる。そこにいたのは担任の教師だった。
「今日の当番だったよな。放課後職員室に来てくれ」
その言葉でまりいは自分が日直だったことを思い出す。
「顔色が悪そうだな。大丈夫か？」
本日三回目の台詞に、まりいはただただ苦笑するしかない。そんなに私って頼りないのかな。空都（クート）ではたくさんのことができるようになったのに。
「無理なら坂井みたいに他の誰かに頼んでも――」
「大丈夫です。ちゃんとできます」
「そうか。じゃあ放課後頼むな」
去りゆく教師にまりいは小さくうなずきを返す。大丈夫。これくらい一人でもできる。空都でもできたんだ。これくらいできないはずがない。
だがそれは、まりいにとっては誤算となった。一人ではなく二人だったのだから。
「ああ、椎名も来たな。これ二人で今日中にとじといてくれ」
呼び出されたのは、まりい一人ではなかった。
まりいの通う中学では日直はクラスの男女が一名ずつ名簿順に受け持つことになっていた。したがって、『え？』と声が重なったのもなんら不思議ではない。渡されたプリントの束と同じ声を発した少年を、まりいは交互に見つめた。
「冊子作るの手伝ってくれるんだろ？　本当なら日直の坂井と椎名のはずだったけどお前がひどくやりたがってたから代わってくれって頼まれたって言ってたぞ？
じゃあ頼むぞ、大沢」
教師の言葉に、大沢と呼ばれた男子生徒は引きつった笑みを返した。ちなみに『坂井』とは本来まりいと日直を共にすることになっていた男子生徒の名だった。

荒々しくドアを閉めた少年に、まりいは内心怯えていた。どうしたんだろう。何かいけないことをして怒らせてしまったのだろうか。そもそもこの人とはさっき顔を合わせたばかりなのに。

もっとも少年が怒っていたのは本来ならばまりいと共に仕事をすることになっていた友人のことについてなのだが、まりいの知るところではない。

「……運ぼうか。これ」

ようやく怒りがおさまったのか、そう声をかけてきた少年にまりいはこくりとうなずく。

黒い髪に同じ色の瞳。漆黒でもなければ赤毛でもない、ただの黒。背もそれほど高くはなく、かと言って低いわけでもない。特徴がない――強いて言えば身長のわりにややあどけない顔立ちをしている、それが特徴だろうか。大沢という少年は典型的な日本人そのものだった。

「重いだろ？　半分持とっか？」

プリントの束を抱えながら大沢がまりいに声をかける。

「……いえ、いいです」

まりいとしては、そう言うのがやっとだった。これくらい一人でもできる。周りに迷惑をかけてはいけない。

すると大沢の足が止まった。何事かとおずおずと顔を上げると、何を言うでもなく静かにまりいをにらみつけている。

それから先の行動は早かった。びくびくするな。同じクラスなのだからもっと普通に話せ。終いには、まりいの持っていたプリントを強引に奪い取りずんずんと前を歩く。それはいつかのショウとまりい、そのものだった。

（もしかして、いい人なのかな）

少年の後姿を見ながら漠然と思う。少なくとも悪い人であればまりいの荷物を持ってくれたりはしないだろう。

（頑張らなきゃ）

ショウとだって時間をおけばちゃんと話すことができたのだ。大

丈夫。ここでだってできないはずがない。まりいは小さく拳を握った。
やがて少年が足を止める。
「椎名、あのさ……」
視線を足元に移し、決まり悪そうに頭をかいている。どうしたんだろう。また何かあったのだろうか。
「大沢く――」
声をかけようとして――突然襲ってきた息苦しさに、まりいはいてもたってもいられなくなる。それは幼い頃からずっと感じていた痛み。
どうして。これから頑張ろうとしていたのに。
「椎名！」
少年の声がひどく遠くに聞こえる。ゆっくりとくずれゆく自分の体を、まりいは他人事のように感じていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9453a/

ＳｋｙＨｉｇｈ，ＦｌｙＨｉｇｈ！

2010年11月2日03時15分発行